# Ⅲ．調査研究

# 〈資料紹介〉　名古屋城三の丸遺跡の旧石器

都築暢也

## 1．はじめに

名古屋城三の丸遺跡は、戦国期の那古野城に関わる遺構や近世名古屋城の上級家臣団の屋敷地として著名な遺跡である。また、近世の大規模な整地層下で弥生時代から古墳時代の住居跡が検出され、複合遺跡であることも明らかになっている。

愛知県教育委員会や㈶愛知県埋蔵文化財センター（以下、センター）、名古屋市教育委員会の数次にわたる発掘調査では、当初から旧石器の存在が予想され、事実、センターの行なった県合同庁舎地点では、細石刃核が出土している(1)。

今回紹介する石器は、新文化会館（県図書館）地点から出土したが、報告書掲載(2)から漏れたものである。

## 2．出土層位

今回報告する石器は、いずれも弥生期以後の遺構掘削に伴って出土している。１はＳＫ102埋土、２はＳＺ02東、３は近世の整地層からそれぞれ出土しており、残念ながら原位置を保っているとは考えられない。

名古屋城三の丸遺跡の所在する名古屋台地は、洪積世後期に堆積した土砂が隆起して段丘化したものといわれる(3)。この「熱田層」と呼ばれる黄褐色のシルト・粘土で構成される洪積層の上部には、有機化による（淡）褐色を呈する漸移層が形成され、上記の細石刃核がこの層から出土したことを考慮すると、これらの石器もこの漸移層から出土した可能性が高い。

## 3．出土遺物

１は、長さ10.6cm、幅7.4cm、厚さ3.8cm、重さ156.1ｇで、溶結凝灰岩を石材(4)としているが、外面の風化が著しく進んでいる。外形は尖頭器状を呈し、表面中央には縦に一条の稜が走る。断面は部厚い三角形をなす。表面右側には大きな剥離面を残し、先端部を除く側縁には裏面の主剥離面からの調整剥離が行なわれている。表面左側では３回以上の剥離を加えた後、同じく裏面からの調整を先端部から基部までの縁辺部に細かく行なっている。裏面には３面の横方向からの大小の剥離面を残し、先端部と基部右側に不規則な調整剥離を行なっている。

２は、長さ3.4cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm、重さ7.2ｇを測り、石材はチャートである。裏面の一部に自然面を残し、裏面からの粗い調整剥離を行なっている。小型尖頭器か削器の未製品と考えられる。

３は、長さ4.0cm、幅2.3cm、重さ27.8ｇを測る黒曜石製の石核である。

## 4．小結

原位置を保たず、出土層位も明らかでないにもかかわらず、結論を急ぐのは余りに大胆であるが、注目すべきは、１の尖頭器様石器である。石核の可能性もあるが、側縁に不規則ではあるが調整剥離が施されていることをみれば、掻（削）器と考えてよいであろう。さらに、横位に剥離された素材を用いていること、断面が部厚い三角形を呈し舟底状の稜を有すること、裏面はほとんど未加工であることなど角錐状石器との共通点が認められる。ただし、角錐状石器の多くが長さ４～７cmほどの小型の石器で細身の形状を示すのに対し、この石器は10cm以上とかなり大型で幅広である点が大きく異なる。この尖頭器様石器の類例は極めて乏しく、小型品ではあるが、千葉県の大袋小谷津遺跡で角錐状石器を伴って１例認められる(5)。

三の丸遺跡から２km南に位置する名古屋台地上の竪三蔵通遺跡からはナイフ形石器が出土し、笠寺台地上の見晴台遺跡では角錐状石器が１点出土している(6)。これらのことを考え合わせると、今回紹介した石器は、尖頭器出現以前の後期旧石器時代後半期前葉のナイフ形石器文化に由来するものとしておきたい。

註(1) 梅本博志編　1990　『名古屋城三の丸遺跡（II）』㈶愛知県埋蔵文化財センター

(2) 梅本博志編　1990　『名古屋城三の丸遺跡（I）』㈶愛知県埋蔵文化財センター

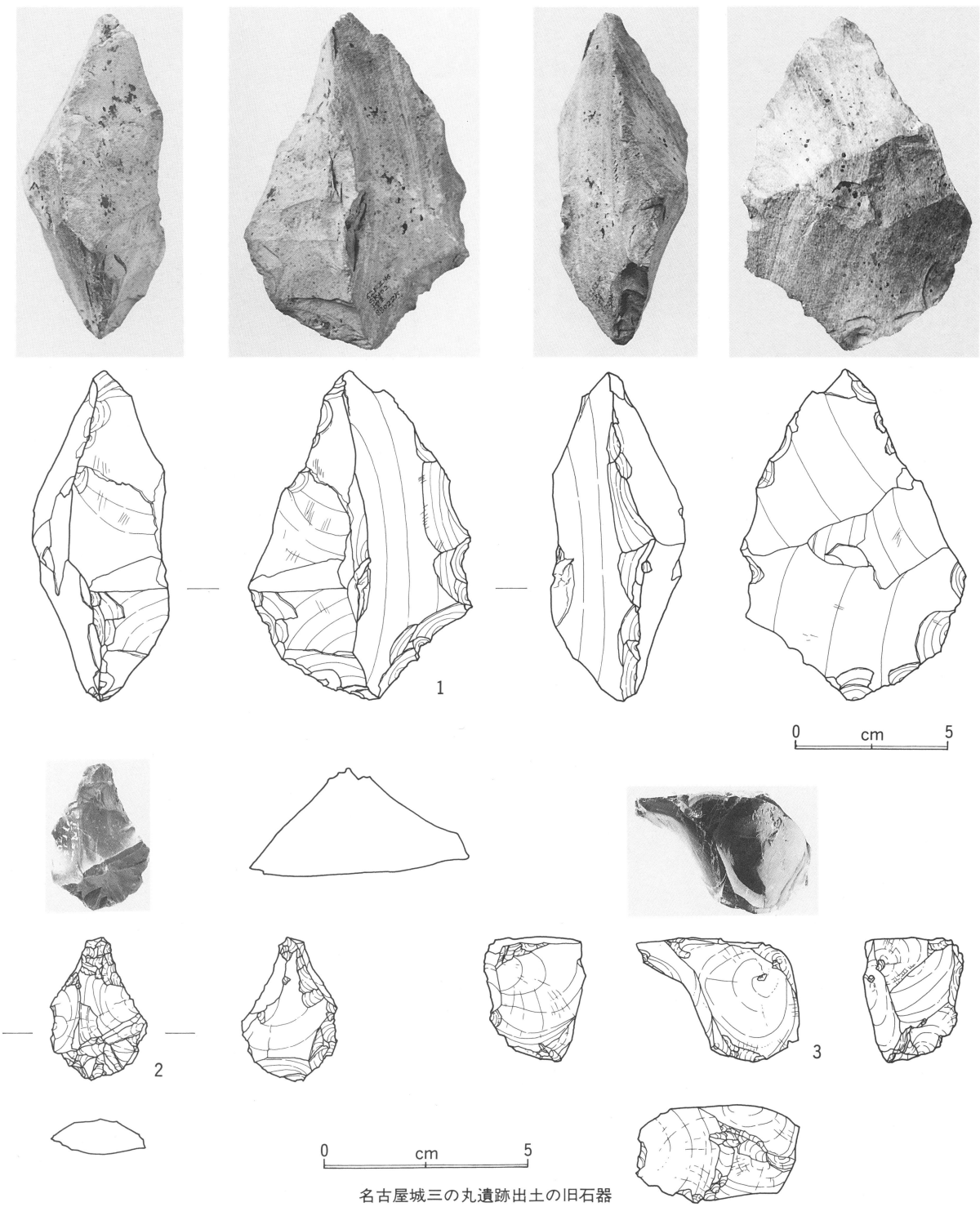
(3) 井関弘太郎　1977　「一宮の地形と地質」『新編　一宮市史　本文編　上』

(4) 以下、石材鑑定は、当センターの堀木真美子による。

(5) 酒井弘志他　1994　『千葉県成田市公津東遺跡群』成田市公津東土地区画整理組合・㈶印旛郡市文化財センター

(6) 川合剛　1993　「見晴台の旧石器」『名古屋市見晴台考古資料館報　みはらし　No.165』　名古屋市見晴台考古資料館

謝辞　小論を記すにあたり、大参義一・加藤安信両氏には多くのご教示を得た。




名古屋城三の丸遺跡出土の旧石器

# 弥生集落史の地平(1)

## ——地域社会への接近をめざして——

石黒立人

### 1．環濠集落と囲郭集落

**環濠集落と囲郭集落**　弥生時代の集落を景観的にみれば、平野部においては点在する微高地上における建物（竪穴建物・高床建物など）の集合ということになる。その場合、建物どうしが近接して密に集まっている集落と、建物どうしが間隔をおいてまばらになっている集落の二つを基本的な姿として考えることができる。

しかし、この二つの姿はひとつの地域で同時期に並んで存在することはほとんどなく、時期的に交互に出現する。同じ地理的位置にある集落（いちおうここでは、これが系譜的に連続したムラであるか否かを問わないことにしておく）でも、時を経るなかで建物が密集したりまばらになったりしている。そして、密集する時にはよく、集落のまわりに溝がめぐらされる。

集落のまわりをめぐる溝は、大きなものでは幅４～５m、深さ２m以上という、到底ひとが飛び越えられないような規模を有する例があり、これなど防御の役割が十分果たせるものとして、ふつうは「溝」を「濠（壕）」と呼び換えて、濠がとりまく集落という意味で「環濠集落」と呼ばれている。しかし、なかには容易に飛び越えられるほど溝が小規模であったり、防御とは異なった役割が考えられる溝もあり、その場合にはとくに区別をつけないで「環溝集落」と呼ばれることもある。ただ、どちらにしても、溝を中心とした把握に限定されていることに変わりはない。

私は、溝以外にも柵などで囲まれた例のあることを考慮して「囲郭集落」と呼んでいる。すでに小野忠熙氏は「囲郭村落」と呼んでいるが、「囲郭集落」もそれに近い用語である。

**高地性集落と囲郭集落**　瀬戸内地方や近畿地方に分布する高地性集落と呼ばれる丘陵上などの高所に立地する遺跡には、通常の生活が営まれる居住区を中心に面的に展開する継続的な集落と、一時的に出現し特異な立地を示す集落とがある。通常、戦いに関係すると考えられているのは後者である。しかし、一部を除いて後者には環濠などの構築物が伴わないのが普通で、そうした傾向は近畿地方より瀬戸内地方に顕著なようだ。環濠をめぐらす高地性集落の場合には、立地差を無視すれば低地の囲郭集落とほとんど変わらない内容を備えるものがあり、これなどはあえて高地性集落と呼ぶ必要がないものといえる。

この点で、ただ高いところにある集落と、高い所にありかつ囲郭集落としての構造を有するものを同列に置くことはできないだろう。問題の焦点は、高地性集落が一般的な集落のあり方であれば、それをあえて「高地性」と呼ぶ必要はないということ、そしてどうしても「高地性」と呼ばなければならないとすれば、それは低地の集落とセットで存在して初めて「高地性」と呼べるのだということ。高地に対しての低地という、このトポグラフィックな対関係が前提されて初めて高地性と言えるのだという点が、往々にして忘れられているようだ(2)。

## 2．囲郭集落の系譜と出現時期

さて、囲郭集落は水田稲作の開始とともにではなく、少し時間をおいて成立したようだ。最近ではとくに縄文時代の稲作論議が活発だが、遅くとも縄文時代晩期から弥生時代初期にかけて（あるいはそれ以前に）水田稲作が北部九州を中心に普及したことが確実であるとしても、環濠集落の出現についてはそれより時期的に下り、遠賀川式（板付式）土器の成立を大きくは遡らないと考えられる。

それは、大陸に系譜がたどれるものとして、時代の画期に、その当のものとして典型的に出現したものであり、社会の発展段階に即応して内在的要因を前提に出現したものとは考えられない。造営主体が何であれ、文化的には移植されたものと考えることが現状では妥当なところであろう(3)。

西日本における大陸系要素としての囲郭集落は、弥生時代前期のうちには伊勢湾地方にまで分布を拡大する。愛知県豊橋市白石遺跡で発見された囲郭の溝は、現在までのところ弥生時代前期においては太平洋岸で最も東に位置する。

**東日本の類似例**　最近、東日本の縄文時代晩期の集落の中に柵囲いの例が存在することがわかってきた。また北海道では縄文時代中期の環濠集落？（静川遺跡他：環濠内部から発見された住居跡が少数であり、通常言われる集落とは様相が異なる）さえも発見されている。西日本で囲郭集落が出現する遥か以前に北の地域で、稲作と全く無関係に環濠による区画が出現しているとすれば、囲郭集落の性格を絞り込むこともなかなか容易ではないものとなる。

さて、そうなると弥生時代前期の東日本における柵囲い集落として注目されている秋田県地蔵田B遺跡の位置づけはどのようになるのであろうか。これまで地蔵田B遺跡については、遠賀川系土器が出土していることや墓域と居住域が分離していることなどから西日本系の囲郭集落の影響下に成立した柵囲い集落であると判断される場合もあったが、果してそのような理解でよいのであろうか。

今のところ、縄文時代の環濠集落は以後に続かないようだし、本州では未発見なので一時的な類例と考えられるのでいちおう除外できるとしても、柵囲い例に関しては西日本の弥生時代初期と近接した時期であること、環濠集落も濠だけでなく、土塁・柵などが複合した構築物によって囲まれていると考えられるのであれば、柵のみが分離して用いられることも考えられないでもない。

囲郭集落の現在までの調査例をみる限りでは、西に環濠集落、東に柵囲い集落という分布差を認めることは可能である。だが、その背後に系譜差が想定できるのかどうか、つまり柵囲い集落にも西とは別系譜の大陸系要素を認められるのかどうかについては、大陸を含めた多くの資料の具体的検討が必要であろう。

**伊勢湾周辺の事例**　弥生時代前期に始まった囲郭集落という集落形態は弥生時代を通して断続する。以下に伊勢湾地方の事例を若干整理しておこう。

弥生時代前期の囲郭集落には、低地に位置して１重の溝によって囲まれるものと台地の縁辺に位置して２重（多重）の溝で囲まれるものとがあるが、どちらも溝は全周せず弧状部分と自然流路または台地の縁辺がつくる区画が居住域の範囲になっている。全周形態は近畿地方まで分布するにとどまり、伊勢湾地方では発見されていない。

後者に属す名古屋市高蔵遺跡は、居住域の拡大にあわせて溝が２条づつ平行して掘削されている。同じ形態の四日市市大谷遺跡・永井遺跡が外縁で

も径が100mに満たないのに比べて高蔵遺跡のそれは外縁ではないのに100mほどあり、しかも遺跡付近に水田適地が存在しないにもかかわらず他に比して遺跡範囲の広い点で注目される。前者の名古屋市月縄手遺跡や春日井市松河戸遺跡は、溝が全周しないで弧状に部分的に囲むだけで、居住域の拡張も認められない。土器編年上の年代幅は認められるが、基本的に単発の集落であろう。

中期には全周するだけでなく(4)、柵や逆茂木を配する朝日遺跡（名古屋市西区・西春日井郡清洲町・同春日町・同新川町）や、溝の配置を部分的に複雑にする甚目寺町阿弥陀寺遺跡のような例も出現する。環濠に構造物を組み合わせて複雑化する様相が伺える。

後期には集落自体の小規模分散化のなかで囲郭集落の数も急増することになるが、平面形態は中期例に比べて単純となる。なかには、名古屋市三王山遺跡、知多市大廻間遺跡（丘尾切断型）などのように、海の見える（海に近い）丘陵上に立地するものがある。これらは瀬戸内海に面する「高地性集落」と景観的な類似性を強く示す例であるが、一般的ではない(5)。

この時期の環濠には、名古屋市瑞穂遺跡・同見晴台遺跡のように、幅５m、深さ４mという大規模なもの（まさに“濠”）があり、しかも特徴的なＶ字断面を呈している。どちらも台地上に位置する点で、地形的・地質的な特質であるかもしれないが、その掘削土量が膨大であることは決して無視できないだろう(6)。

### ３．区画された集落

**集落の中を区画すること**　集落のまわりを溝で囲むこと自体は弥生時代でも普通のことだが、集落の中を溝で区切る例はそれほど多くはない。これまで明らかになっている例を探してみても、伊勢湾地方では朝日遺跡以外には知られていない。他の地域でも長野県松原遺跡、奈良県唐古遺跡、同岩室・平等坊遺跡の他には余り知られていない。関東地方でも多くの環濠集落が調査されているにもかかわらず、そうした可能性があるのは折本西原遺跡だけのようだ。

むろん集落の中が区画されているかどうかは、遺跡を広範囲に調査しなければ明らかにならないことではあるが、他地域を含めてこれまで判明している遺跡をみる限りでは、時期的には弥生時代中期以降でしかも大集落である場合に集落内を複数の溝が走る傾向があるように思える。

朝日遺跡では弥生時代中期に囲郭集落を営み、環濠によって囲まれると考えられている北居住域以外の地区にも大溝が掘削されている。南居住域では北東から南西方向に向かって幅３～４m、深さ1.5mほどの溝が少なくとも２条検出されており、中期中ごろまでは溝としての形状をとどめている。北居住域の環濠も一部の区間はいちどきに埋め立てられたりしているが、その他の部分はなかなか埋まりきることなく溝状の窪地として残っていたことが確認されており、弥生時代中期を通して地表を区切る溝によって集落がいくつかの居住区に区分されていた可能性が高い。そうした居住区の性格については、たとえば朝日遺跡の玉作工房が溝で囲まれた地区で検出されていることを参考にすれば、やはり他と区別されるような一定の役割を担った単位の人々や生活の単位をなす人々それぞれが占地したと考えるのが妥当だと思う。

奈良県唐古遺跡では、伊勢湾地方東岸北部を主要な分布圏とする内傾口縁土器が特定の地区から多数出土している。もともと近畿圏であまり出土しない遺物であり、唐古遺跡に集中すること自体が地理的関係によるものである可能性が高いのであるが、実態はどうであれ特定の集落の特定地区が特定の地方につながっているということ（何ら

かの社会的・経済的関係の存在）をうかがわしめている点で注目される。

**区画の集合としての集落、または＜都市＞**

一つの集落が複数の単位に分かれることは、別に区画が無くとも竪穴建物の分布からある程度推定できることである。しかし、そのように識別された単位と、ここで述べたような区画施設によって区切られた地区に分居する単位とでは、当然性格は異なることになろう。普通の集落が区画を持たないでいくつかの単位に分かれる場合、それはただ建物相互の単純な距離関係であって、それ以上に遮るものは無いのである。それに対して単位の間がなんらかの構築物で区切られるということは、実際の距離関係以上に強く、深く区別されていることになると考えられる。

区画にもとずく居住区の形成については、区画施設を伴う複数の居住区があらかじめ秩序だって設けられているところに人々が移り住んだのか、自らが居住する場所のまわりに区画を設けて他から画したことによって居住区が形成され、後にそれが連結していったのか、さらにその他にいくつかのパターンが考えられるのかなど、想像はいくらでも膨らむが、いずれにしてもそのどれかに確定できるにわけではない。

ただ、朝日遺跡の場合では、もともと広範囲に広がった集落が区画によって秩序づけられることと、墓域の確定および超大形方形周溝墓の出現が連動していると考えられることから、人々が勝手気ままに居住区を連結させていったのではなく、全体を統制する意志が働いていちどきにそういう形になったのだと考える方が理解し易いだろう。そして、もし居住区が整然と並ぶのであればそれはまさに＜都市＞といった観を呈することになるのだが。

地域を代表するような中心的な大集落が、その外部との区画だけではなく、その内部さえもいくつかの単位に区切られていることは、そうした区別を必要とする異質な部分が集まることによって大集落が構成されているということを暗示している。

こうした区画単位それぞれの規模は弥生時代前期の単純集落とほぼ同等である場合が多い。もっとも、弥生時代前期から中期にかけては集落の規模自体が大きくなっているようで、上に挙げた単位も前期と同じ水準の質を備えたものではあっても量的に規模が大きくなっている可能性はある。仮にそうであるとしても、それにしても本来なら一つの集落を形成するだけの単位が、単独で集落を形成せず、複数集まって大きな集落を形作る点は、まさに集落の質に関わる点として重視してよいだろう。

特定の大集落を構成する単位の規模、とくにその量的側面については、大集落の多くが長期継続集落であることから同時期の建物数がよくわからないために、把握が難しい。それでも、いちおう内部に区画をもたない集落を参考にして考えてみることはできる。

内部で廃棄物処理をしている弥生時代前期の囲郭集落の平均的規模を2,500㎡で４～６棟(神戸市大開遺跡を参考）として、内部に廃棄物処理空間をもたない大集落がこれより密集しているとすれば､2,500㎡に10棟前後の棟数が想定できるであろうか。また、竪穴建物１棟が30～50㎡の床面積として、屋根を地面にふきおろす部分を含めて、１棟あたり150～200㎡が必要であるとして、朝日遺跡にこれを当てはめるならば、弥生時代中期は10万㎡に600～500棟となる。このうち、中心居住区は５万㎡で、300～250棟となる。ただし、中心居住区に広場や大形建物が存在すれば、当然のことながら棟数は少なくなる。

**＜都市＞とは、そして農村とは**　異質な部分からなるが決して排他的ではなく有機的に全体を形作る、そして機能的に分化し、かつ重層化（複雑化）した集落は、その凝集性・複雑性という点で、まさに＜都市＞の原型（原都市）を見せているのではなかろうか。

だが、朝日遺跡を始めとする大集落が整然とした街区を構成しない点をみて否定するむきもあるかもしれない。しかし、だからといって何故「都市」ではないといえよう。

どのようなものを「都市」とするかという考え方が、「都城」出現以降の都市像、あるいは世界史的な都市像に規定されているとするならば、その立場で都城以前の都市がイメージできるわけがないと、私は思う。

つまり、それは定義の問題にとらわれてしまっているといえる。定義は他の研究領域、分野から借用する場合には明確であるが、そもそも当の借用がなぜ可能であるのかは問われないことが多い。また、当該事象のいくつかを定義に相応するものとして抽出する場合でも、そこではすでに定義が前提されているのであり、トートロジーになる。自然科学的な定量化された定義なら別だが、われわれ考古学において個別の現象から抽象する場合には、しかも物質的なモノを対象にしない場合には、共通認識的な規定以上に即自的に規定することなどほとんど不可能であろう。

もともと語彙に限りがあるなかで、複雑な現象を整理し表象させるために用語を他にもとめることも仕方のないことであると考えるが、しかしその点とその語の明確な規定をすることを一度に行うことはできない。だからこそ、それは特定の現象を抽出し整理するためであって、ゆえに定義とは別の問題だと考えたいが・・・。

さて、朝日遺跡には玉作工房が存在し装身具類の生産を行っていたことは確実である。また、骨角器の生産も行っていた。そしてとりわけ朝日遺跡を特徴づけているのは膨大な貝層の形成である。大規模な貝層の形成は決して農業的基盤の脆弱さを表示しているのではなく、海産物加工品の生産を長期にわたって行っていたことを示していると、私は考えている。ただし石器のうち、磨製石斧やサヌカイト製打製石器類については朝日遺跡における製品化を示す資料はけっして多くはない。その大部分は搬入されたものであって、これらについて直接生産を強調する必要はないと考える。

いずれにしても、こうした遺跡で出土する遺物は内容豊富であり、しかも他の集落に比べて多くの品目の直接生産も行っている。複数の生産部門を抱える必要があったわけだ。

内部が区画された集落とそうでない集落とでは、集積、あるいは蓄積された情報の量だけでなく、その質も異なる。朝日遺跡のように内容豊富な出土遺物に彩られる遺跡がある一方で、集落の規模は決して小さくはないが、めぼしい出土遺物が生活用具や少量の生産用具に限られる遺跡もある。たとえば朝日遺跡と近在する阿弥陀寺遺跡との対照的な関係。両者は、複数の生産部門を有する大集落と単一の生業に強く規制された通常の集落(農耕集落）という集落関係の図式を典型的に示している。

すなわち、大集落の出現が、その必要とする食糧の確保をもあわせて要求する（食糧の安定的確保が大集落成立の前提ともいえるが）ために、分村を、つまり農村や漁村を成立させるのだと。

むろん、まず農村が成立し、それが大規模化したとするほうが、実はわかりやすい考え方である。ところがよく考えれば、それは集落の量的な側面への注目にすぎないのであり、現象としては集落規模の単なる変化の枠内にとどまっていることになる。そこから大集落の複雑性を導くことはできない。

だから、私はそのように考えるのではなく、＜都市（的集落）＞が最初から＜都市（的集落）＞として成立した可能性を、量的な問題ではなく質的な問題として、生産集落／消費集落という対比のなかで、個別的には廃棄物処理の方式を指標のひとつとして考えてみたいのである(7)。

おそらくこうした図式は弥生時代前期にも成り立つだろう。さらに遡って、縄文時代においても成り立つかもしれない。

## 4．中心をもつ集落あるいは居館

**集落における“核”の認知**　佐賀県吉野ケ里遺跡では、弥生時代後期に「外濠」と呼ばれる大きく外まわりにめぐらされた濠に加えて、それより内側に小さくめぐらされる「内濠」が存在することによって、集落がトポグラフィックに同心円的に、あるいは入れ子状と呼べるようなありかたで区分されている。これは同格の居住区が並存するのとは異なり、それらとは区別された中心となる居住区の存在を示すものとして注目される。

このような入れ子状に区画が設けられる例は、中世後半以降の城郭変遷史の中で、環郭式といわれる様式、あるいは総構えといわれる様式と一部類似する。それら城郭の中心には領主の居館が位置することになるが、吉野ケ里遺跡では同様に首長居館の存在が想定されている。

吉野ケ里遺跡で発見された中心を囲む溝の発見例は、これまでのところ愛知県はおろか伊勢湾地方においてさえ無い。けれども、弥生時代中期の朝日遺跡が、複数に区切られた部分が単に等質的に並存しているだけであるとは、超大形方形周溝墓の存在をみると、到底そのようには考えられない。

朝日遺跡のように集落内を区切る溝が集落を構成する部分の存在を示しているにとどまらず、それら単位が存在すると同時に中心の存在をも示しているように私には思われる。

そして大集落が、

①単に大きくなったのではなく、周辺から人々を引き寄せる“力”（もちろん食料の安定供給が基礎条件として必須であることは言うまでもないが、居住条件として単にそれが沖積低地内の微高地という安定した自然環境であったというだけであったとしても）が内在するからこそ継続して大規模でいられる、

②自然成長的に大規模化するのではなく人為的（計画的）に、ある意味で必然的に大規模化したと考えられる、

③廃棄物を個別分散的に無統制に内部処理するのではなく、一定の規制のもとで内部または外部で一括処理する、

④その凝集性による建物の密集によって、失火等による類焼に対する安定性を低下させるからそれへの対処が必須となる、

⑤いくつかの部分に区分された集落として、それを統合するだけの力が働かなければ分解してしまうと考えられる、

など、大集落としての継続性を保つために多くの条件がクリアーされなければならないとするなら、そこに全体を統制し方向づけるだけの意志を想定し、それを中心（あるいは都市の中枢）と考えることもできる。

かりに中心となる意志が集団の意志を超えないとしても、まずもって集団としての意志を代表する部分として異なる水準で存在しなければ、他を排除するべく区画することも行われることはないだろう。

しかし、中心を囲む溝をもつ集落が把握できるかどうかはまず調査面積の広狭に左右される。通常規模の発掘調査で判断材料を得ることは難しいからである。また、我々自身が保持する認識能力

の程度に左右される場合も往々にしてあるだろう。

**中心、あるいは居館**　ところで、弥生時代の集落が大：小、複雑：単純、継続：断絶とは別に、中心：周縁という関係で整理できる可能性についてはどうであろうか。

ここで、中心を居館と呼び替えれば、現在までのところ古墳時代については居館の存在が確実視されている。また弥生時代後期についても北部九州では吉野ケ里遺跡を始めとして比恵遺跡など方形環濠例について居館の可能性が言われている。東海地方でも静岡県伊場遺跡が居館である可能性が高い。だが、それ以前についてはどうであろうか。

そもそも、弥生時代の社会がいかなるものであったかについては、集落の形態学的な分析だけではなかなかわからない。大きい集落が小さな集落を衛星的に配していたのか、それともその逆に小さな集落がそれよりも大きな集落を衛星的に配していたのか、その判断を集落からのみ導くことは難しい。あるいは、小さな集落が機能分化を遂げていれば、それらを全体として組み上げる役割をもった集落が中心として存在することを仮定して、そうした集落を探すことができるのであろうか・・・等。

弥生時代前期の集落を［複雑：単純］で区分することは難しい。［大：小］と［継続：断絶］の識別ができるのみである。このうち、［大］と［継続］が凝集性と安定性を示しているとするならば、伊勢湾地方では高蔵遺跡が該当する。

弥生時代中期には［大：小］、［継続：断絶］に［複雑：単純］を加えた識別が可能になる。そして［複雑・大・継続］を揃えている集落は主要な水系を単位とする範囲に１、２遺跡程度存在する。

弥生時代後期にはまた弥生時代前期のように［大：小］と［継続：断絶］が遺跡差の指標になり、［複雑］は影をひそめる。

現状では、弥生時代中期についてはすでに述べたように中心の認定がある程度可能なようである。それに対して、前期と後期は認定要件が不十分である。それでもいちおうの可能性を考えるならば次のようになろう。しかし、その場合にも当然同一地域単位に属する集落の比較検討が前提になり、地域を超えた普遍的な規準を設けることはできない。

伊勢湾周辺地方において弥生時代前期には立地の特異性から高蔵遺跡に注目したい。中期は各水系での基幹集落の抽出が必要であるが、尾張地方では五条川水系に朝日遺跡、庄内川水系に西志賀遺跡を、伊勢地方では安濃川水系の納所遺跡、鈴鹿川水系の上箕田遺跡などを挙げることができる。後期には遠江地方の伊場遺跡を最有力候補として挙げることができる。

矢作川水系の中根山遺跡は他に類を見ない沖積地に面する丘陵上の遺跡である。低地の岡島遺跡に対する高所にある遺跡として、瀬戸内地方などにおける高地性集落とは別の意味をそこに与えることができるのではなかろうか。この点は三重県松阪市川原田Ｂ遺跡なども含めて、低地との比高が大きな集落の分布を、低地の集落とセットで押さえる必要がある。低地の集落を抜きにした論議は無意味である(8)。

こうした集落立地の高低という対比が可能であるとすれば、近畿地方の淀川水系で認められる高所の集落と低地の集落というあり方との関係が気になるところである。高所のムラと低地のムラという対関係が、「高城」と「水城」とは別に新しい様相、つまり＜中心＞と＜周縁＞という価値を有する様相を帯びることになる。「高い」から高いのか、そうではなく「高い」から低いのか、その逆は・・・・・など。

このように中心の在り様については、弥生時代

前期と後期は集落群（地域）のある一点に中心があり、弥生時代中期は大集落に中心があると言えようか。あとは、こうした図式がどれだけ適応性を有するかどうかということだ。

## 5．紛争への接近

**見える戦いと見えない戦い**　弥生時代に武力を伴う紛争があったことは、おおかたの認めるところであろう。佐原　眞氏が石鏃の大形化と高地性集落の出現が連動していることを、香川県紫雲出遺跡の報告において注意を促して以来、そうした考え方が普及した。だから、弥生時代の武器形を呈する道具の多くが武器とみなされるということも、現在では当然のことのように考えられている。囲郭集落が防御に工夫を凝らした集落であるという見方も、この延長にあることはいうまでもない。しかし、高地性集落が、その全てが紛争に関係してはいないように、囲郭集落もそのすべてが紛争発生に対処して防御を固めたと断言できるわけではない。反対に、囲郭集落の存在しない時期に果して紛争が無かったと言えるのかどうかさえも確定していないのが現状である。

伊勢湾地方に限定していうならば、確実に武力紛争が考古学的な事象として現れるのは、紀元前後の一時期だけである。2世紀後半から3世紀にかけての一時期にも武力紛争の発生が伺えないこともないが、前者のそれは、これまで私が各所で言及してきたように、きわめて広域的であること、その前後の地域文化の内容に大きな変化が生じていることなどから、かなり深刻なものであったことが想定されるのである。だが、紛争が武力を伴うものであったとして、その武力の基礎としての軍事編成の内容について触れ得る資料が無いことも事実である。

人類が戦いに対して親和的であったか非親和的であったかについて確たる証拠はない。現在では弥生時代が争乱の時代として強調され、そのため縄文時代があたかも平和（牧歌的）な時代であったかのように思われているが、人間が集団生活をするなかで心理的な葛藤が生じ、それが外部化して軋轢に転化することが、決して珍しいことではなく、かえって通常の事態であることを考えるなら、むしろそうした負荷を解消するための紛争の発生は避け得ないことであったのではなかろうか。

したがって、問題は紛争の形態と内容ということになるが、弥生時代には恒常的に戦いがあったといえるのであろうか。とすれば、囲郭集落の間欠的出現はその戦いの規模に関係するということになるのだろうか。

つまり、戦闘の規模と社会的レベルが囲郭集落の推移と形態を規定した。言い換えれば、単発的な、小規模な、小範囲の戦いと継続的な、大規模な、広範囲に及んだ戦いの、とくに時間的な長短の差が、囲郭集落の存在形態を規定したということか。

この点において囲郭集落は、弥生時代という外的に条件づけられた固有の時代に出現したという、その意味でまさに必要性において存在したものではあったが、単に集落形式として形式的に存在する場合と、特定の状況（乱）に対応して存在するという二つの局面が考えられるのである。そしてこの二つの局面は、列島規模においては時間的に平行し、かつ分布的にはズレを伴いながら存在した。すなわち、初期には跋行的に拡散し、その後には地域それぞれの社会的状況に対応して消長した。だから、地域社会のあり方と抜きにした一般論が意味をもたないことは明らかである。

**戦いの変化**　縄文時代に、一部の時期・地域を除いて弥生時代のような囲郭集落は存在しない。それに対して、弥生時代には囲郭集落が西日本を

中心に一般的に存在する。このことは、囲郭集落という形態が弥生時代になって出現したもの、言い換えれば文化的事項として出現したことを示している。ということは、紛争の形態・内容も文化的項目として新たに西日本にもたらされた可能性を示唆する。

この点で、弥生時代が農耕社会であり、故に戦争が始まったという考え方は、農耕社会一般が対立解決手段としての戦争を内在させていたということになり、問題が多い。近年の稲作問題の進展は、農耕と戦争をとりあえず分離できることを示しており、囲郭集落の出現も同様に農耕との関係が一義的ではないようだ。つまり、農耕一般ではなく、どの地域でいつの時代・時期に、そしてどこから、という限定が伴うのである。

戦争には内戦と外戦がある。後者を国家の成立以後における国家間戦争、前者を同一社会内部における紛争が武力を伴い規模が拡大したものとすれば、日本列島の集団が世界史（中国史）に登場するまでは、そして世界史に登場して以後も一定の期間は基本的に内戦であったということになる。しかし、仮に内戦であったとしても、その当事者は、おそらくいくつかの水準に分かれていたであろう。また、倭人伝の記載にある「クニ」の存在を認めるならば、弥生時代にはすでに外戦が始まっていたということもできる。

以上の点については、次のように要約できよう。

縄文時代に囲郭集落はなく、弥生時代の西日本にはほとんどの地域に囲郭集落が存在し、古墳時代には特定の集落のみ囲郭集落に化する（通常の集落とは距離を置いた首長居館の広範な展開）という推移は、対立が文化内容に現れない段階→対立を解決する手段としての戦争が諸階層を問わず個別に現実化する段階→対立の解決手段としての戦争はあってもそれが特定の階層に限定され、あるいは制度化していた段階、というように。(1995.1.5)

**註**

(1) 本論はこれまで私が書き連ねてきた雑文の延長にあり、内容的に重複している部分のあることも否定できない。しかし、今後の方向を個別集落史と地域史に向けるに際して、いちおうの整理も無駄ではないと思い、以下に試みた。

(2) こうした混乱の発生はその多くが、ある個別の現象を認識の出発点にして、その単純化によってモデルが作成（帰納）され、次にそのモデルが新たな出発点となって大多数の現象に適用（演繹）されるということへの基本的理解の欠如に起因している。

モデルが一般性を獲得するのは、モデル自体の説明能力によるというよりも、多くはモデルが現実対象の複雑性を圧縮していることによっている。つまり、モデルの作成された背景が切り捨てられるか、あるいは忘れられることによってモデルの一般性が獲得されているのだということが、再度忘れられていることによる。結局は、ある認識の空間的背景の隠蔽である。

(3) 弥生文化における在来の要素・外来の要素・固有の要素という3区分では、外来要素であることは確実である。その出現が遠賀川系土器成立を多少遡ったとしても、だから在来の要素であるということにはならない。それが縄文時代に大きく遡る場合についてもやはり大陸との関係が問題になるであろう。

さて本論では「移植」という穏やかな表現をとった。だが、文化が人間集団によって担われるものであることからすれば、移植されたのは固有の文化伝統を有する集団であるという方がよいのかもしれない。

(4) 伊勢湾地方において濠の全周が連続的に確認された弥生時代中期の遺跡は実際には存在しない。現実には、大規模な遺跡ほど全周が確認される可能性は低下するといえる。

(5) ある地域の集団が新しい土地において集落を営もうとする場合に、同じ景観の地を選好する可能性はどうだろうか。後期の遺跡立地の特異性を考えるときに、在地における内在的な変化として考えるか、あるいは他地域の集団が流入した可能性を考える余地を残すかであるが、私は後者をとりたい。トポフィリア的な視点が可能かどうか気にかかる。

(6) 丘陵や台地に立地する遺跡は沖積低地に立地する遺跡に比べて、濠が大規模である。しかし、沖積低地では地下水位の問題があり、幅に比べて深さの確保は難しい場合が多いのであろう。しかし、逆に濠底が湛水すれば視覚的な深さは無限になるから、視覚的な条件も加味する必要があるのかもしれない。水がないから「壕」であるとは、そういう条件に合致した遺跡に妥当するのであり、一般性を有するものではなかろう。

(7) こうした考え方においては当然のことながら「集落群からなる社会」が前提される。それを地域社会と言い換えてもよい。この意味で、＜都市（的集落）＞とは一般的な定義の問題ではなく、個別の集落群をいかに分類するかという点に関わるものと考えている。

(8) 再び言うが、低地に分布せず高所だけに集落が立地する場合には、それは環境の問題であり、社会的な問題とはならない。＜高＞と＜低＞があって初めて分類が可能になるのであり、そこで価値の高低を問うことが可能になる。

(9) それぞれの集落を点として、その空間的配置の内的関係を読み取るのが現状のセツルメントアーケオロジーとすれば、本論もその枠を完全に脱し切れていない。しかし、私はそれらの時間的に微分とも積分とも判断がつかない構成に対してだけでなく、遺跡の時間的な地点移動を認めること(それら地点を固有の集落史として包括すること)から地域社会を描き出すという方法にも、同様に違和感を覚える。

集落とは、果たしてそれほど単純でつかみ易いものなのであろうか。それらが複合している地域社会も、単に集落群に過ぎないのであろうか。

そこにはまさに、加減を方法的基礎におく様式論と同様の均質空間からなる世界が、パラレルに存在しているように、私には思える。あたかも当然であるかのように。

**参考文献**


小野忠熙　1969「集落と住居」『新版考古学講座４　原始文化（上)』、雄山閣。

石野博信　1973「高城と水城」『古代学研究』68。

原口正三　1973『高槻市史』考古編。

森岡秀人　1986「高地性集落」『弥生文化の研究７　弥生集落』、雄山閣。

石黒立人　1986「弥生時代尾張地方の囲郭集落について」『年報　昭和60年度』、財団法人愛知県埋蔵文化財センター。

武末純一　1990「北部九州の環濠集落」『乙益重隆先生古希記念論文集　九州上代文化論集』。

石黒立人　1990「断章　弥生集落研究をめぐって」『長野県考古学会誌』61・62。

下条信行　1991「弥生時代の玄海灘海人の動向－漁村の出現と役割」『横山浩一退官記念論文集』。

安藤広道　1991「弥生時代水田の立地と面積」『史学』62－1・2。

伊丹　徹　1992「弥生時代中期から後期の集落」『神奈川県下における集落変遷の分析』、神奈川県立埋蔵文化財センター。

石黒立人　1994「「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」を考える」「考古学フォーラム」４。


**補記**　脱稿後、１月14日・15日の両日に佐賀県で開催された埋蔵文化財研究集会に参加する機会を得た。

弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の変化を多面的に検証しようという意図で企画されたもので野心的であり、それなりに有意義ではあったと思う。しかし、残念に思えたのは、用語の規定・内容の問題が、一般的な問題にされていたことである。

「環濠集落」「首長居館」などの用語が、地域性を帯びないまま使用されていたことはある意味で仕方のないことかもしれないが、個々の遺跡のもつ個別の様相をはめ込むには決して十分ではないだろう。もう少し地域に即した類型化がなされる必要があったのではないかと思えた。

あとはやはり年代の判定、つまり広域的な並行関係の不確定さがいつもつきまとうのであるが、仮に年代をおくとしても、すぐさま列島規模でものを考えるにしては、地域を媒介する中間概念に対する配慮が、私を含めて十分整備されていないという感想をもった。

結局、どの水準で議論をするのかというところで、資料集積の濃淡による齟齬が往々にして生じるということだけにとどまらない、大規模なシンポジウムにつきまとう陥穽なのかもしれない。

いずれにしても、こうしたシンポジウムに身軽に参加できた我々にとっては、その企画・運営に携われた関係者の方々に、ただ感謝の気持ちを捧げることができるのみである。　（1995．１．16）

**追記**　阪神大震災は現代先進都市の弱点を明らかにした。だが、こうした事態もけっして今に始まったことではなく、過去から何回となく繰り返されてきたことでもある。そのたびに過去の人々はそれを乗り越えてきた。だから現代のわれわれがそれを乗り越えられないわけがない。

むろん、過去の人々すべてに未来があったわけではない。かえって火山噴火による被害の方が突発的で避け得ない苛烈さがあった。九州南部の縄文早期文化の壊滅はその最たるものであろう。

つまるところ、過去の人々が災害にどのように対処したのか、ということを我々がいかに問題にできるか、が問題なのだ。災害が自然であれ人為であれ、それを乗り越えることができた人々がいたからこその歴史であるとするならば、集落史、地域社会史もそうした観点から語られる必要がある。いままさにその時だ。　（1995．３．13）

# 尾張の一地域における古墳時代後半期の古墳

## ——富塚古墳の墳丘測量結果を基にして——

牧　謙治

### 1．はじめに

尾張北西部を代表する古墳群として浅井古墳群はよく知られるところである。浅井古墳群は、浅井北・浅井南の両古墳群によって構成されるのであるが、浅井古墳群のうちよく知られているのは一宮市尾関地区を中心に集中している浅井北古墳群である。この古墳群については、『新編　一宮市史　資料編３』で報告されており、古墳の主体部及び墳丘の測量、発掘調査の実施されている古墳も少なくない。

一方、同じ浅井古墳群でも浅井南古墳群では古墳の測量の行われたものは浅井神社古墳の石室のみで墳丘の測量図にいたっては現存するものはない。そこで、墳丘の現存する富塚古墳の測量調査を行い、古墳研究の基礎的データを提供するとともにそれを基にして富塚古墳について考えていきたいと思う。

また、付近には今伊勢古墳群や門間古墳群が分布しており、さらに平成６年度より発掘調査の開始された門間沼遺跡でも古墳がまとまって確認されている。これらの古墳群と浅井北・南の両古墳群とを含めた古墳時代後半期の尾張の一地域の古墳のありかたについても考察を加えていきたいと思う。

尚、ここでいう古墳時代後半期とは、５世紀後半から７世紀末までとする。また、本稿は二部構成をとりまず富塚古墳の測量調査報告を行いそして先に挙げた各古墳群について論考を行うものである。

### 2．富塚古墳測量調査報告

#### 2－1．調査までの経緯

富塚古墳は、愛知県一宮市大字富塚字郷中1747に位置し、昭和42年に一宮市の指定史跡となっている。当古墳の所在する地域は、北東２kmに浅井北古墳群、南西３kmに今伊勢古墳群があり、富塚古墳は浅井南古墳群のなかに属する。この古墳については過去に本格的な調査はされておらず、基礎的なデータが不足している。さらに、浅井南古墳群のなかで墳丘を留めているものはほとんどなく、富塚古墳は貴重な存在といえよう。また浅井南古墳群自体の調査例及び資料も多くない。その上、富塚古墳の墳丘も年々改変していくという。そこでこの唯一現存する富塚古墳の墳丘測量を行い今後の研究の基礎的な資料とするため、さらに古墳の墳丘という貴重な文化財の保護に役立てるため富塚古墳の測量調査が行われる運びとなった。

調査は平成６年11月12日に実施し、調査に当たり一宮市博物館土本典生氏より御指導・御助言をいただいた。また、富塚町内会長さんをはじめとして地域住民の方々のご理解を得た。

調査は下記の方々の参加を持って実現した。

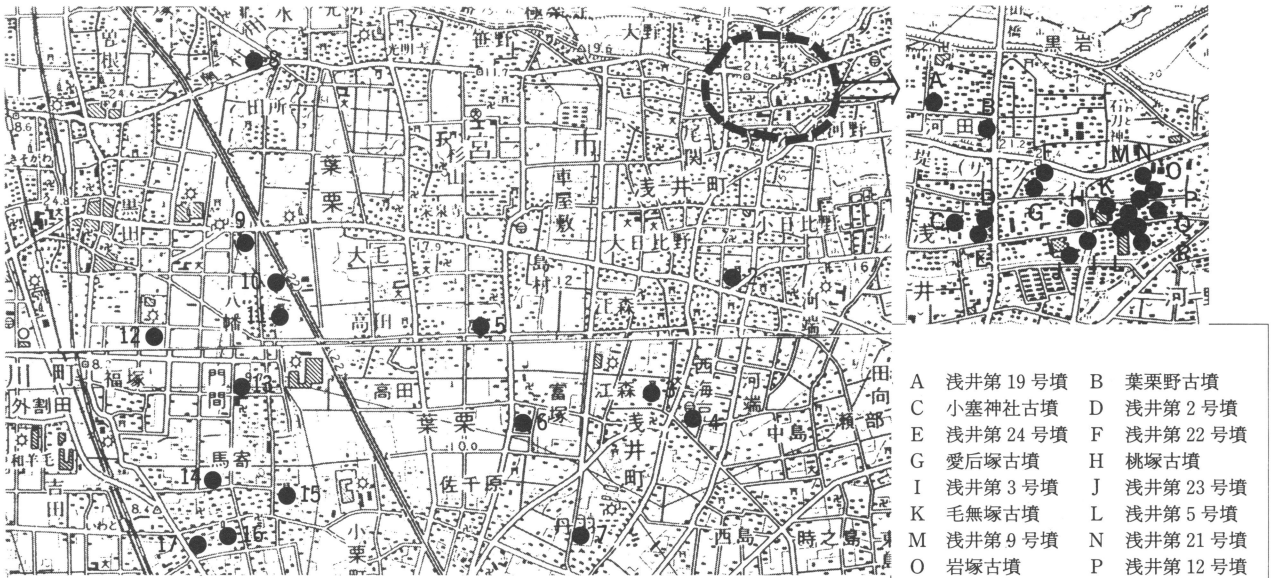
〔測量調査参加者〕

高橋信明・赤塚次郎・栗林典昭・西原正佳・飴谷　一・永井宏幸・原田　幹・織田眞弓・高田恵理子・牧　謙治

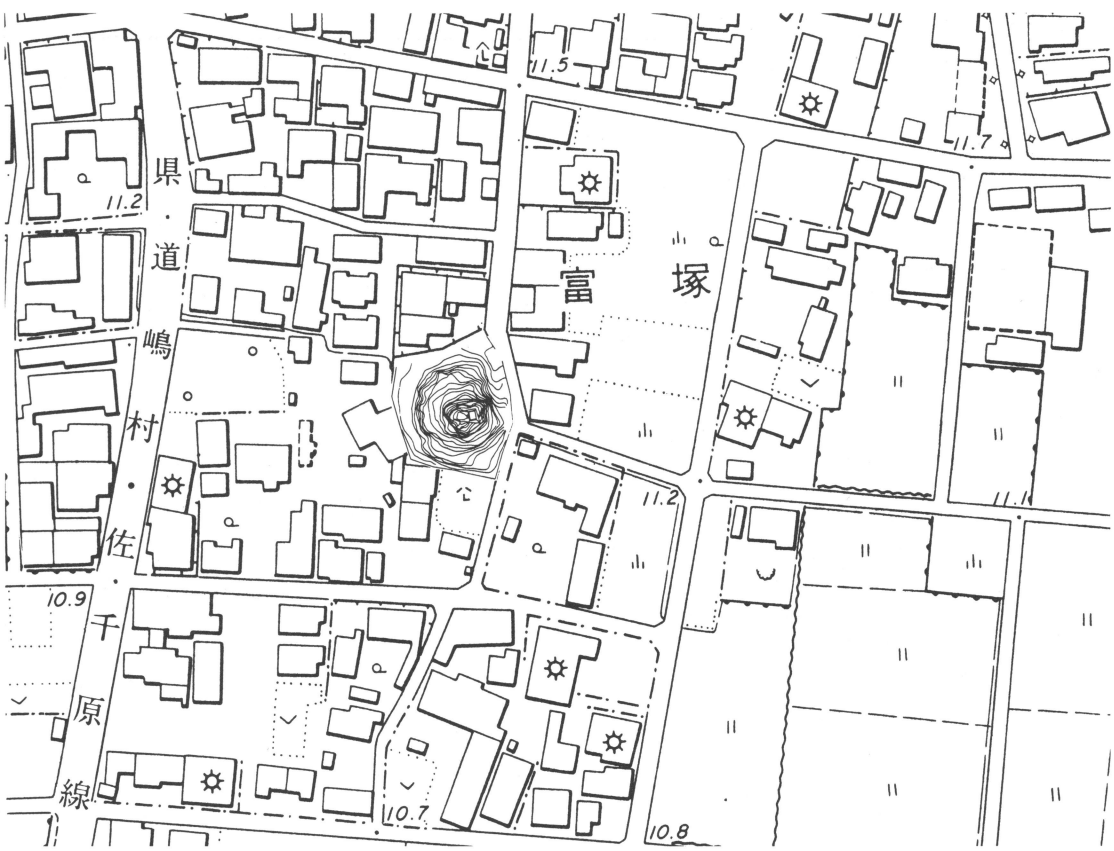
#### 2－2．富塚古墳の沿革

富塚古墳のある富塚地区は以前は葉栗郡富塚村であった。古墳周辺の現在の景観は、住宅及び畑地であり明治１７年の富塚村地籍図と比較してもあまり変化がない。富塚古墳及びその周辺は自然堤防上にありここを選んで住宅地や畑地としていたようである。

さて古墳そのものについてであるが明治17年の地籍図では「宅地」と記されている。ところが、




第Ⅰ図　主要古墳・遺跡位置図（1/50000、図中Ⅰの拡大は1/25000




第2図　富塚古墳位置図（1/2000）

昭和12年の土地宝典によると「天神社」と記されている。地域住民に話を聞くとこの古墳は以前より町内の神明社の土地であり昭和以前から天神社が祀ってあったということである。天神社は古墳の墳頂にあったが現在は神明社に合祀されている。また戦時中は町内住民の芋栽培地として利用され、町内の共有地となっていたようである。その後子供の遊び場として遊具等も置かれていたが古墳の東側に新しく公園がつくられ、古墳内の遊具は取り除かれている。昭和42年に一宮市の史跡に指定され富塚地区の町内会によって実質的な管理がされ現在にいたっている。

2－3．富塚古墳の現状と調査結果

上記に述べたように子供の遊び場になったり、住民の芋栽培用の穴が掘られるなどして所々に地形の改変が見られる。また、天神社があった墳頂は天神社の祠の礎石が残っておりコンクリートで固められている。さらに墳丘の土砂が流出した箇所は、コンクリートの杭や板が打たれている。古墳の外郭は周囲の住宅や道路への土砂の流出を防ぐためコンクリート板で土止めがしてある。墳頂には多くの樹木が生い茂っていたようであったが台風などで倒れ、その度に墳丘が改変していったそうである。しかし、全体的に墳丘の形はよくとどめていると思われる。

調査によって得られた測量図を観察するといくつかの特色が指摘できる。それを述べると、

①ほぼ円形を呈する墳丘部

②墳丘南側に存在する方形の突出部

③墳丘部東側の等高線の乱れ

以上3点である。次にこの3点について考察を加えていきたいと思う。

①ほぼ円形を呈する墳丘部

墳丘部は東側の崩れがひどいものの全体的には円形を呈し、良好に残存している。墳径約28mを測る。墳頂部が標高16mラインで囲まれた地点となる。そして、11mライン付近がなだらかなテラス状になり、11mラインより墳丘の高まりが始まるのを確認できるので墳丘部の裾は標高11mラインと考えられよう。よって、墳丘部の高さは5mと考えられる。

また、墳頂部がやや南東にずれており南東方向の12～14m付近の等高線が密になっている。墳丘の改変の可能性もあるが、本来の墳形は墳頂部自身が方形の突出部に偏っていたとも考えられよう。また、墳丘部の標高12～13mラインの間でなだらかなテラス状を形成しており、その前後で階段状に墳丘が形成されていくことが測量図より窺え、2段の段築構造があることが確認できよう。

②墳丘南側に存在する方形の突出部

墳丘部の南側には方形の突出部が付設されていることが測量図より確認できる。この突出部の規模は長さ約3.6m・高さ1m・幅14.2m・くびれ幅約14mである。測量図を見る限りでは墳丘部に比べ突出部はその形状をよく留めていると言えよう。

さてこの突出部が墳丘部に対する前方部であるのか、あるいは造り出し部であるのかという問題があるが、この突出部は墳丘部に比べて低平で、墳丘高5mに対して突出部の高さは1mと数値に開きがある。突出部の土砂流出の可能性が無いわけではないが測量図からはそのような状況は見られず、突出部については現状が古墳本来の形状に非常に近いといえよう。実測された数値より墳丘部と比較すると突出部は長さにおいて墳径の約8分の1、高さにおいては約5分の1となる。これは富塚古墳の突出部を墳丘部に対する前方部と考えうる域[1)]には達しておらず、よってこの突出部は古墳の主となる円形状の墳丘部に付設された造り出し部であると考えられよう。

③墳丘部東側の等高線の乱れ

全体が円形を呈する中で墳丘部の標高12～13mの等高線を描く部分だけが方形を呈している。地




第 3 図　富塚古墳測量図（1/200）

域住民からの聞き取りでは伊勢湾台風時に古墳の東側の土砂が流出したという情報もあった。等高線も11mライン以下で古墳東側に土砂の流出した状況を推定することもできる。これらの状況を総合すると墳丘の東側において土砂の流出による改変の可能性があるともいえよう。

しかし、早急な判断すべきではなく今後の調査の機会に結論は託したい。

以上の点を考え合わせ富塚古墳は造り出し付きの比較的大型な円墳と考えられよう。そしてその計測値をしめすと下記のようになる。

墳径約28m・高さ5mで南側に長さ3.6m・幅14.2m・高さ1mの造り出し部、主軸方向N−152°−W

外表施設等の葺石や埴輪の使用は確認されず、土器の散布も認められない。段築については、上記の通り2段築成を考えたい。また、周辺の状況より墳丘全体の形成については盛土によって行われているのではないかと推定される。内部構造および副葬品等については伝わっておらず不明である。

さて最後に富塚古墳の築造時期についてその性質から推測したいと思う。富塚古墳のもつ性質として次の点が挙げられる。

①浅井南古墳群の中に位置する古墳である。

②墳丘より埴輪が確認されない。

③墳径が30mクラスの大型円墳[2]である。

④墳丘高が高く、主体部として横穴式石室構造を持っている可能性がある。

以上の4点について、まず①は浅井南古墳群はそこに属する古墳より出土した遺物より形成時期を古墳時代後期[3]と考えられており、同じく浅井南古墳群に属する富塚古墳にも地域性の点から後期古墳の可能性の高さを裏付けることができるのではないだろうか。さらに②〜④は、まさに後期古墳を示唆する材料ともいえる。

よって後期古墳に富塚古墳は属し、他の類例[4]から6世紀代後半の可能性があるとしておきたい。

なお、富塚古墳には今回の調査では確認されなかった葺石、周溝の存在[5]が過去に記されている。それを今回の調査結果と照合するならば、富塚古墳は葺石のなされた周溝を持つ2段築成の造り出し付き円墳ということも可能であろう。しかもその規模は墳形30mクラスの大型円墳である。とすれば、6世紀代において当地方において相当な権力を持ち得た人物が存在し、そしてその人物が富塚古墳の被葬者ということになるのではないだろうか。

**註**

1）『前方後円墳集成』に記された帆立貝形前方後円墳の基準によると「前方部長が後円部径の4分の1以上で2分の1未満のものを目安にする」とあり、それを参考にした。

2）大形円墳の基準設定については『古代学研究』123　赤塚次郎氏「濃尾平野の円墳」を参考にして実施した。

3）『新編　一宮市史　資料編4』P56参照。

4）浅井北古墳群に属する毛無塚古墳は円筒埴輪を外表施設として採用している径38m・高さ3.5mの大形円墳であり、その築造時期は6世紀代前半より下がらないと考えられている。よって外表施設において埴輪の採用を確認することができない富塚古墳においては、毛無塚古墳よりも時期的に新しいと考えられよう。

5）一宮市教育委員会発行『一宮市の文化財』P75参照。尚、昭和48年発行にこの本は発行されており写真付きで富塚古墳の紹介をしている。その写真でも当時と現在とは墳丘の状況に違いが確認され昭和48年当時には確認できた葺石及び周溝が20年の歳月のなかで崩壊していった可能性は十分にあろう。

### 3．浅井、今伊勢、門間の後半期古墳について

富塚古墳が大型円墳であることは先程述べたが、富塚古墳と同時期の古墳が周辺にもあり、それらの古墳によって浅井南古墳群を形成している。他にも浅井北・今伊勢・門間の古墳群があり、門間沼遺跡でも５基の古墳が確認されている[6]。よって富塚古墳を個々の古墳と比較する前段階として各古墳群の持つ傾向について考える必要があるかと思う。ここでは立地・分布状況、墳形の状況より上記５群を検証し、考察することにより各古墳群の傾向を指摘したいと思う。

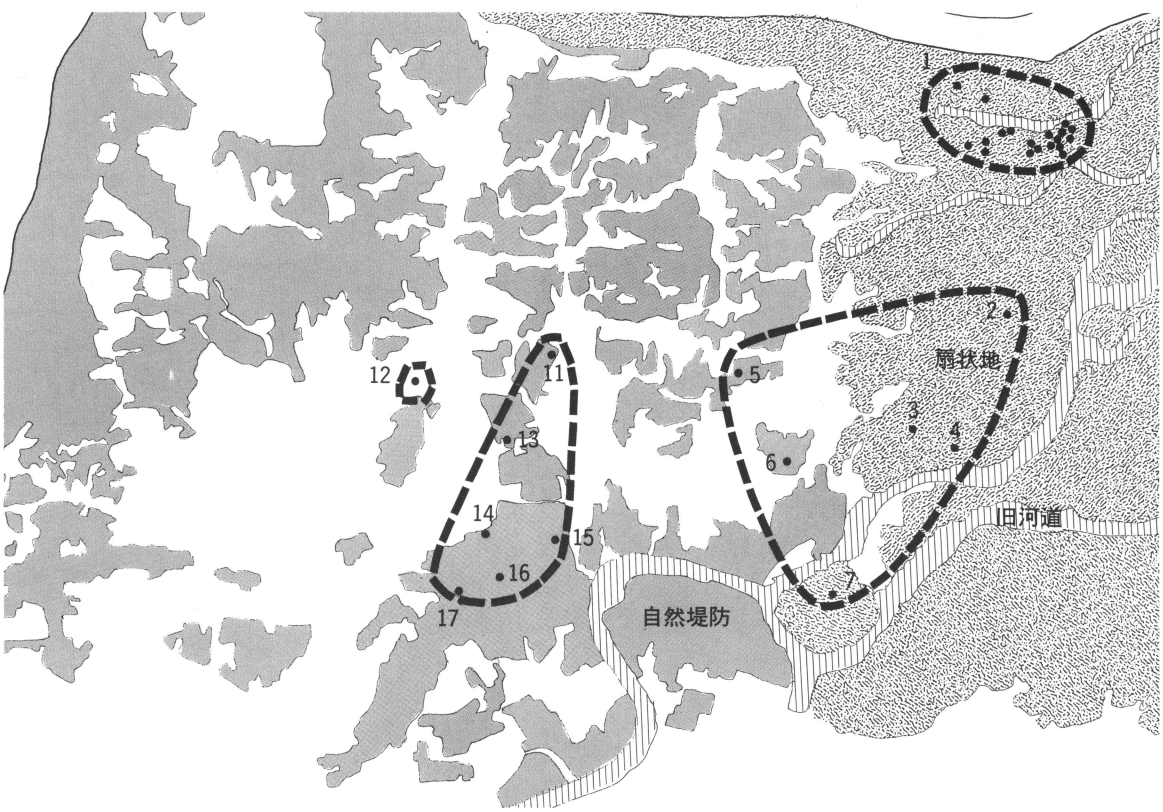
3－1．立地・分布状況

尾張北西部は往古より木曽川等の河川の氾濫や堆積作用により自然堤防とそれに伴う後背湿地、扇状地等が形成されてきた。その自然堤防上及び扇状地の先端部に古墳時代後半期の古墳を内包している遺跡が展開していることが第４図から確認できよう。

しかし、門間沼遺跡だけは例外となっている。これについては明治17年作成の門間村地籍図を参考にして当時の土地利用状況をみると、門間沼遺跡のあたりは畑が多くこのあたりが微高地であったと考えることができる。さらに門間沼遺跡では古墳の近辺に古墳時代の集落が展開するという他に見られない状況があり、立地の面で他の古墳群と異なった面をもっている。

またすべての古墳群に共通な条件として河川の流域に存在するということである。浅井北・南古墳群はいうまでもなく、門間沼・門間・今伊勢古墳群についても発掘調査・地名等[7]から古墳群が河川流域近辺に位置していたとの推測は可能であろう。これらの古墳群の成立に河川が大きな比重を占めていたと考えられる。

次に分布についてであるが、浅井古墳群という名称で浅井北・南古墳群が同じ枠組みで考えられている。しかし分布の面では第４図をみると河川




第４図　浅井・今伊勢・門間地区周辺の地形分類図（1/50000、図中の番号は第１図と同じ）

によって明らかに隔離されており浅井北古墳群は一宮市尾関地区に集中している。これは、尾関地区に集中する浅井北古墳群とそれよりさらに南に離れた浅井南古墳群と２つの勢力を分布の面から考えることができるのではないだろうか。また、今伊勢・門間古墳群については、１つのグループと考えることも分布の面から推定される。しかし、この分布の面においても門間沼遺跡は群集墳を形成する可能性を有しており、今後の調査結果により独自の古墳群を形成、或いは門間沼・門間・今伊勢を範囲とする古墳群を形成する可能性も秘めている。

以上をまとめると、①浅井北②浅井南③門間沼④今伊勢・門間といった４つのグループが立地・分布状況から浮かび上がってくるのである。

3－2．墳形

下記の表は各古墳群にどのような墳形の古墳が分布しているかをまとめたものである。浅井北古墳群については、他には例を見ない前方後円墳が採用されていることがわかる。小塞神社古墳、愛宕塚古墳、浅井21号墳の３基である。同古墳群は古墳時代後半期において急激に古墳の造墓がなされた古墳群であり、前方後円墳を権威の象徴として築く風習を受け継いだ集団が一宮市尾関地区に新しく台頭してきたと考えることもできよう。

一方、同じ浅井古墳群を形成する浅井南古墳群では、前方後円墳の分布は見られない。そして、他の古墳群には採用されてない方墳の分布を見ることができる。浅井神社古墳と大塚古墳の２基である。浅井北・南の両古墳群では互いに採用していない墳形の古墳を古墳群内に内包しており、この面からも両古墳群の成立には、歴史的背景の違いを指摘できる。

今伊勢古墳群は今回扱った古墳群のなかで唯一前半期に古墳が築造されている古墳群である。同古墳群では前半期において前方後円墳を採用している。

しかし、後半期では円墳のみの採用となっており今伊勢古墳群の主流となっている。今伊勢古墳群において前半期と後半期の古墳群の連続性を見いだすことはできず、今伊勢地区に両者を繋ぐ古墳等も存在しない。別の成立背景を考える必要もあるかと思われる。

円墳のみの傾向は門間古墳群においても同様であり、今伊勢・門間の両古墳群は同じまとまりと言えよう。

また、門間沼遺跡の古墳は同じ円墳を採用しているものの周溝を２重に巡らせており、外表施設によって今伊勢・門間の両古墳群とは異なった様相を呈している。以上のことから墳形の面からも前出の①～④のグループが存在することが確認できよう。

| | 前方後円墳 | 円　墳 | 方　墳 | 不　明 |
|---|---|---|---|---|
| 浅井北 | 3 | 16 | 0 | 0 |
| 浅井南 | 0 | 1 | 2 | 2 |
| 今伊勢 | 0(1) | 3(1) | 0 | 0 |
| 門　間 | 0 | 4 | 0 | 0 |
| 門間沼 | 0 | 5 | 0 | 0 |

第１表　各古墳群の墳形[8)]

以上、立地・分布状況と墳形から各古墳群の傾向をしてきた。それをまとめると次のようになる。

立地においてはほとんどの古墳群が自然堤防および扇状地上といった水田耕作等には適さない箇所に立地していた。しかし、門間沼遺跡の古墳群については集落のごく近辺に形成されており他とは違った様相があった。つまり、

①門間沼　②その他の古墳群

と言った傾向が見られるのである。しかし、共通点もあり河川の付近に古墳の分布が見られ以前より述べられてきた古墳群形成に対する河川の関わりの深さ[9)]を裏付ける結果が得られた。




第5図　岩戸・上町屋・西口社各古墳出土品（1/4　1～5西口社　6、8上屋町　7岩戸）

分布状況に置いては、浅井北古墳群がある河川の周辺にまとまっており浅井南古墳群と一線を画しており、同じように門間沼と門間・今伊勢の古墳群においては門間沼遺跡がまとまって古墳を内包しており門間・今伊勢の両古墳群とは違った様相を見せていた。ここでは明らかに

①浅井北②浅井南③門間沼④今伊勢・門間

と4つのグループに分類できるのである。

次に墳形による各古墳群の違いを見ると下記の傾向が確かに見られる。

①前方後円墳の採用が見られる浅井北古墳群

②方墳の採用が見られる浅井南古墳群

③円墳に2重の周溝の見られる門間沼の古墳群

④円墳のみ採用の今伊勢・門間の両古墳群

以上の条件からみたところ大きく4つの傾向をもつグループが浅井・今伊勢・門間の古墳群には存在することが解るのである。

さらに上記の傾向には各古墳群の歴史的背景が深く関わっていると考えられ、各古墳群の成立時期からも少々述べたい。

浅井北古墳群は6世紀前半頃にその形成開始時期を考えることができるが、この地域には6世紀より遡る遺跡は5世紀後半の須恵器や土師器の確認された同者遺跡のみで古墳時代になってから生活圏の成立した地域といえよう。

浅井南古墳群は、6世紀中頃が形成時期と考えられ、浅井北古墳群より遅れることになるのであるが分布、墳形による傾向が示すように浅井北古墳群の影響を受けたとは考えにくい。また弥生時代に遡る富塚遺跡や森下遺跡が当地に存在することから古墳時代以前より生活圏が存在していたことになり浅井北古墳群とは違った傾向を示すといえよう。

今伊勢古墳群は5群のうち唯一前半期の古墳を内包する古墳群である。前半期古墳の築造時期[10]は4世紀中頃から5世紀中頃と推定されている。その後継続して古墳は築造されず、その後岩戸、上町屋、西口社の各古墳がつくられた。上記3基の後半期古墳は一宮市今伊勢町に所在する石刀神社に所蔵される須恵器（第5図）によって6世紀前半から7世紀末に築造されたと考えられる。

今伊勢地区は福塚前遺跡など弥生時代から継続する遺跡が確認されており長期にわたり生活圏が形成されている。このことから考えると今伊勢古墳群に5世紀後半に築造された古墳が今後確認される可能性も十分にあるが、前半期と後半期の古墳がそれぞれ東西に分かれて造墓されている傾向が見られるので今伊勢古墳群を東西の枠組みで考える必要もあろうかと思われる。

門間古墳群[11]については古墳から出土した資料が得られないため形成時期を論じることは困難であるが先に述べた古墳群の傾向に於いて今伊勢古墳群と共通していることからほぼ同時期と考えておきたい。

門間沼遺跡の古墳群については発掘調査によって得られた資料により、5世紀後半に古墳群の形成をみることができる。近隣の今伊勢・門間の両古墳群より先行する時期であるが前期の古墳群の傾向では違いを見せており必ずしも影響を与えたとは言いにくい。

さらに、今伊勢古墳群の前半期に継続する時期が門間沼遺跡に確認されたことにより、この古墳群が門間・今伊勢地区の古墳群の形成にどの様な影響を与えたかは今後の調査の結果の上改めて論ずることにする。

**註**

6）(財)愛知県埋蔵文化財センター（1994）『年報』参照

7）大毛沖遺跡の発掘調査により伊冨利部古墳の北東に南西方向に流れる河川があったことが確認された。さらに、その河川の東側で金環が出土しており伊冨利部古墳の周囲に古墳が形成されていたものと思われる。また今伊勢には舟入、江川、上河原、八丁堀などの地名がある。

8）今伊勢古墳群の（　）内の数字は前半期古墳を記したものである。前方後円墳は車塚古墳、円墳は野見神社古墳、でんやま古墳であり、でんやま古墳は径25m以上の大型円墳である。

尚、下記の表で径25m以上の円墳について見てみると2基確認され（毛無塚古墳・富塚古墳）また、墳丘高3.5m以上の円墳を探すと上記2基に伊冨利部古墳が加わる。この様な特異な性格を持った円墳がそれぞれの古墳群に存在することはとても興味深く4つのグループを考える上で重要な事例と考えたいと思う。

| | 径25m未満 | 径25m以上 | 高3.5m未満 | 高3.5m以上 |
|---|---|---|---|---|
| 浅井北 | 14 | 1 | 14 | 1 |
| 浅井南 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 今伊勢 | 3 | 0(1) | 3 | 0(1) |
| 門間 | 4 | 0 | 3 | 1 |
| 門間沼 | 5 | 0 | 不明 | 不明 |

第2表　各古墳群の円墳の規模

9）『新編　一宮市史』資料編3　P47参照

10）一宮市教育委員会　1992『愛知県一宮市　市内遺跡発掘調査概要報告書』P19参照

11）伊冨利部神社の周辺には金塚・金屎など製鉄・製錬が行われていたと推測される地名が残っており伊冨利部神社を氏神としていたとされる伊福部氏との関連、またこの金塚・金屎に古墳が存在していたことは注目される。

## 4．まとめにかえて

今回の論考は富塚古墳の墳丘測量結果と富塚古墳の性格を明らかにする前段階として尾張の一地域の各古墳群の傾向について述べた。

富塚古墳は6世紀代後半に築造の可能性を持つ30mクラスの大型円墳である。この富塚古墳の属する浅井南古墳群は同じ浅井古墳群を形成する浅井北古墳群とはその傾向が異なっている。特に墳形に於いて他の古墳群とは異なる傾向を見せた浅井南古墳群の中で際だった規模を持つ富塚古墳の他の古墳及び古墳群との関わりを解明することが必要である。そこで注目したいのが大型円墳という特徴である。

また後半期古墳群と古代寺院との関わり、未解明な部分がまだ多い門間・今伊勢地区についてもよりいっそうの調査研究が必要であり新たな機会に別稿を用意したい。

**謝辞**

高橋信明氏、赤塚次郎氏、土本典生氏には多くの御指導・御助言をいただきました。また、栗林典昭氏、西原正佳氏、飴谷一氏、永井宏幸氏、原田幹氏、織田眞弓氏、高田恵理子氏には測量調査に御協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

**参考文献**

『新編一宮市史』本文編上、資料編3・4

東海埋蔵文化財研究会（1989）『断夫山古墳とその時代』

山川出版社（1989）『前方後円墳集成』

岩野見司（1993）『真清田神社史』

(財)愛知県埋蔵文化財センター（1994）『年報』

# “美濃”刻印須恵器からみた大毛池田遺跡

## ―――― その１ ――――

小川芳範

### Ⅰ．はじめに

平成５年度より、当センターによって始まった愛知県一宮市に所在する大毛池田遺跡の発掘調査の結果、出土遺物を観ると多数の美濃須衛窯産の須恵器が含まれていることに気づく。

特に、本年度の調査では２条のほぼ平行する溝[(1)]からそれぞれ“美濃”刻印須恵器が出土した。これにより、大毛池田遺跡の古代（特に奈良時代における性格づけが、より一層重要になってくると考える。そこで、“美濃”刻印須恵器に関する先学諸氏の研究成果をまとめ、その方向性を探ってみようと思う。

### Ⅱ．先学諸氏の研究成果

刻印須恵器研究は、昭和42年に発表された岩野見司氏の成果が、現在この分野での基盤になっている。また、昭和56年には、刻印須恵器生産窯である老洞古窯の発掘調査報告がされた。その中には、高木洋氏の刻印須恵器の分析研究、楢崎彰一氏の刻印須恵器の時期・意味などの総合的研究、野村忠夫氏の文献的考察による刻印須恵器の時期と歴史背景の研究が発表された。以下、簡潔にまとめてみた。

１．岩野見司氏の研究

・刻印須恵器の紹介として、大正時代の林魁一氏、昭和12年の『天平地宝』（東京帝室博物館編）をあげている。

・出土遺物と遺跡の紹介

・刻印文字の分類・区分など

・刻印須恵器の編年について

考古学的考察から８世紀前半に位置づけられるとし、文献上からの考察も“美濃”の使用例を指摘し[(2)]、710年頃“美濃”の文字が使用され始めたとしている。

・刻印須恵器の性格について

官窯生産品として中央へ送られたものと美濃国司管轄下の機関・寺院への供給したものの両面の性格が考えられる。余剰生産品が生産地付近に流通したものと考えられる。また、木曽川南岸の尾張北部に分布する点を村国氏一族の管領範囲内とする指摘をしている。

「「美濃国」施印須恵器について」『考古学雑誌52巻３号』（昭和42年）より。

２．高木洋氏の研究

・刻印須恵器の生産について

老洞古窯跡群中で１号窯のみ生産、総数1290点出土。

・刻印文字の分類について

凸印つまり陰刻文字をＡ類、凹印つまり陽刻文字をＢ類、篦書文字をＣ類とする。

刻印“美濃”をⅠ類、“美濃国”をⅡ類とする。さらに形式細分化して、Ａ－Ⅰ類13種（14形式細分）、Ａ－Ⅱ類７種、Ｂ－Ⅰ類１種、Ｂ－Ⅱ類７種、Ｃ－Ⅰ類17点、Ｃ－Ⅱ類10点としている。

・施印部位について

瓦・高杯を除き、代表的器形のほとんどに施印。15器形、細分25器種に及ぶ。

最多生産品の無台杯身が540点、杯蓋376点出土、杯類合計1142点で全体の９割近くを占めている。

施印箇所には統一的なものはない。印の向きも一定ではないが、無台杯身は99％まで内底に

刻印。

・他地域出土の刻印須恵器について

刻印形式は、A－Ⅰ－1、A－Ⅱ－1が多い。老洞古窯の南に存在する朝倉古窯での生産が認められるが、独自の形式のものはA－Ⅱ類のみ。（生産窯として、各務原市太田古窯が他に存在することが知られている。平成7年度報告書刊行ときく、新たな形式等の発表があるかもしれない。）

刻印須恵器出土地が、当時新たに17ヵ所を加え掲載されている。

『老洞古窯跡群発掘調査報告書』第Ⅴ章美濃刻印須恵器（岐阜市教育委員会、昭和56年）より。

3．楢崎彰一氏の研究

・老洞古窯の刻印須恵器出土数について

老洞1号窯総出土数の6.7%を占める。

・刻印須恵器の生産期間について

老洞1号窯操業全期間にわたって生産しており、時代が下るにつれ器種が増加。

・刻印須恵器の上限について

708（和銅元）年頃とし、8世紀第1四半期がその生産年代。

・国名入り刻印須恵器生産の意味

官窯的性格の有力根拠、在地における官営工房的性格。

・刻印須恵器出土地について

愛知県出土地（江南市、一宮市、尾西市、葉栗郡という尾張北西部）は、672年壬申の乱で活躍した村国男依の本貫地である美濃国各務郡村国郷の対岸で、一族の管領地域と考えられる。

生産窯の老洞1号窯を含む古窯跡分布の中心は、現在の各務原市の中西部から岐阜市東端であり、当時この地域を領有していたのは渡来人系の各務勝氏と同族とみられる勝氏である。彼らも壬申の乱において村国男依の呼びかけに応じて、活躍したと考えられ、8世紀初頭に郡少領としての地歩を獲得したとみられている。

刻印須恵器出土地の中で、国家規制の働いていたものと考えられるものに、三重県多気郡明和町斎宮跡があげられる。延喜式によると、斎宮寮の財政負担した各国々の調貢品目のうち、美濃国は絹・筆などとともに陶器を出しており、特に陶器は美濃のみである。この関係は奈良時代から成立していたと考えられる。

・美濃国守笠朝臣麻呂と刻印須恵器生産

笠朝臣麻呂の治績として、713（和銅6）年吉蘇路開通、717（霊亀3）年美濃国醴泉行幸の演出、719（養老3）年尾張・参河・信濃三国の管領、720（同4）年右大弁に遷任、721（同5）年元明太上天皇の病により出家、723（同7）年筑紫へ造観世音寺別当として派遣などがあげられる。

彼が、美濃国守から中央政界へ復帰後に刻印須恵器生産が停止されている。生産量が多いのにもかかわらず産地周辺を除くと、出土地が政治色の濃い地点から出土している。想像として、15年の長きに渡る美濃国守を務め、豪腕を振るったといわれる彼が時々における記念事業に際して使用したとも考えられる。

『老洞古窯跡群発掘調査報告書』第Ⅸ章結語（岐阜市教育委員会、昭和56年）、『東海考古の旅』（楢崎彰一著、毎日新聞社、平成元年）より。

4．野村忠夫氏の研究

・笠朝臣麻呂の治績について

①“三野”→“美濃”へ国名表記の改定、定着の推進

②“美濃”刻印須恵器の国衙窯経営

③美濃不破関の整備

④席田郡・池田郡の分割、建置

⑤美濃平野部の広域条里の設定

⑥吉蘇路（岐蘇山道）工事の完成

⑦当耆郡醴泉への元正女帝行幸の演出

⑧美濃・尾張・参河・信濃４ヵ国ブロックの按察使就任

上記のように笠朝臣麻呂は、律令国家の完成期に関国美濃の体制を、農民労働力の徴発と組織的な駆使により整えた。また、これは中央政府の方針を受けとめた強力・忠実な施行といえる。そして、老洞古窯群において“美濃”刻印須恵器が焼成された時期は、まさに彼の美濃国守在任中と一致する。

『古代の美濃』（野村忠夫著、教育社、昭和55年）、『古代貴族と地方豪族』（野村忠夫著、吉川弘文館、平成元年）、『岐阜県史　通史古代編』（昭和46年）、『老洞古窯跡群発掘調査報告書』第Ⅷ章文献的考察　老洞古窯跡群の歴史的背景（岐阜市教育委員会、昭和56年）より。

**Ⅲ.“美濃”刻印須恵器出土地**（第１・２図参照）

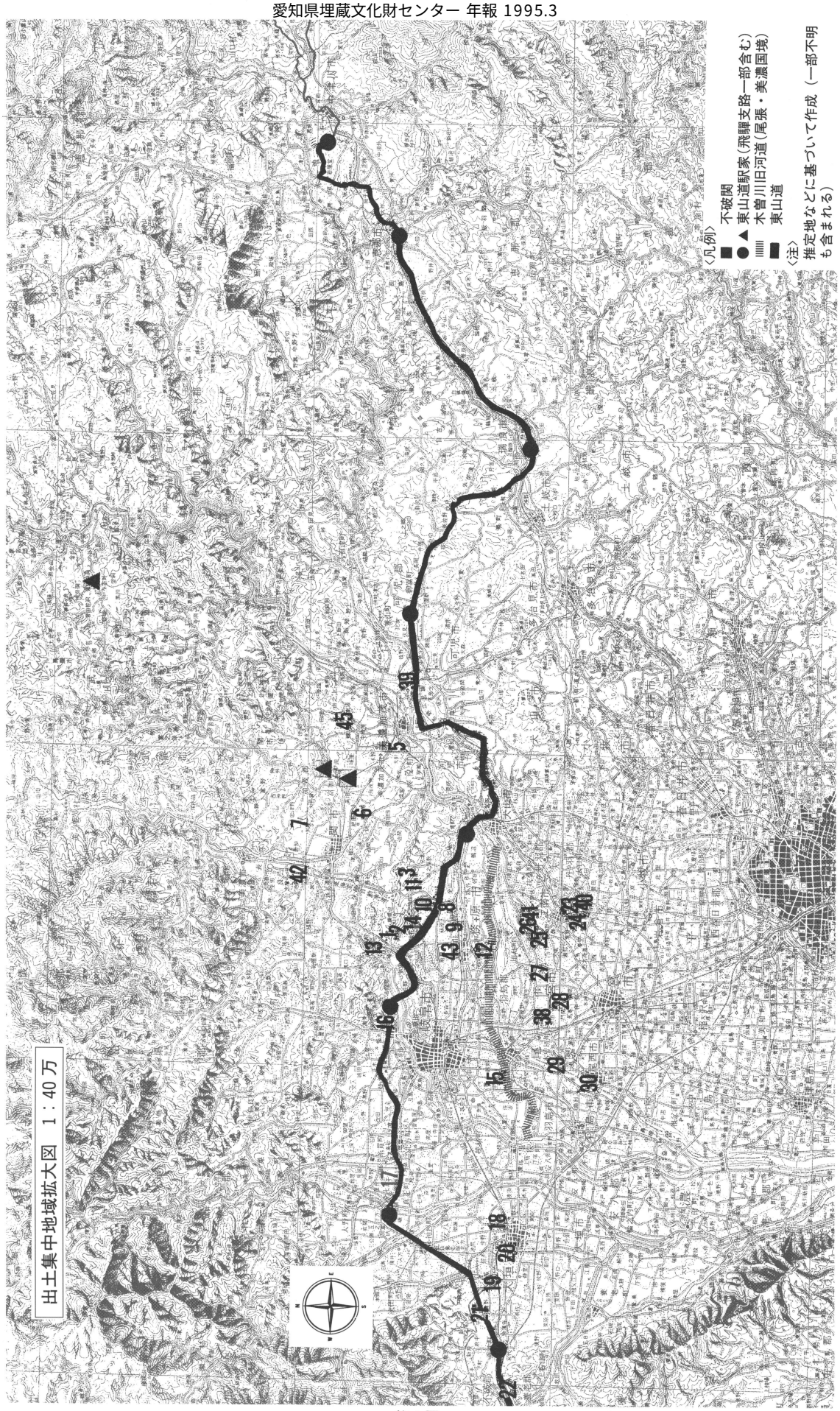
１岐阜市　芥見老洞１号古窯跡
２岐阜市芥見　朝倉古窯跡
３各務原市須衛町　太田古窯跡（平成７年度報告書刊行予定、同市埋蔵文化財調査センター）
４長野県飯田市座光寺　恒川遺跡
５美濃加茂市太田町西町
６関市東田原
７関市下有知　榿之木洞遺跡
８各務原市蘇原ノギ山（川崎山）
９各務原市蘇原村雨町　村雨町遺跡
10各務原市蘇原飛鳥町
11各務原市須衛町
12各務原市三井町寺浦　三井遺跡
13岐阜市芥見字長山　長山遺跡
14岐阜市岩滝古宮
15岐阜市茜部境川
16岐阜市長良真生町　城之内遺跡
17本巣郡真正町真桑
18大垣市林町
19大垣市荒尾
20大垣市南一色町若林紡績内
21大垣市青野町美濃国分寺跡
22不破郡関ヶ原町野上字天楽
23江南市尾崎字桐野　桐野遺跡
24江南市赤童子字東山
25江南市後飛保字新開
26江南市宮田字貝売
27一宮市浅井町尾関字奥屋敷　奥屋敷遺跡
28一宮市高田字前田　前田遺跡
29葉栗郡木曽川町玉ノ井先木曽川中洲
30尾西市起字堤町先木曽川中洲
31三重県多気郡明和町　斎宮跡遺跡他
32三重県鳥羽市安楽島町　贄遺跡
33奈良県奈良市佐紀町　平城宮跡
34奈良県橿原市　藤原宮跡
35大阪府守口市金田二丁目　大庭北遺跡
36長野県松本市島立字宮原・西原　南栗遺跡
37長野県松本市芳川平田　平田本郷遺跡
38一宮市大字大毛字池田　大毛池田遺跡（平成７年度まで調査予定、同８年度報告書刊行予定）
39可児市川合地区　川合遺跡群宮之脇Ａ地点
40江南市木賀東町新塚（旧長塚）
41江南市村久野字寺前
42関市下有知重竹　重竹遺跡Ｂ地点
43各務原市那加前洞新町　前洞遺跡Ａ地区
44大阪府大東市北新町　北新町遺跡（平成６年度整理作業中）
45美濃加茂市蜂屋町上蜂屋　尾崎遺跡
46奈良県月ヶ瀬村茶畑　尾山代遺跡

『発掘された東海の古代』（名古屋市博物館特別展図録、平成６年）を追加・訂正した。

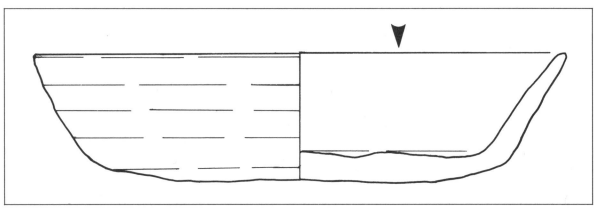
“美濃”刻印須恵器出土分布　1：200万



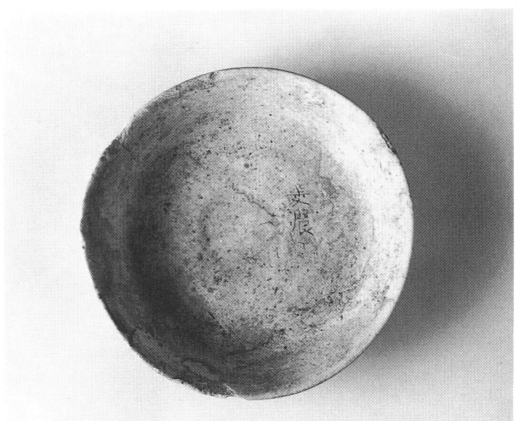

第Ⅰ図

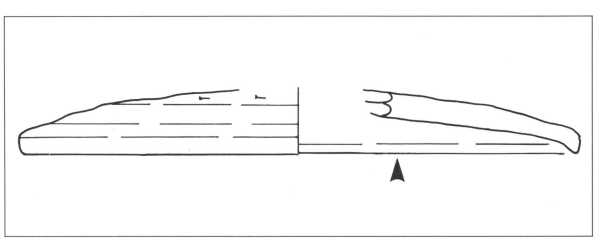

出土集中地域拡大図　1：40万
〈凡例〉
■ 不破関
●▲ 東山道駅家（飛騨支路一部含む）
木曽川旧河道（尾張・美濃国境）
■ 東山道
〈注〉
推定地などに基づいて作成（一部不明も含まれる）

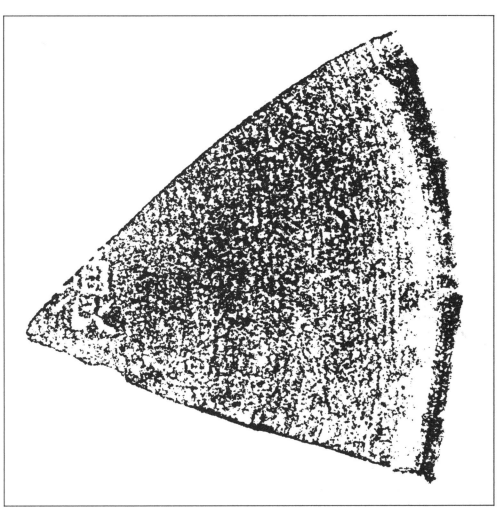
第 2 図

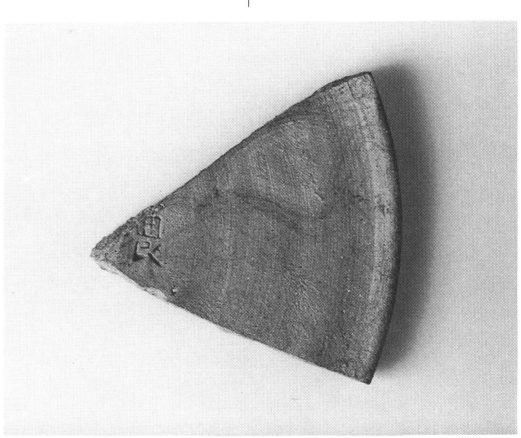












実測図　1：2
拓　本　1：1

第3図

**参考文献**

『老洞古窯跡群発掘調査報告書』(岐阜市教育委員会、昭和56年) … 1，10，11，17，24，25，26，29，33等

『岐阜市史　史料編考古・文化財』(昭和54年) … 2，14，18等

『恒川遺跡　田中・倉垣外地籍』(飯田市教育委員会、昭和63年)

『美濃加茂市史　通史編』(昭和55年) … 5

岩野見司氏前掲書論文… 6，13，21，22等

『関市史』(平成７年) … 7

『各務原市史　考古・民俗編』(昭和58年) … 9，12等

『三井遺跡』(岐阜県教育委員会、昭和56年) …12

『城之内遺跡』(岐阜市教育委員会、平成２年) …16

『江南市史　資料四文化編』(昭和58年) …23，40

『一宮市史　資料編四』(昭和49年) …27，28

『尾西市木曽川水没遺跡調査報告』(尾西市教育委員会、昭和48年) …30

『斎宮跡発掘資料選』(斎宮歴史博物館、平成元年) …31

『鳥羽贄遺跡』(鳥羽市教育委員会、昭和53年) …32

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』(奈良国立文化財研究所) …34

『大庭北遺跡発掘調査概要Ⅱ』(大阪府教育委員会、昭和61年) …35

『南栗遺跡』(長野県埋蔵文化財センター、平成２年) …36

『平田本郷遺跡』(松本市教育委員会、平成６年) …37

『川合遺跡群』(可児市教育委員会、平成６年) …39

『重竹遺跡　その３』(関市教育委員会、昭和59年) …42

『前洞Ａ地区発掘調査報告書』(各務原市埋蔵文化財調査センター、平成６年) …43

『尾崎遺跡』(岐阜県文化財保護センター、平成５年) …45

『平城京発掘調査報告書Ⅵ』他 (奈良国立文化財研究所、昭和49年) …33

## Ⅳ．大毛池田遺跡と“美濃”刻印須恵器

大毛池田遺跡は、一宮市北西部と葉栗郡木曽川町の接する辺りに所在し、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防上に広がりが認められる遺跡である。当センターによって平成５年度から発掘調査が進められ、これまでに古墳時代から戦国時代にいたる複合遺跡と確認されている。

特に、本年度の調査では“美濃”刻印須恵器が２点出土し、古代の大毛池田遺跡の位置づけが注目されることとなった。また、戦国時代の方一町に及ぶ区画溝が検出され、国人領主級の屋敷地及び、その家臣の屋敷地の存在が確認された。

刻印須恵器は、幅５～６ｍのほぼ平行して延びる２条の溝の下層から、奈良時代の須恵器の杯・杯蓋・椀、土師器甕など完形品が多く出土した中から見つかった。１点は完形の無台杯で、溝最下層からふせた状態で出土し、内面中央寄りに“美濃”と陰刻されている。刻印形式は、『老洞古窯跡群発掘調査報告書』の分類によればＡ－Ⅰ－11である。もう１点は、杯蓋片が溝下層から出土し、天井部を欠き裏面中央寄りに“濃”の１字が陰刻されているのが認められる。刻印形式は、Ａ－Ⅰ－１と思われる。(第３図参照)

ここでは、古代の大毛池田遺跡の様相を“美濃”刻印須恵器を手がかりに推察しようと思う。大毛池田遺跡は、古代葉栗郡の大毛郷の範囲内に存在したものと考えられる。『和名抄』によれば、葉栗郡には葉栗郷・河沼郷・若栗郷・村国郷・大毛郷の５郷がみられる。また、奈良時代の『貢進仕丁歴名帳』には大沼郷の名がみられる。『一宮市史』などによれば葉栗郷は、葉栗郡の郡家のおかれた主郷と想定されており、現在の一宮市浅井町尾関の地が有力候補といわれる。尾関の地は、浅井北古墳群の存在する歴史背景の強い土地柄であり、また７世紀後半とされる黒岩廃寺が存在する。黒岩廃寺が当時の郡司クラス（冠位小乙中）の豪族とされる葉栗臣人麿が建立したといわれることからも、尾関の地が当郡の中心であったとされている。

河沼郷は、現在の岐阜県羽島郡川島町から愛知県江南市後飛保河野、同市宮田河沼等の地域とされている。若栗郷は、現在の一宮市浅井町大日比野や同市島村等の地域とされている。大沼郷は、現在の一宮市浅井町大野を中心とする地域とされている。

村国郷は、現在の江南市村久野を中心とする地域とされ、村久野は村国の転訛とされている。木曽川をはさんだ美濃国各務郡には村国郷があり、壬申の乱で活躍した村国男依一族はここを本貫地としていた。彼は、乱後まもなく一族で連姓を賜り、村国連男依としている。

彼の活躍を簡単にまとめてみる。大海人皇子側近の舎人として吉野宮滝の地への退隠にも皇子と同行し、乱の勃発にあたって672年６月22日皇子の密命を受けて、湯沐邑の責任者である多臣品治と連絡、周辺農民を動員し不破関をおさえた。伊勢国の中途まで進んだ大海人皇子にその成功を伝えたのが彼であった。７月２日、近江方へ攻撃を開始したとき尾依は大津宮攻撃軍の将軍筆頭に任ぜられた。またその死に際して、大臣位である小紫位に、地方豪族出身を示す“外”の字をつけて外小紫位が贈られた。その他、彼への功封は120戸であったとされ、壬申の乱功臣たちの中の筆頭であった。この功績により一族は、中央下級貴族として定着できたのである。美濃国各務郡にある村国神社二座と村国真墨田神社は、村国氏一族の氏神とされる。尾張の村国郷も一族の管領した地域と考えられ、男依建立といわれる音楽寺、また村国神社が存在する。この村国郷は、美濃国と密接な関わりが深く、また男依の功績から言うまでもなく村国一族管領の地域は一目置かれた存在だったと想像される。そして、この地域周辺が尾張国の中で、特に“美濃”刻印須恵器の出土数が多いのと関わりあると考える。前述した出土地の25，26，41が村国郷内及び周辺である。検討しなければならないが、範囲を広げると出土数は増す。残念なことに、この地域の刻印須恵器の出土が、本格的な発掘調査からではなく畑の土取り等から出土のため、遺跡・遺構から刻印須恵器の背景を考えることが難しい。ただ少なくとも、この地域は刻印須恵器の大量消費地には違いない。今後の発掘調査の成果に、期待するところが大きいと思う。

最後に、大毛郷は現在の一宮市大字大毛を中心とする地域とされている。葉栗郡には天皇に関わる伝説が沢山あるが、大毛の地にもいくつかの伝説がある。『葉栗史誌』によると、「盧入塚は、景行天皇の皇女、五百木入姫（盧入姫）墓地と伝える。五百木入姫は島村の宇夫須那神社の地で誕生され、幼時は栄泉寺で過され、都へ行って成人さる。老後は故郷の栄泉寺で生活されたと当時の栄泉寺の古記録にあるという。一説によれば、大字大毛にある大毛神社の祭神にはこの五百木入姫を合祀するとある。塚の上には五百木入姫を祀る小社がある。」また、大毛地内に天子塚が２つあったといわれており、「景行天皇が妻の八坂入姫命の出産の際、御見舞に来られた時の行宮の跡といひ、二つの場所（塚）がそれだという。」さらにもう１つ、景行天皇墓について、「天子塚の西約200米の地にあった。天保の村絵図にも記載されている。」とある。天子塚・景行天皇天皇墓は、昭和30年代の土地改良事業までは現存していた。往事この周辺は、何らかの形で皇室と関係が深かったと考えられる。また、大毛池田遺跡の所在する地域と天子塚・景行天皇墓の存在した地域はほぼ一致する。“美濃”刻印須恵器をはじめ特異な出土遺物の多い古代大毛池田の地は、過去にその字名が福所や懐とよばれたことから考えても、古代大毛郷の中の一空間を築いていたと考えられないだろうか。

ところで、古代葉栗郡にはどんな氏族が活躍していただろうか、文献上登場してくるものをあげてみる。まず、『尾張国風土記』逸文に「葉栗臣」がある。これは、前述した葉栗臣人麿一族であり、和爾部臣より分派したともいわれる。次に、『尾張国正税帳』天平６（734）年12月に「葉栗郡司少領外従八位勲十二等和爾部若麻呂」と「主帳外少初位上勲十二等伊福部大麻呂」とあり「和爾部臣」と「伊福部」の存在がみられる。

大毛池田遺跡約400mほど南、現在葉栗郡木曽川町大字門間地区に伊富利部神社がある。伊富利部は盧入部であり、前述の盧入姫に由縁があり様々な説や考察とともに伊布利部やがて伊福部に混同したとされる。伊富利部の読み方については、『一宮市史』や『木曽川町史』ではそろって“イホキベ”或いは“イブキベ”と読むべきとしている。この伊富利部神社は、八幡社と伊富利部社の合祀であるが、伊富利部神社の祭神は若都保命である。これは、伊福部氏の遠祖と考えられ、さらに尾張氏の遠祖とされる天火明命につながるとされる。伊富利部神社は、古代葉栗郡氏族の1つ伊福部氏と深い関わりがあるといえ、また当時の大毛池田遺跡も伊福部氏の勢力基盤であったといえよう。

以上2つの点から推察して、“美濃”刻印須恵器出土の大毛池田遺跡は、美濃須衛窯産の須恵器消費地の一遺跡であると同時に、大毛の伝説や伊富利部神社と深い関わりがあった伊福部氏の存在から考えて、ある特殊な色彩を持つ遺跡と考える。さらに、出土遺物に円面硯の他、金属器模倣の器形を含む須恵器が多く、平城宮など特殊な遺跡から出土している蹄脚硯と刻印須恵器を出土した同じ葉栗郡の尾関奥屋敷遺跡とも、また違ったかたちの性格であったといえよう。

## Ⅴ．おわりに

刻印須恵器出土遺跡の中で、奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物の確認されている一部の遺跡を以下のように分けてみた。

| 出土状況 | 遺構内出土 | | 遺構外出土 |
|---|---|---|---|
| | 住居跡 | 溝 | |
| 出土遺跡 | 南栗<br>恒川<br>平田本郷 | 大毛池田 | 尾崎<br>前洞<br>重竹<br>川合<br>三井<br>南栗 |

刻印須恵器出土遺跡の歴史背景は、722(養老6)年の百万町歩の開墾計画、翌年の三世一身の法、743(天平15)年の墾田永年私財法など律令国家が国衙と郡衙を動かして租税収入の基盤づくりを積極的に展開した時期にあたる。それが実際に行われたと考えられる遺跡から、刻印須恵器が多く出土している。

各務原市三井遺跡は、各務七郷の1つ三井郷の一部地域にあたるものと考えられている遺跡で、周辺の富加町東山浦遺跡・関市重竹遺跡と同様、8世紀代に住居跡が増加し以後減少する傾向を示している。松本市南栗遺跡では、美濃須衛窯産須恵器の搬入は、7世紀後葉から確認され、最も出土数が多いのは8世紀前葉であり、それ以降は減少している。刻印須恵器の出土した竪穴住居は、この遺跡内では特に大型であり、周辺に掘立柱建物を配置したり、柵によって居住域を形成している。官衙的配置を採用して、律令制下における農民支配の一翼を担っていたと考えられる。松本盆地ではこの8世紀前葉に、東山道のバイパスとして吉蘇路の開通が笠朝臣麻呂により実現し、東山道経営を本格化した時期である。中央と結びついた笠朝臣麻呂の積極的な後押しがあった証と考える。刻印須恵器出土遺跡の多くは、律令体制の完成から衰退を経験したと考えられ、国家的統制の働いていた地域に、他の美濃須衛窯産須恵器とともに消費されたのではないだろうか。

さらに、飯田市恒川遺跡のように伊那郡衙跡といわれ、刻印須恵器のほか蹄脚硯・円面硯・和銅銀銭・玢玻璃椀等が出土している特異な性格をもつ遺跡の存在を忘れてはならない。おおげさな表現をすれば、大毛池田遺跡は出土遺物からは恒川遺跡のような何か特異性を感じる。

その他、美濃加茂市尾崎遺跡出土の刻印須恵器は、刻印箇所が杯蓋のつまみ部分であり前例がないと思う。現在整理中ときく各務原市太田古窯の

報告の中に同種が存在するかもしれない。老洞窯産と太田窯産の刻印須恵器の区別ができれば今後の課題としたい。

最後に本稿を草するに当り、(財) 愛知県埋蔵文化財センター高橋信明氏・赤塚次郎氏・杉浦茂氏・北條真木氏他には、多くの御教示・助言をいただきました。感謝の意を表します。また、岐阜市教育委員会高木洋氏、飯田市教育委員会小林正春氏、松本市立考古博物館小原稔氏、一宮市博物館土本典生氏、大東市立歴史民俗資料館黒田淳氏ほか、関市教育委員会、美濃加茂市教育委員会、江南市歴史民俗資料館、奈良国立文化財研究所、橿原考古学研究所には、資料・情報を御提供いただきました。記して謝辞とします。

**注**

(1) (財) 愛知県埋蔵文化財センター『平成6年度年報』大毛池田遺跡調査の概要を参照。

(2) 709 (和銅2) 年の弘福寺田畠流記帳、720 (養老4) 年完成日本書紀天武二年の条、750 (天平勝宝2) 年正倉院文書奴婢帳美濃国司解。

**参考文献**

『一宮市史　本文編上』(昭和52年)
『木曽川町史』(昭和56年)
『愛知県の歴史』(塚本学・新井喜久夫著、山川出版社、昭和56年)
『岐阜県の歴史』(中野効四郎著、山川出版社、昭和45年)
『長野県の歴史』(塚田正朋著、山川出版社、昭和49年)
『図説愛知県の歴史』(林英夫編、河出書房新社、昭和62年)
『図説長野県の歴史』(古川貞雄編、河出書房新社、昭和63年)
『岐阜市史　通史編』(昭和55年)
『長野県史　通史編原始古代』(平成元年)
『式内社調査報告　東海道』(式内社研究会、皇学館大学出版部、平成元年)
『古代日本の交通路II』(藤岡謙二郎編、大明堂、昭和53年)
『東山道の実証的研究』(黒坂周平著、吉川弘文館、平成4年)

**追記**

新たに“美濃”刻印須恵器出土が確認されたものを本稿IIIに加えたい。

47　不破郡垂井町垂井

# 奈良・平安時代の土師器甕について

## ～大毛池田・沖遺跡出土資料を中心に～

永井宏幸

### 1　はじめに

尾張古代の土師器研究は近年まで遅々として進展がなかった。1991年の城ヶ谷和広氏による「古代尾張の土師器～6世紀後半から11世紀の様相～」でようやく編年の大綱が提示された。研究が進まなかった要因は、氏が指摘するように、当該期の発掘調査が集落遺跡より窯跡や古墳の調査が多く、いきおい須恵器・灰釉陶器の研究が中心となったからであろう。しかしながら、近年、清洲城下町遺跡・大渕遺跡・名古屋城三の丸遺跡など良好な一括資料とともに、土師器の出土例が急増し、氏のような論考が提出されるようになった。

城ヶ谷氏は尾張の土師器甕を基軸に6世紀後半から11世紀をⅣ期9小期に分けている。Ⅰ期（6世紀末～7世紀後葉）は、畿内とのつながりが指摘できる尾張・美濃・三河・伊勢地方に多い甕、すなわち口縁端部をつまみ上げ、口縁部から体部内面を横方向のハケメで調整し、内面下半部をヘラ削りする「東海型」甕の出現としている。Ⅱ期（7世紀末～8世紀）は、小平底で極めて長胴、口縁部を「く」の字状に折り返し、体部外面を斜めから縦方向の荒いハケメで調整し、体部内面はナデやケズリで薄い器壁に仕上げる甕を特徴としている。またこの時期、Ⅰ期において「東海型」として大きく捉えることができた甕を、Ⅱ期は「東海型」を継承する「伊勢型」、口縁部を鋭角に折り返す、ハケメを全く持たない甕を「三河型」など「某国型」の長胴甕を生み出す時期としている。Ⅲ期（9世紀）はⅡ期の甕と「三河型」に系譜をもつ「清郷型」甕が加わる過渡的な時期としている。Ⅳ期（10～11世紀）は、長胴甕が見られなくなり、鍋的な甕が中心となり、「伊勢型鍋」の系譜上最も古いタイプに位置付けられる、球胴形の体部と内面に折り返す口縁端部を特徴とする甕が主体となる時期としている。

以上、城ヶ谷氏の論考のうち、特に画期として特徴的な部分を抽出した。

そこで、小稿では過去の調査事例が少ない尾張北部に位置する大毛池田・沖で出土した土師器甕を中心に、7～10世紀の様相を考えてみたい。

### 2　大毛池田・沖遺跡の概要

両遺跡は愛知県の北西部、一宮市北部と葉栗郡木曽川町にまたがる木曽川水系によって形成された自然堤防およびその後背湿地上の標高約9m前後に位置する遺跡である。池田遺跡は古墳時代前期の水田跡、古代・中世の集落跡と中世末の居館跡が確認されている。沖遺跡は遺跡の北東から南西へ縦断する旧河道を中心に古代・中世の集落跡が確認されている。

今回対象とした7世紀から10世紀にかけては、池田遺跡が「美濃」刻印須恵器が出土した溝を含め遺跡の北東から南西へ続く溝が数条、竪穴住居が17棟確認されている。土師器甕は溝資料の中に多く含まれ、竪穴住居からの出土例が少ない。一方沖遺跡では、竪穴住居が22棟確認されている。土師器甕も比較的多く竪穴住居から出土している。

これらの資料をもとに7世紀から10世紀にかけての土師器甕の変遷を試みる。

### 3　分　類

大毛池田・沖遺跡から出土した土師器甕を口縁部形態を中心に大きくA～E類に分類する。

A類　体部が球形で小型のもの。口縁端部をつまみ上げるものが古相、そうでないものが新相。基本的にはB類と同様なものが古く、D類と同様なものが新しい。尾張低地部に特徴的な甕。

B類　体部が球形あるいはやや長胴ぎみで中型のもの。底部は丸底。口縁端部をつまみ上げる。新しくなるにつれ、つまみ上げが小さくなり、やがて痕跡程度となる。調整手法は口縁外面に強い横ナデを施し、凹線状となる。頸部から肩部にかけても横ナデを施し、肩部と体部の境目に稜線が入る。新しくなるにつれ、稜線がなくなり、頸部から肩部にかけての横ナデが弱くなる。口縁部内面は横方向ハケ調整、あるいは後に横ナデを施すものもある。体部内面は横方向の細かいハケ調整。体部下半に底部から上に向けて板ケズリを行うものが古い。

C類　体部が長胴で大型のもの。口縁部・その他の調整手法はほぼB類に共通する。ただし、肩部と体部の境目の稜線は新しくなっても残る。

D類　体部が長胴のもの。口縁がくの字あるいは水平に折れ曲がり、肥厚する。底部は平底。体部の調整は器壁を荒々しく削るようなハケ調整が施される。

E類　他のものに比べ肩部が張り、全体的に鍋的な器形のもの。口縁端部を内側に折り曲げる。

その他、上記の分類以外に、把手付の鍋・甑、従来「清郷型」甕とよばれているものがあげられるが、今回は分類から除外した。

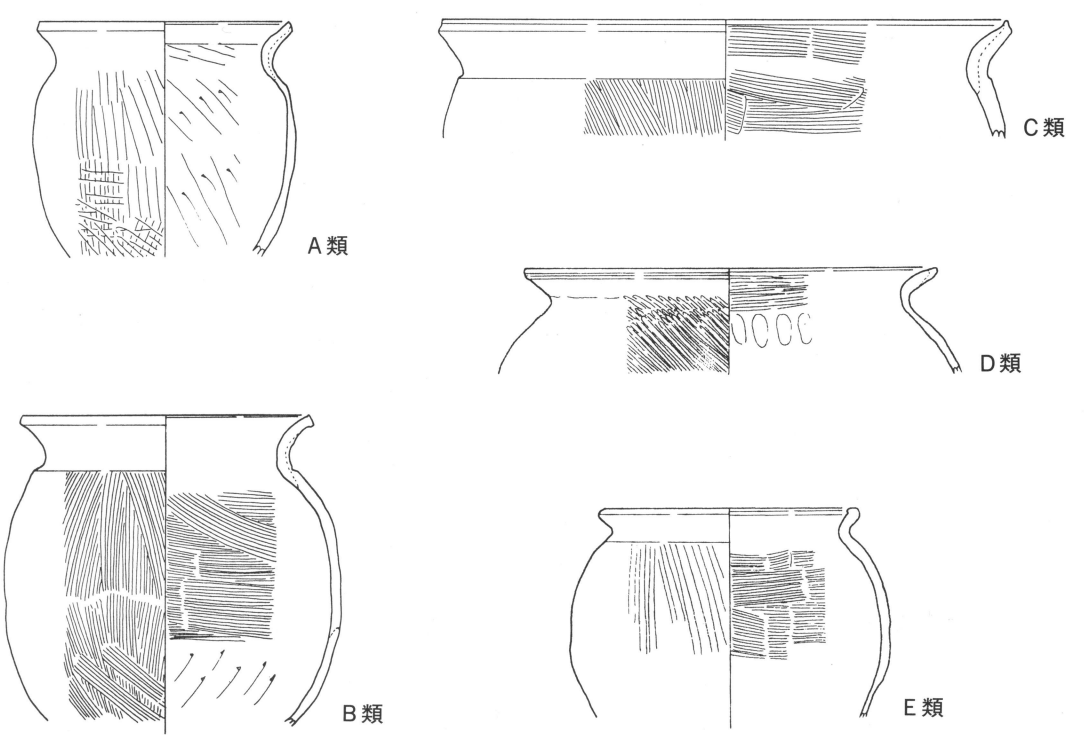



図1　土師器甕分類図　S＝1/4

## 4　段階設定

大きく5分類したものとそれぞれの型式変化、および須恵器・灰釉陶器の共伴関係などから、今回は5段階に区分する。時期設定としなかった理由に、資料が整理中であることと、次年度以降刊行予定の報告書に向けての試案としたためである。

第1段階

池田遺跡94C区SD03・94D区SD15があげられる。共伴する須恵器は猿投窯のⅠ－17号窯期併行である。口縁部をつまみ上げるタイプのA・B・C類が主体となる。

遺物を詳細に見てゆくと、口縁部のつまみ上げが徐々に緩くなる段階である。また、体部外面のタテあるいはナナメ方向のハケ調整の後に行う頸部のヨコナデ調整が、徐々に弱く行うようになり、肩部から胴部にかけての稜線が目立たなくなる。内面の調整手法は基本的にはヨコハケ調整で、古い様相として体部下半に底部から体部にむけてケズリ調整を行うものもある。

以上、第1段階はA・B・C類ともに同じ様相がみられ、口縁部をつまみ上げるタイプ以外のものは、ほとんどみられない。

第2段階

池田遺跡93B区NR02・沖遺跡94C区SB06・07があげられる。共伴する須恵器は美濃須衛窯の第Ⅳ期第1小期のものが主体となり、若干猿投窯のC－2号窯期のものが伴う。

池田遺跡NR02資料は94年度調査から美濃刻印資料が出土しており、実年代が確認できる良好な資料といえよう。ただ、部分的にH－50号窯期に遡る資料がみられるが、土師器甕資料は現状では古い様相を示すものはない。

第1段階に引き続き、A・B・C類が主体となるが、次段階に主体を占めるD類が出現する。

A類は外面のハケ調整が荒く粗雑なものが含まれる。B・C類は口縁部のつまみ上げがほとんど見られなくなり、口縁が大きく開くものが多くなる。また、胴部形態が球胴から長胴化の傾向がみられる。D類は口縁端部を弱く面取りを行う。外面のハケ調整は、B・C類に比べ単位が短い。また、色調がB・C類は赤褐色や淡黄褐色のものが主体であるのに対して、D類は暗褐色～褐色のものが主体となる。

以上、基本的には前段階の退化現象で捉えることができるが、新たにD類が出現することが画期として重要となろう。

第3段階

沖遺跡93A区SB06・07資料があげられる。共伴する須恵器・灰釉陶器は猿投窯のO－10号からK－14号窯期のものが伴う。SB06と07は切り合い関係があり、SB06→07の順である。両者の出土資料は、SB06がほとんど土師器甕であるのに対して、SB07はほとんど須恵器・灰釉陶器である。出土位置・層位の詳細な検討は行っていないが、おそらくSB07のO－10号窯期のものはSB06に共伴する資料であろう。

この段階はB・C類に代表される口縁部をつまみ上げるタイプは見られなくなり、D類が主体を占める。D類は胎土が特徴的で、前段階までに比べ砂粒を多く含む。外面の荒いハケ調整や内面のケズリにより、体部の器壁薄く仕上げる。口縁部の特徴からさらに3段階区分が可能である。すなわち、口縁端部面取りなしで「く」の字口縁→面取りなしでほぼ直角に折り返す口縁→面取りありで「く」の字口縁への変化である。A類はD類と基本的に同様な特徴を示す。

第4段階

池田遺跡94F区SB10資料があげられる。共伴する灰釉陶器は猿投窯のK－90号窯期と美濃窯の光ヶ丘1号窯期のものが伴う。

第3段階の新相で見られる口縁端部を面取りするもので、さらに頸部と体部の境目に稜線が入る

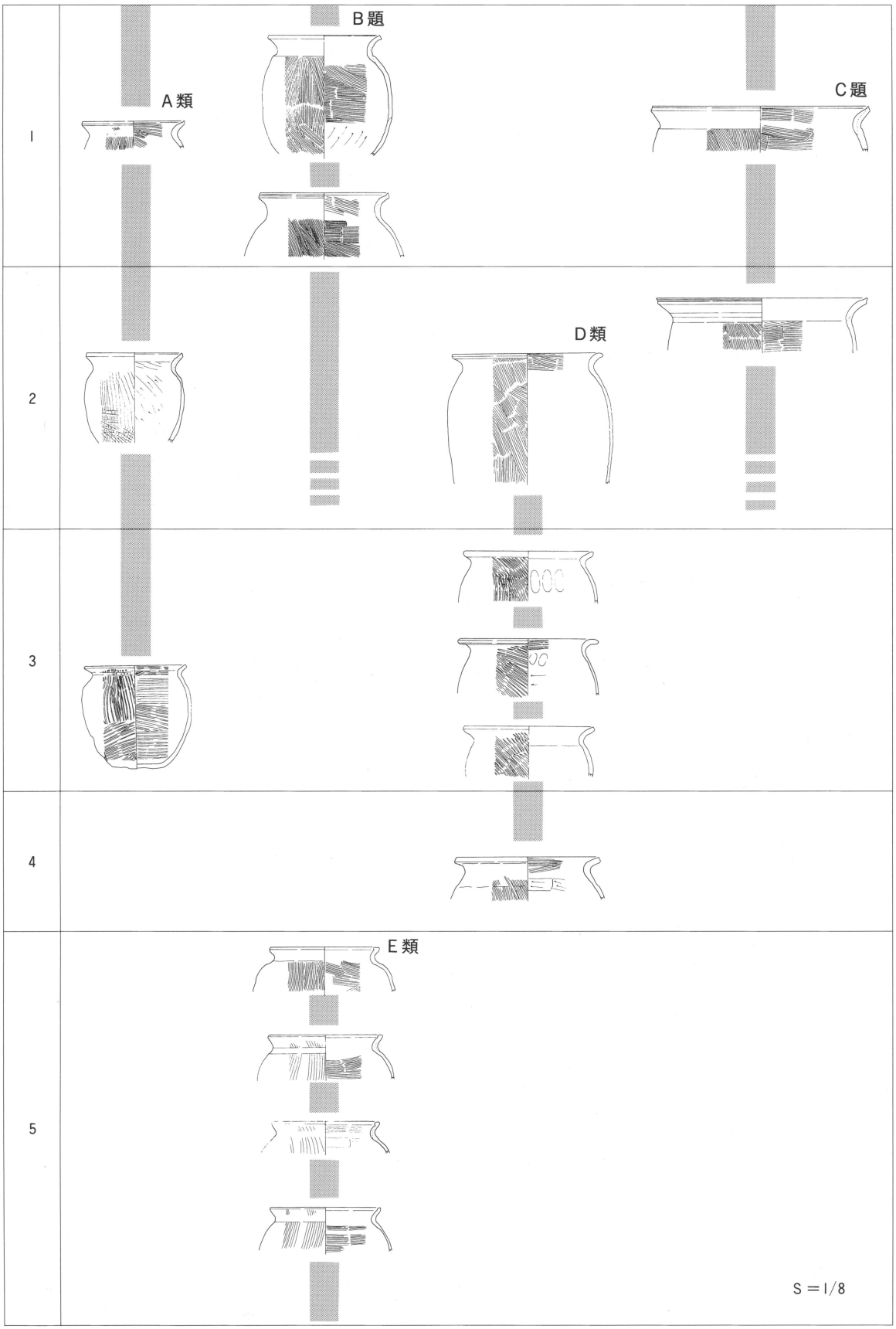



図 2　土師器甕変遷図

タイプが主体となる。体部外面のハケ調整が再び細かくなる。

第5段階

沖遺跡94Ｆ区ＳＢ01～03資料があげられる。共伴する灰釉陶器は美濃窯の光ヶ丘1号窯期～丸石2号窯期のものが伴う。その中で量的には虎渓山1号窯期が多い。

この段階はＥ類が主体を占める。口縁端部を内側に折り返すもので、将来的にはさらに4段階区分が可能である。すなわち、口縁端部に強いナデ調整を行い面取りをする→面取りなしで、体部外面の最終調整が少し間隔をおいたタテあるいはナナメ方向のハケ調整→口縁端部の折り返しがさらに内面に入り込む→口縁端部の折り返しが痕跡程度への変化である。

以上5段階の区分を試みた。

さて、これまで示してきた段階に実年代を当てはめてみると、確実な資料としては、第2段階の「美濃」刻印須恵器が出土した溝の延長上に位置する、池田遺跡93Ｂ区ＮＲ02資料のみである。「美濃」用字から制作時期が708～720年前後と考えられる。他の段階についてはそれぞれ共伴する須恵器・灰釉陶器の編年に当てはめることにする。

第1段階はⅠ－17号窯期が7世紀半ば～後葉。第2段階は「美濃」刻印須恵器から8世紀前葉。第3段階はＯ－10号～Ｋ－14号窯期が8世紀後葉～9世紀半ば。第4段階はＫ－90号窯期と光ヶ丘1号窯期が共伴する9世紀後半。第5段階は光ヶ丘1号～丸石2号窯期が9世紀末～11世紀初頭。

さらに、これらの実年代と比定した各段階と城ヶ谷氏の編年を照合すると、第1段階はⅠ－3期、第2段階はⅡ－1期、第3段階はⅡ－2・3期、第4段階はⅢ期、第5段階はⅣ－1期となる。

## 5　課題と展望

今回の段階設定はさらに細かな段階区分が可能である。まず、この点に関して再度整理し、第1の課題とする。

第3段階の主体をなすＤ類が口縁部の変化と調整手法から、さらに3小段階区分できる。①口縁端部面取りなし＋「く」の字口縁、②口縁端部面取りなし＋ほぼ直角に折り返す口縁、③口縁端部面取りあり＋「く」の字口縁への変化である。城ヶ谷氏の編年に当てはめるとⅡ－2・3期が3区分可能となる。

第5段階の主体をなすＥ類は4小段階区分できる。①口縁端部の面取り、②面取りなしで、体部外面のハケ調整が間隔をおいて行うもの、③前段階を継承し、口縁端部の折り返しがさらに内面に入り込む、④口縁端部の折り返しが痕跡程度になる。城ヶ谷氏の編年に当てはめるとⅣ－1期が4区分可能となる。

第2の課題としては、7世紀末に三河で出現する口縁部を鋭角に折り返す、ハケ調整のない甕の有無である。現状では今回分類したＡ～Ｅ類には共伴していない。城ヶ谷氏の編年ではⅡ－3期からⅣ－2期まで共伴する。沖遺跡では包含層資料の中に10世紀代のものは出土しているものの、それ以前に相当する第4段階以前は現在確認できない。あるいは尾張北西部の特色を示す事象か。

第3の課題としては、底部形態の変化である。第1段階まで確実に丸底で、第3段階は平底であることは確認しているが、第2段階が不明である。今後の検討課題としたい。

第4の課題としては、他の煮炊具である鍋・甑との共伴関係関係である。鍋に関しては、第1段階の直前にあたる6世紀末から7世紀初頭の須恵器と共伴することが確認できる。それ以降継続するかは不明である。また、把手部分は第1段階から第3段階まで量的には少ないものの確認でき、

甑の存在は想定できる。さらに、第２段階から第３段階にかけて須恵器の甑も共伴している。

第５の課題としては、土師器供膳具の有無である。共伴関係は確認できないが、平城Ⅱ式に相当する搬入品の暗文土師器が出土している。おそらく第２段階に伴うものであろう。このような現象は尾張で一般的であるが、出土頻度、出土遺跡による相違あるいは時期的な問題に関して、城ヶ谷氏が指摘する「律令体制における土師器のもつ意味」などとあわせて検討が必要である。

第６の課題としては、煮炊具の使用法である。まずは、外内面に残る２次焼成痕やススなどの付着位置での確認である。これらの痕跡に関する研究は外山政子氏の研究が参考となろう。ただ、カマドに代表される加熱施設は尾張では遺存状態が非常に悪い。特に第３段階以降は焼土と炭化物が集中する場所が床面に見つかる程度である。

この第３段階の遺構として比較的遺存状態が良い沖遺跡の例を紹介する。

93Ａ区ＳＢ07

出土遺物から８世紀後半の竪穴住居。焼土が集中するなかに、角柱状の石が立位し、その上に須恵器椀が伏せた状態で出土。

93Ｃ区ＳＢ？

調査区南端のトレンチ内から角柱状の石が立位し、その周りを囲むように土師器甕（８世紀後半）が口縁部を下に、体部下半を欠如した状態で出土。

前者の例は須恵器椀の底部の平坦面を利用し、その上にのせる工夫がされている。後者の例は上端面が平坦な角柱状の石が支脚となり、土師器甕が枠と考えればやはりその上にのせられる工夫がされている。両者に共通することは、床面から少し高くした空間を平坦面にしていることである。したがって、造付カマドの簡易施設として８世紀以降も継続している。

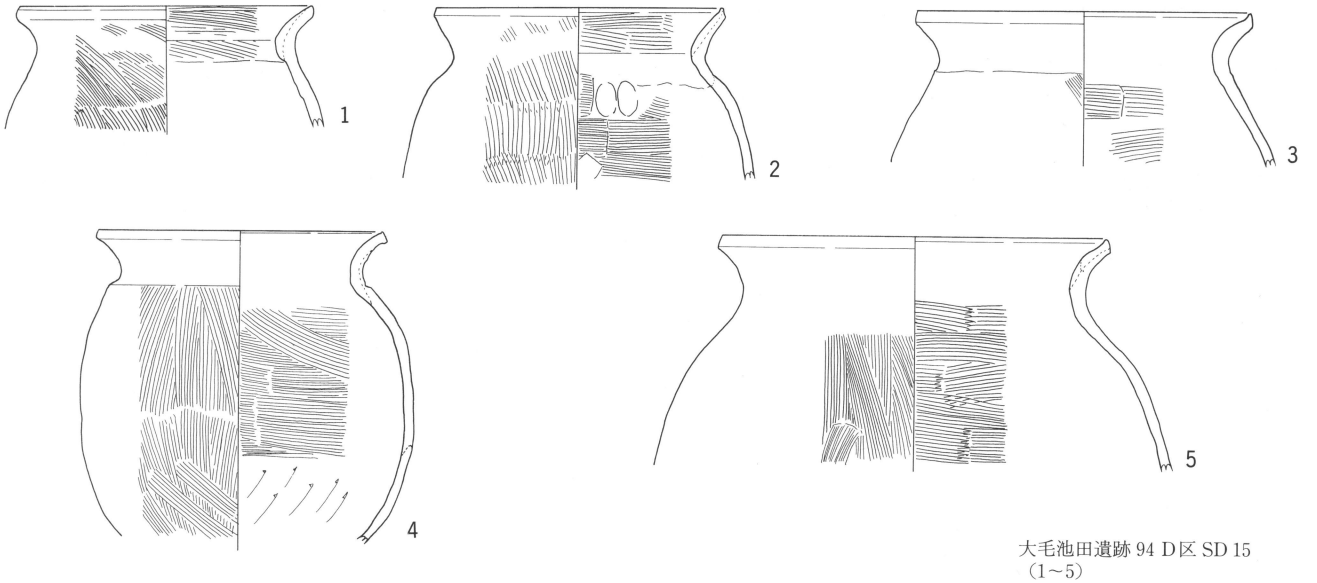
なお、類似例に名古屋城三の丸遺跡ＳＢ217・223・220がある。特にＳＢ220は住居の北辺の円形に膨らんだ場所から、穴が掘られ角柱状の石が縦に据えられている例は、大毛沖ＳＢ07例に近い。

今回は７世紀半ば～11世紀初頭を大きく５段階に区分した。細分の可能性も考えれば10段階区分まで行える。今後の展望としては、須恵器・灰釉陶器との共伴関係、器種構成などを再検討し、改めて時期設定を行いたい。

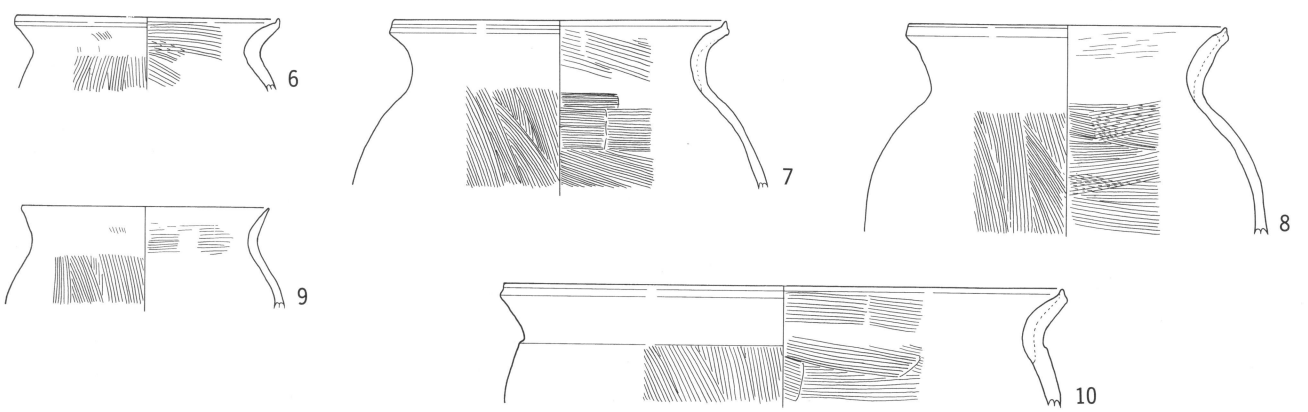
小稿を成すにあたり、須恵器・灰釉陶器の編年観について斉藤孝正氏にご教示いただきました。また、城ヶ谷和広氏、(財)愛知県埋蔵文化財センター職員各氏にもご教示いただきました。
記して感謝いたします。

**参考・引用文献**

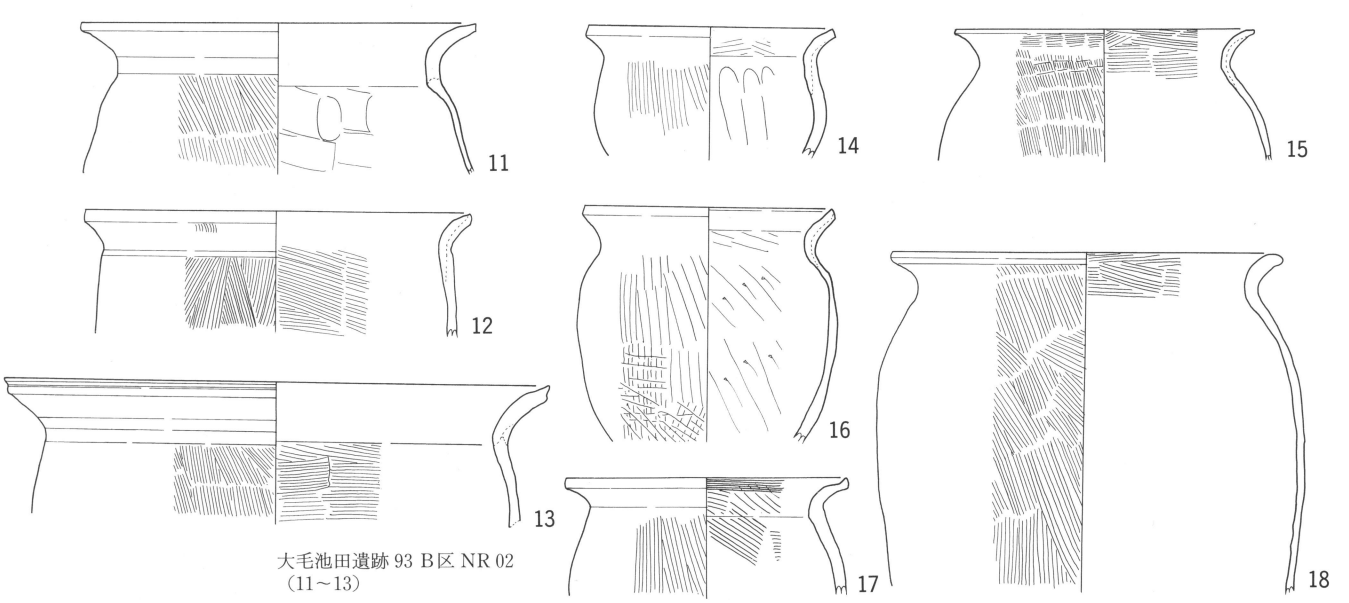
城ヶ谷和宏　「古代の土師器　～６世紀後半から11世紀の様相～」『年報　平成２年度』　1991
(財)愛知県埋蔵文化財センター　『名古屋城三の丸遺跡(１)』　1990
(財)愛知県埋蔵文化財センター　『清洲城下町遺跡』　1990
(財)愛知県埋蔵文化財センター　『大渕遺跡』　1991
城ヶ谷和宏　「尾張における７世紀から９世紀半ばの須恵器」『古代の土器研究　―律令的土器様式の西・東２須恵器―』　1993
渡辺博人　「美濃須衛窯跡群の須恵器」『古代の土器研究　―律令的土器様式の西・東２須恵器―』　1993
斉藤孝正　「東海地方の施釉陶器生産　―猿投窯を中心に―」『古代の土器研究　―律令的土器様式の西・東３施釉陶器―』　1994
外山政子　「三ッ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」『三ッ寺Ⅱ遺跡』　1991




大毛池田遺跡 94 D区 SD 15
（1～5）




大毛池田遺跡 94 C区 SD 03
（6～10）

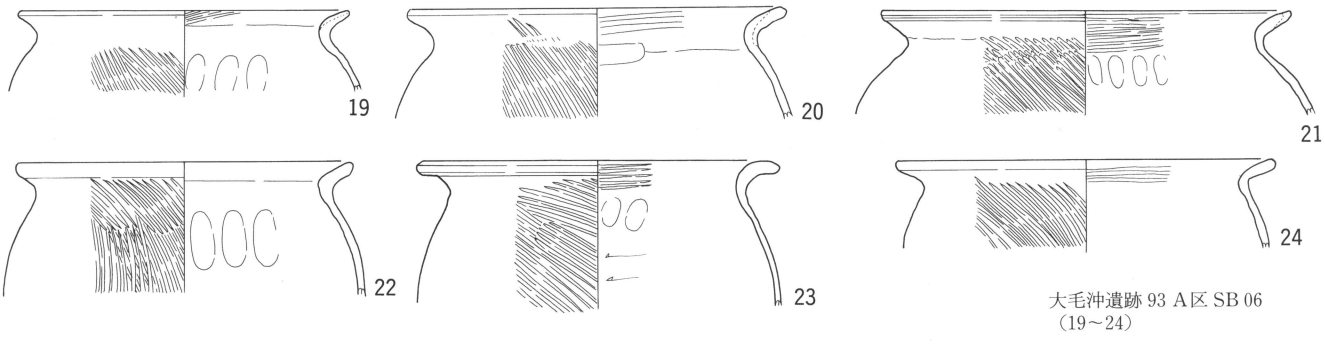



大毛池田遺跡 93 B区 NR 02
（11～13）

大毛沖遺跡 94 C区 SB 07
（14～17）

大毛沖遺跡 94 C区 SB 06
（18）

図 3　1～2 段階土師器甕実測図　S＝1/4

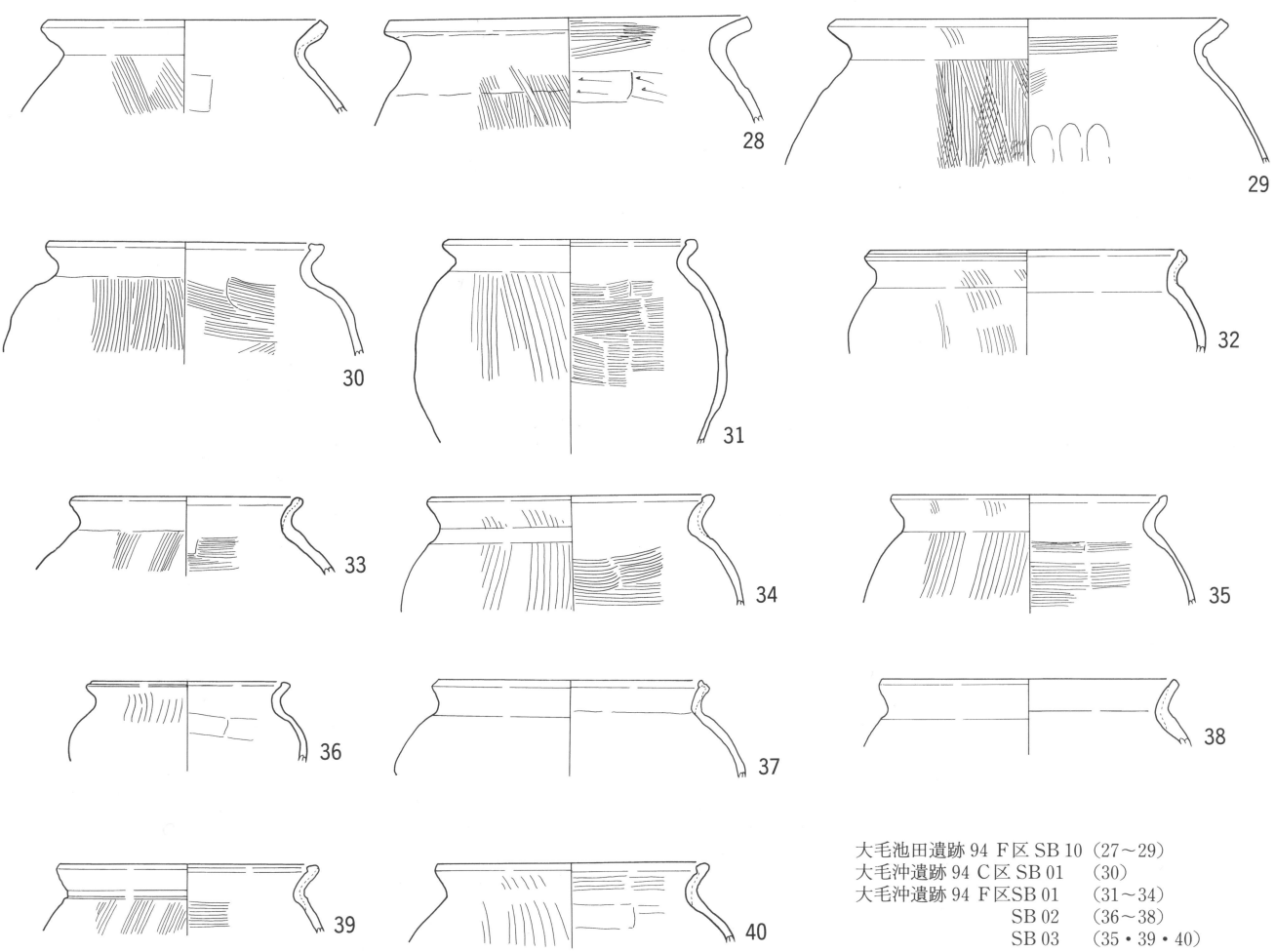



大毛沖遺跡 93 A区 SB 06
（19～24）




大毛沖遺跡 94 C区 NR 01

大毛沖遺跡 93 A区 SB 07




大毛池田遺跡 94 F区 SB 10（27～29）
大毛沖遺跡 94 C区 SB 01（30）
大毛沖遺跡 94 F区SB 01（31～34）
SB 02（36～38）
SB 03（35・39・40）

図 4　3～5 段階土師器甕実測図　S＝1/4

# 大毛沖遺跡出土の墨書陶器

小池一徳

## 1．はじめに

大毛沖遺跡の発掘調査は1993年に始まり、現在遺跡全体のほぼ80%まで進行している。これまでに167点の墨書陶（土）器が出土している。その形態等の内訳は後に詳述するが、その主体は灰釉系陶器であるので、本稿では「墨書陶器」の語を主に用いることにする。墨書された文字は、各地の集落遺跡の場合と同様に１字のみのものが主体を占め、しかも判読困難なものが多い。これらの墨書陶器について、墨書された文字の意味究明のみを第一義とするのではなく、あくまでも出土した遺構等との関わりでとらえ(1)、ひいては大毛沖遺跡の全体像を明らかにしていく一助とするのが本稿の目的である。

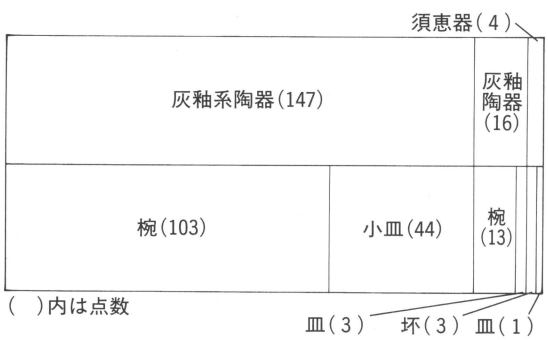
なお、墨書された文字の判読については名古屋市博物館の下村信博氏、須恵器及び灰釉陶器の年代観については文化庁の斎藤孝正氏、灰釉系陶器の年代観については、愛知県埋蔵文化財センターの池本正明氏のご教示を得た。

## 2．大毛沖遺跡の概要

大毛沖遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曽川町にかけて所在し、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防上、及び後背湿地に広がりが認められる遺跡である。本遺跡は、そのほぼ中央を北東方向から南西方向に流れた、幅16ｍ・深さ70㎝を測る旧河道との深い関わりの中で展開した、古代から中世にかけての遺跡である。すなわち、左岸域において奈良～平安時代の竪穴住居群と、鎌倉～室町時代の溝によって区画された居住域とが営まれ、流路が埋没した後、旧河道上を中心に鎌倉～室町時代の墓域が形成された。また、右岸域においては室町時代～戦国期の、周囲に溝を巡らせた集落あるいは屋敷地等の居住域が展開されている。

## 3．墨書陶器の検討

(1)　概要




第１図　墨書陶器の種類

大毛沖遺跡で出土した墨書陶器の種類や数量は第１図に示したとおりであり、灰釉系陶器が147点出土し、全体の88%を占めている。また、器種についても灰釉系陶器の椀が103点出土し、全体の61.7%を占めている。本遺跡の遺物は未整理の段階であるが、これらの比率は本遺跡の出土遺物の全体的傾向にほぼ対応するものと思われる。

本遺跡で出土した墨書陶器の墨書部位は、底部外面が圧倒的に多い。底部内面・外面の両面に墨書したものが２点出土したが、内訳は須恵器の皿と灰釉陶器の椀であり、年代的にも他の墨書陶器に対してやや異質である。この他体部から底部にかけてその内面に夥しく墨痕の残るものが１点出土したが、これは転用硯の可能性も考えられる。体部外面に墨書したものは、灰釉系陶器の椀がわずかに１点のみ出土した。

| 遺物番号 | 文字 | 器種 | 時期 | 墨書部位 | 調査区 | グリッド | 遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 油子? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 体部外面 | 93A | VH5n | SX01 | 北部系 |
| 2 | □ | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93A | VH5n | SX01 | 南部系 |
| 3 | まツ | 灰釉系小皿 | 13前半 | 底部外面 | 93A | VH5n | SX01 | 南部系 |
| 4 | □ | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93A | VH5n | SX01下層 | 南部系 |
| 5 | □ | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 93A | VH5n | SX01下層 | 南部系 |
| 6 | □ | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93A | VH5n | SX01下層 | 南部系 |
| 7 | 一 | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93A | VH6ℓ・m | SK06 | 南部系 |
| 8 | 大 | 灰釉系椀 | 12前半 | 底部外面 | 93A | VH6ℓ | SK06 | 南部系 |
| 9 | ? | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93A | VH5n | SK53 | 南部系 |
| 10 | = | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93A | VH13p | (包含層) | 北部系 |
| 11 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93A | VH8m | (包含層) | 北部系 |
| 12 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93A | VH9ℓ | (包含層) | 北部系 |
| 13 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93A | VH9o | (包含層) | 北部系 |
| 14 | ? | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93B | Ⅳ12t | (包含層) | 南部系 |
| 15 | の | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93B | Ⅳ11O・11a | (包含層) | 北部系 |
| 16 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93B | ⅣH9s | (包含層) | 北部系 |
| 17 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93B | Ⅳ11b | (包含層) | 北部系 |
| 18 | ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93B | Ⅳ18a・b | (包含層) | 北部系 |
| 19 | ?九? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93Ca | ⅣH16m | SK05 | 北部系 |
| 20 | 万? | 灰釉系椀 | 13後半 | 底部外面 | 93Ca | ⅣH17ℓ | SK06 | 南部系 |
| 21 | 四? | 須恵坏 | 8 | 底部外面 | 93Ca | | (包含層) | 老洞 |
| 22 | □ | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 93Cb | ⅣH9i | (包含層) | 南部系 |
| 23 | 十 | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1f | (包含層) | 北部系 |
| 24 | □ | 灰釉系椀 | (不明) | 底部外面 | 93D | ⅣH2c・d | (包含層) | |
| 25 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2c・d | (包含層) | 北部系 |
| 26 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2c・d | (包含層) | 北部系 |
| 27 | れ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 28 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 29 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 30 | の | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 31 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 32 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 33 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 34 | の | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 35 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 36 | の? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 37 | の | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 38 | の? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2e | (包含層) | 北部系 |
| 39 | ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2f | (包含層) | 北部系 |
| 40 | □上 | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2g | SD02 | 北部系、花押風 |
| 41 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2h | (包含層) | 北部系 |
| 42 | ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2h | (包含層) | 北部系 |
| 43 | ? | 灰釉系椀 | (不明) | 底部外面 | 93D | ⅣH2h | (包含層) | |
| 44 | めつ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2j | (包含層) | 北部系 |
| 45 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2r | (包含層) | 北部系 |
| 46 | ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH2r | (包含層) | 北部系 |
| 47 | ? | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 93D | ⅣH3d | SD08下層 | 南部系 |
| 48 | の? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH3d | (包含層) | 北部系 |
| 49 | 三or川 | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH3e | (包含層) | 北部系 |
| 50 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH3f | (包含層) | 北部系 |
| 51 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH3h | (包含層) | 北部系、花押風 |
| 52 | ?? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH3i | (包含層) | 北部系、花押風 |
| 53 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH3i | (包含層) | 北部系 |
| 54 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH3o・p | (包含層) | 北部系 |
| 55 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH4e・f | (包含層) | 北部系、花押風 |
| 56 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH4f | SD01 | 北部系 |
| 57 | 上 | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93D | ⅣH4ℓ | (包含層) | 南部系 |
| 58 | ? | 灰釉系椀 | (不明) | 底部外面 | 93D | ⅣH5d | (包含層) | |
| 59 | ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH5e | (包含層) | 北部系 |
| 60 | 悦? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH5i | (包含層) | 北部系 |
| 61 | の? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH5k | (包含層) | 北部系 |
| 62 | 十? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH5k | (包含層) | 北部系 |
| 63 | の? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6e | (包含層) | 北部系 |
| 64 | ○ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6e | (包含層) | 北部系 |
| 65 | れ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6g | (包含層) | 北部系 |
| 66 | 六? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6g | (包含層) | 北部系 |
| 67 | ?十? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6h | (包含層) | 北部系 |
| 68 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6h | (包含層) | 北部系 |
| 69 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6h | (包含層) | 北部系 |
| 70 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6h | (包含層) | 北部系 |
| 71 | ま? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6i | (包含層) | 北部系 |
| 72 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1・2k | SD04 | 北部系 |
| 73 | の? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1・2・3g | (包含層) | 北部系 |
| 74 | 悦? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1・2・3g | (包含層) | 北部系 |
| 75 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1・2・3j | (包含層) | 北部系 |
| 76 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1・2・3ℓ | (包含層) | 北部系 |
| 77 | ? | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93D | ⅣH1・2・3ℓ | (包含層) | 南部系 |
| 78 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1・2・3ℓ | (包含層) | 北部系 |
| 79 | 悦 | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1・2・3n | (包含層) | 北部系 |
| 80 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH3・4h | (包含層) | 北部系 |
| 81 | 上□? | 灰釉皿 | 10 | 底部外面 | 93D | ⅣH5・6・7h | (包含層) | 虎渓山1 |
| 82 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH6・7k | (包含層) | 北部系 |
| 83 | 悦? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | (北トレンチ) | | 北部系 |
| 84 | ?も | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | (南トレンチ) | | 北部系 |
| 85 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93D | ⅣH1h | (包含層) | 北部系 |

| 遺物番号 | 文字 | 器種 | 時期 | 墨書部位 | 調査区 | グリッド | 遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 86 | めorぬ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 93Fb | ⅦH6g | SD13 | 北部系 |
| 87 | 金 | 灰釉椀 | 10 | 底部内面 | 93Fb | ⅦH8g | SD08 | 虎渓山1 |
| 88 | ? | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 93G | VG1c | SE04 | 南部系 |
| 89 | ? | 灰釉系椀 | 12前半 | 底部外面 | 94Ca | VG17・18c | SK12 | 南部系 |
| 90 | ? | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94Ca | VG18e | NR01 | 虎渓山1 |
| 91 | □ | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94Ca | VG15f | NR01 | S27 |
| 92 | 十 | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ca | VG17c | (包含層) | 北部系 |
| 93 | ⊕or⊗or田 | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ca | VG13d | (包含層) | 北部系 |
| 94 | か? | 灰釉系椀 | (不明) | 底部外面 | 94Ca | VG16e | (包含層) | |
| 95 | □ | 灰釉椀 | 9 | 底部外面 | 94Ca | VG18e | (包含層) | 光ヶ丘1 |
| 96 | □ | 灰釉椀 | 9 | 底部外面 | 94Cb | VG14i | SK21 | 光ヶ丘1 |
| 97 | 大□? | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 94Cb | VG15j | (包含層) | 南部系 |
| 98 | 大田 | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94Cb | VG13k | (包含層) | 虎渓山1 |
| 99 | 大田 | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94Cb | VG13ℓ | (包含層) | 虎渓山1 |
| 100 | まツ | 灰釉系小皿 | 13前半 | 底部外面 | 94Cc | ⅦG2o | SK58 | 南部系 |
| 101 | 上大□ | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 94Cc | ⅦG1p | SK55 | 南部系 |
| 102 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94E | VG11e | SD05 | 北部系 |
| 103 | ○ | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 94F | VG13t | (包含層) | 南部系 |
| 104 | ○ | 灰釉系小皿 | 13前半 | 底部外面 | 94F | VH15d | (包含層) | 南部系 |
| 105 | ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94F | VH16b | (包含層) | 北部系 |
| 106 | ⊕or⊗ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94F | VH16c | (包含層) | 北部系 |
| 107 | ? | 灰釉系椀 | (不明) | 底部外面 | 94F | VH16d | (包含層) | |
| 108 | ⊕? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94F | VH17b | (包含層) | 北部系 |
| 109 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94F | VH17a・b | (包含層) | 北部系 |
| 110 | ? | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94F | VH17c | (包含層) | 虎渓山1 |
| 111 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94F | VH17d | (包含層) | 北部系 |
| 112 | 巫? | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 94F | VH17e | (包含層) | 南部系 |
| 113 | □ | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 94F | VG18t | (包含層) | 南部系 |
| 114 | ? | 灰釉系椀 | (不明) | 底部外面 | 94F | VG19t | (包含層) | |
| 115 | 光? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94F | VG18・19s | SK06 | 北部系 |
| 116 | ? | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 94F | (南部分) | (包含層) | 南部系 |
| 117 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94F | (南部分) | (包含層) | 北部系 |
| 118 | 正□ | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 94F | (南部分) | (包含層) | 南部系 |
| 119 | に | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94F | (南部分) | (包含層) | 北部系 |
| 120 | 上 | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG9n | SD07 | 南部系 |
| 121 | 上 | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG9n | SD07 | 南部系 |
| 122 | 十 | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG14o | SE01 | 北部系 |
| 123 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG14o | SE01下層 | 北部系 |
| 124 | ? | 須恵坏 | 9 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG15o | (包含層) | O-10～1G78 |
| 125 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG14o | SE01下層 | 北部系 |
| 126 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG9n | SE03 | 北部系 |
| 127 | 首 | 灰釉皿 | 10 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG14q | (包含層) | 虎渓山1 |
| 128 | 公 | 須恵坏 | 8 | 体部外面 | 94Ha | ⅢG14q | (包含層) | 老洞 |
| 129 | の? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG9n | SE02 | 北部系 |
| 130 | ○ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG14p | SK145 | 北部系 |
| 131 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG9k | SX01 | 北部系 |
| 132 | ○ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG14p | (包含層) | 北部系 |
| 133 | □ | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 94Ha | ⅢG9o | (包含層) | 南部系 |
| 134 | の? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | ⅢH20g | SE03 | 北部系 |
| 135 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | ⅢH20g | SD12 | 北部系 |
| 136 | 一? | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 94Hb | ⅢH20g | SD12 | 南部系 |
| 137 | ? | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 94Hb | ⅢG18r | SD03 | 南部系 |
| 138 | 大 | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | ⅢH20f | SE02 | 北部系 |
| 139 | 公 | 須恵皿 | 8 | 底部外面 | 94Hb | ⅢH17a | NR01 | 美濃須衛 |
| | 公 | | | 底部内面 | | | | |
| 140 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | ⅢH20g | (包含層) | 北部系 |
| 141 | =? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | ⅢH19ij | (包含層) | 北部系 |
| 142 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | ⅢH19g | (包含層) | 北部系 |
| 143 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | | (表土掘削) | 北部系 |
| 144 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | | (表土掘削) | 北部系 |
| 145 | ㊀? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | | (表土掘削) | 北部系 |
| 146 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | | (表土掘削) | 北部系 |
| 147 | ? | 灰釉系椀 | (不明) | 底部外面 | 94Hb | | (表土掘削) | |
| 148 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94Hb | | (表土掘削) | 北部系 |
| 149 | □ | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94D | VG11g | (包含層) | 北部系 |
| 150 | 三or川 | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 94D | VG8g | (包含層) | 南部系 |
| 151 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94D | VG8h | (包含層) | 北部系 |
| 152 | 火?口? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94D | VG8h | (包含層) | 北部系 |
| 153 | □ | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94D | VG8h | (包含層) | 北部系 |
| 154 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94D | VG8i | (包含層) | 北部系 |
| 155 | ? | 灰釉系椀 | 12～13初 | 体部・底部内面 | 94D | VG9h | (包含層) | 南部系・転用硯? |
| 156 | ? | 灰釉系小皿 | 13後半～14 | 底部外面 | 94D | VG5j | (包含層) | 北部系 |
| 157 | 金? | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94D | VG11ℓ | (包含層) | 虎渓山1 |
| | 金? | | | 底部内面 | | | | |
| 158 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94D | VG9・10i | SK12 | 北部系 |
| 159 | □ | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94D | VG7m | (包含層) | S27 |
| 160 | □ | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 94D | VG7o | (包含層) | 南部系 |
| 161 | 大田? | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94D | VG7o | (包含層) | 虎渓山1 |
| 162 | 大 | 灰釉系椀 | 12～13初 | 底部外面 | 94D | VG8n | (包含層) | 南部系 |
| 163 | ? | 灰釉系椀 | 13後半～14 | 底部外面 | 94D | VG9p | (包含層) | 北部系 |
| 164 | 大? | 灰釉椀 | 9 | 底部外面 | 94D | VG10m | (包含層) | 光ヶ丘1 |
| 165 | 大?? | 灰釉椀 | 10 | 底部外面 | 94D | VG10m | (包含層) | 虎渓山1 |
| 166 | ? | 灰釉系椀 | 13前半 | 底部外面 | 94D | VG10n | (包含層) | 南部系 |
| 167 | □万 | 灰釉皿 | 9 | 底部外面 | 94D | VG10i | NR01 | 光ヶ丘1 |

＊「文字」の項は次のように記した。「？」判読できないもの。「□」判読できないもののうち、字数を確定できるもの。「…？」明確に判読できないが、推定したもの。

# 墨書陶器一覧

墨書の文字数は90%以上が1文字で、2文字ないし3文字のものがわずかに出土し、4文字以上のものは出土しなかった。そしてほとんどの墨書陶器が小片で、しかも墨痕が薄れているため、その判読は極めて困難なものが多い。しかし、出土した墨書陶器の数量の多さは、墨書という行為がより広くなされたことを物語っており、詳細な検討が必要だと考える。

⑵　年代観

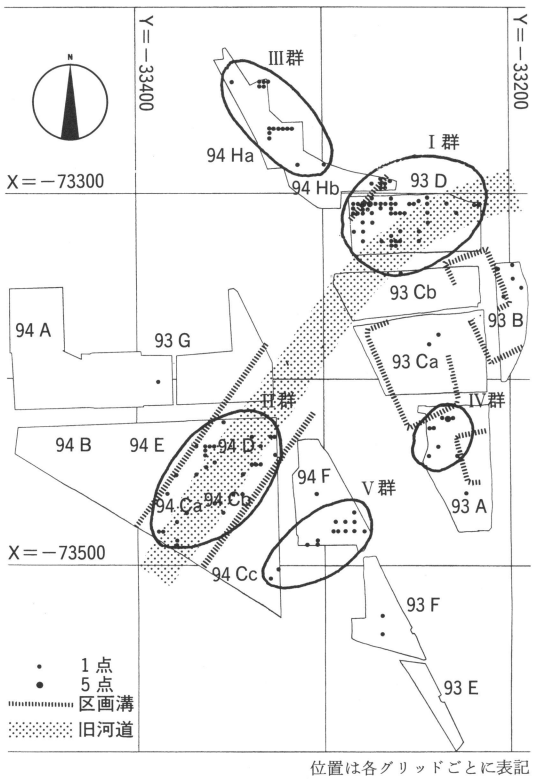
147点に及ぶ灰釉系陶器について、藤沢良祐氏の編年（藤沢1994[(2)]）に基づいて整理すると、①第3型式～第5型式を中心とした南部系の灰釉系陶器（12世紀～13世紀初頭）、②第6型式を中心とした南部系の灰釉系陶器（13世紀前半）、③第7型式～第10型式の北部系の灰釉系陶器（13世紀後半～14世紀）に分類できる。この三者の割合は、①が約10%、②が約15%、そして③が約75%を占めている。したがって、墨書が最も広く行われた時期は③の時期と考えることができる。また、各灰釉系陶器の高台部分の摩耗が進んでおらず、使用した痕跡があまりないものが多く、概して一過性の使われ方をされ、その後廃棄されたことも想定できる。

16点出土した灰釉陶器については、虎渓山1号窯式（10世紀）のものを主体とし、光ケ丘1号窯式（9世紀）及び篠岡27号窯式（10世紀）のものが出土した。

4点出土した須恵器については、美濃須衛老洞窯段階で生産されたと思われるものが主体を占めている。

⑶　性格

墨書された文字が判読できるものは全体の40%程度であるが、出土した遺構・区域との関わりを見ながら、特徴的な墨書内容について検討してみたい。ただし、全体的に遺構に伴う墨書陶器が少なく、遺構検出段階で出土したものが多い。このことは墨書陶器に限らず、本遺跡から出土した遺物全体にも共通していえることでもあるので、遺構直上及び周辺の包含層から出土したものについても考慮していきたい。

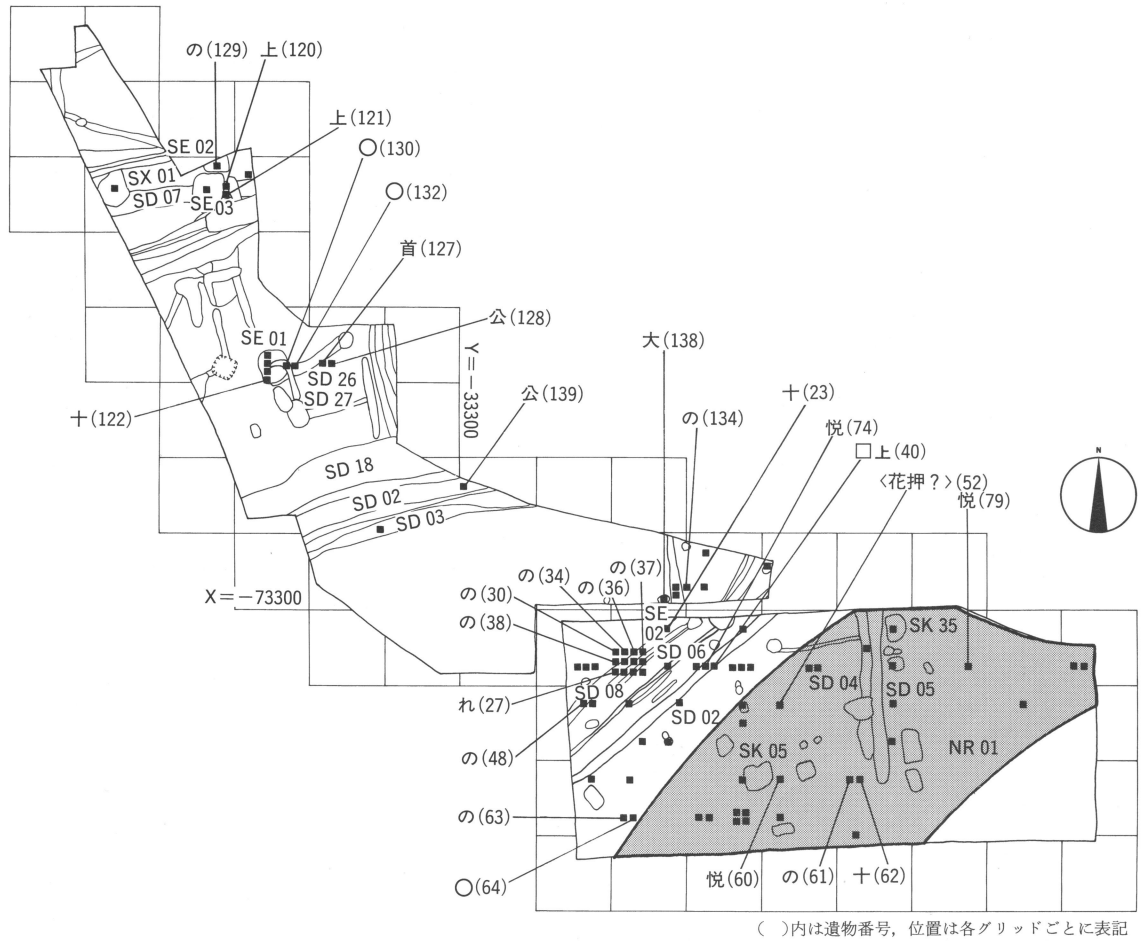



第2図　墨書陶器出土位置図（1：4000）

墨書陶器の出土地点について、その特徴を見てみると、第2図に示したようにⅠ～Ⅴの5つの群でとらえることができる。ただし、Ⅰ群とⅡ群については、いずれも旧河道NR01に直接関わるものと想定すれば、似通った性格を有するひとつのまとまりと考えることもできる。各群ごとに墨書陶器の性格について検討していきたい。

［Ⅰ群］

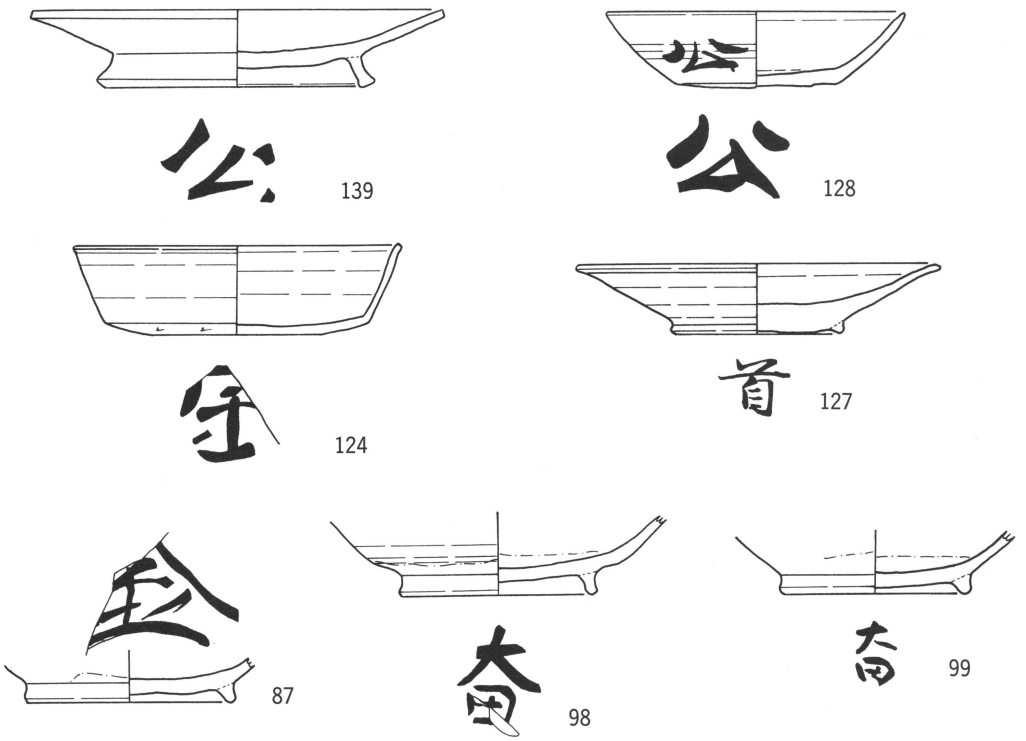
本遺跡全体を通じて、判読できた墨書の中で最も多く見られたのは「の」である。推定したものを含めると12点に及ぶ。「の」を墨書したが陶器が




第３図　93Ｄ区・94Ｈ区墨書陶器出土位置（1：1000）

出土した範囲は93Ｂ・Ｄ区、94Ｈａ・Ｈｂ区に限られている。これはⅠ群を中心として、本遺跡中最も多数の墨書陶器が集中して出土した区域である。そして、その中でも特に「の」を墨書した陶器が集中したのは、93Ｄ区のＳＤ08上の包含層である。ＳＤ08は幅約1.2m・深さ約30cmを測り、遺物は灰釉系陶器がほとんどを占める。この溝は旧河道の両岸に巡らされた13～15世紀の溝の一つで、右岸に位置し、洪水によって埋まっては掘り返した形跡もうかがわれるが、旧河道を区画するものと考えられる。この溝を中心に出土した「の」と墨書された陶器は、すべて13世紀後半～14世紀の北部系の灰釉系陶器で、椀（10点）と小皿（２点）の底部外面に墨書されており、概して整った筆跡となっている。しかし、「の」と判読したものの中に「の」・「の」・「の」の３つのパターンが認められる。このような字体の違いはそれぞれを識別するために意図的に使い分けたことによるか、あるいは文字の普及過程に起因するものと思われる。また、そもそも同様の墨書陶器が一定の区域で出土したことは、その区域にまとまりを持つ一定の人間集団が存在したことを物語るものであろう(3)。「の」という語の意味については、さらに謎が深い。「の」に始まる人名・地名等を省略したものとも考えられる。

「の」と同じく、Ⅰ群で多く出土したものとして「悦」（４点）及び花押風の墨書（４点）をあげることができる。「悦」については93Ｄ区のＳＤ02、



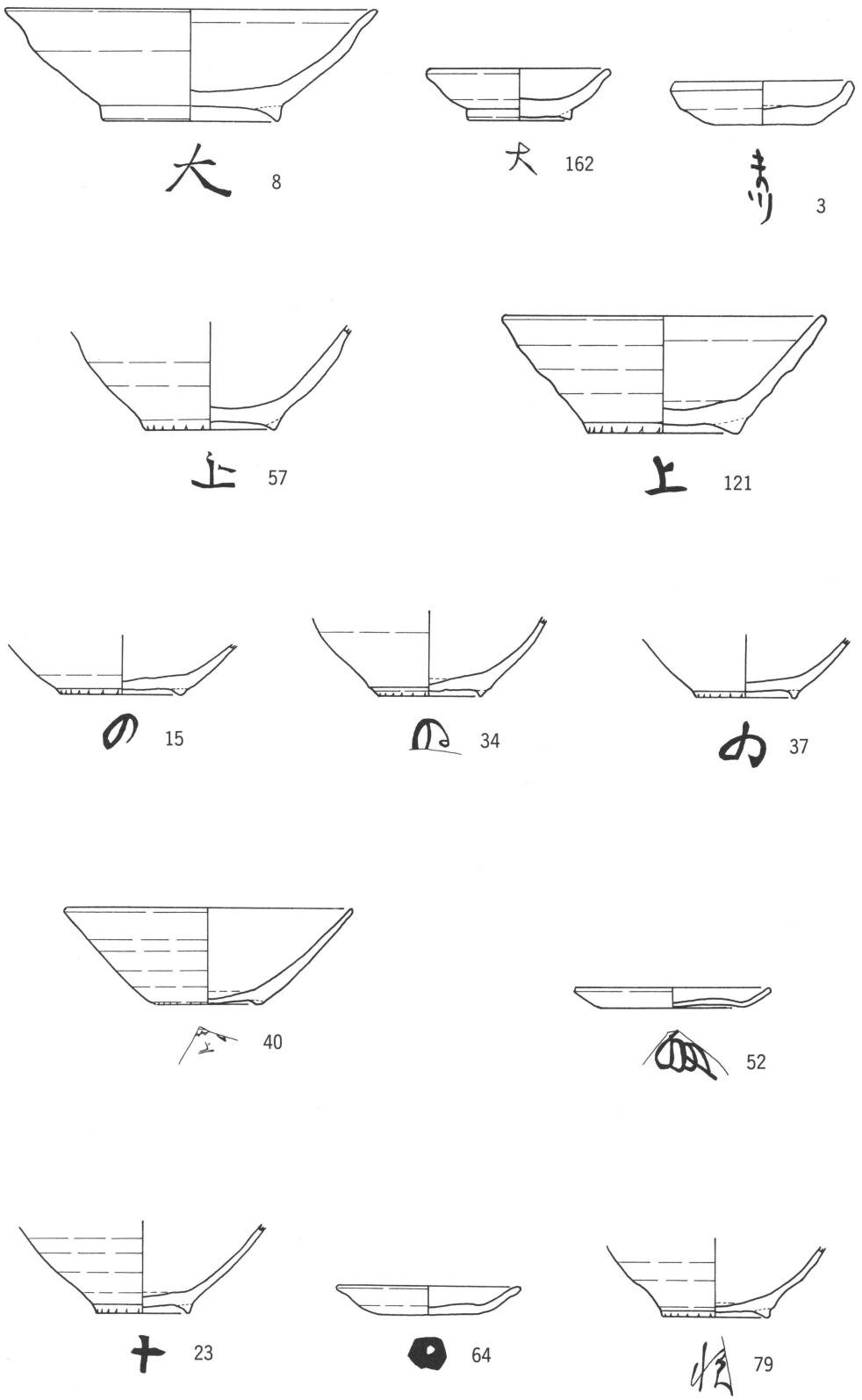

第４図　墨書陶器実測図Ⅰ（須恵器・灰釉陶器）（1/3）

及びその周辺を中心に出土した。ＳＤ02は幅約1.3ｍ・深さ約30cmを測り、遺物は13世紀後半～14世紀の北部系の灰釉系陶器を主体とする。性格はＳＤ08と同じく、旧河道との区画を意図したと思われる溝である。「悦」は同一人物によって書かれたと思われるほど酷似しており、いずれも細い筆で書かれ、筆運びも滑らかな草書体で書かれている。「悦」の字義からすれば吉祥句として用いられたのかもしれない。

花押風の墨書は４点とも異なる内容のもので、しかもすべて小片であり、それぞれの全体をとらえることはできない。そのうち52の花押らしきものは、いかにもたどたどしい筆跡である。40についてはわずかな部分しか見ることはできないが、書き慣れたものであることがうかがわれ、また花押らしきものの下に小さめの字で「上」と墨書されている。これらの花押風の墨書については、どのような階層の人物によるものか現段階では不明であるが、大毛地域における領域支配の問題との関連でも興味深い。

［Ⅱ群］

Ⅱ群に特有な墨書内容としては、「大田」をあげることができる。これについては農耕儀礼との関わりがよく指摘されるが(4)、本遺跡ではⅡ群から３点が出土した。３点すべて虎渓山１号窯式の灰釉陶器の底部外面に墨書されており、本遺跡で出土した墨書陶器の中ではかなり早い段階に現われたものといえる。書体はそれぞれで異なっているが、出土地点はいずれも旧河道の左岸域である。旧河道ＮＲ01については先にも簡単に触れたが、河道が東（左岸の側）へ移動したことにより、９～13世紀にかけて河跡湖へと変容し、やがて中世末段階に埋没していったものである。これらの墨書陶器はその出土層位からも墨書の時期を10世紀と想定することができる。これと同じ層位では、近接した地点で馬の下顎骨が２点出土している。また




第5図　墨書陶器実測図2（灰釉系陶器）（1/3）

やや離れるが、旧河道の上流部にあたる93Ｄ区において、先に触れたＳＤ08の下層で束状の藁と馬の頭部と思われる骨が出土している。これらは、旧河道の周辺において何らかの祭祀が行われたことを物語るものであろう。

旧河道左岸域では、灰釉陶器の椀の底部内面と外面の両面に「金」と墨書したものが出土した。内面に墨書があることから、食膳用以外の目的で使用されたものであろう。「金」と墨書した灰釉陶器はもう１点、93Ｆ区のＳＤ08で出土している。ＳＤ08は幅約２ｍ・深さ約70㎝で断面はＶ字形を呈した溝であり、11～12世紀の須恵器や灰釉陶器が出土している。「金」の意味は人名もしくはその省略形、または吉祥句的な性格も考えられる。

［Ⅲ群］

本遺跡における最も早い年代の墨書土器は、わずかな点数ではあるがⅢ群で出土している。判読できるのは坏の底部外面に「公」と墨書した須恵器と、皿の底部外面及び内面に同じく「公」と墨書した須恵器である。いずれも美濃須衛古窯で生産されたものと思われ、筆跡も類似している。また、皿の底部外面に「首」と墨書した灰釉陶器も出土した。特にこの「首」は、際立って端正な楷書で美しい筆跡である。この３点は他の墨書陶器に対して、明らかに異質である。判読できない墨書を施した須恵器の坏も出土しているが、これらは94Ｈａ区の包含層及びＨｂ区下面のＮＲ01から出土した。「公」・「首」ともに官衙との関わりを匂わせる語でもあるが、人名もしくはその一部とも考えられる。本遺跡の北西に隣接し、「美濃国」施印須恵器を含め美濃産の須恵器を多く出土した大毛池田遺跡のうちの94Ｅ区で体部外面と底部内面に「公平」と墨書した、美濃須衛古窯で生産されたと思われる須恵器が出土したことは、遺跡間の関係を考える上で注目すべきである。

Ⅲ群とした区域から出土した墨書陶器は、先に述べた３点を除くと北部系の灰釉系陶器がほとんどを占め、「上」・「十」等の墨書が見られる。94Ｈａ・Ｈｂ区から大毛池田遺跡にかけて、15世紀後半～16世紀初頭にかけての大規模な区画溝が検出されている。墨書陶器も類似したものが両者で出土しており、この時期についても大毛池田遺跡との関係に留意する必要がある。

［Ⅳ・Ⅴ群］

Ⅳ群にあたる93Ａ区では、特にＳＸ01に集中して墨書陶器が出土した。ＳＸ01は約７ｍ×８ｍ・深さ約1.1ｍの不定形な摺鉢状を呈した遺構で、煤が付着した多数の灰釉系陶器や焼けた河原石、さらに「南無大口」と表記した卒塔婆が出土した。灰釉系陶器は第３～10型式と幅広く出土しているが、Ⅰ～Ⅲ群と比較すると、第３～６型式の南部系の灰釉系陶器の占める割合が高い。Ⅲ群の墨書はその多くを占めるＳＸ01内のものが焼けているためか、判読困難なものが多い。その中で明確に判読できるのが、灰釉系陶器の小皿の底部外面に見られる「まツ」という墨書である。これも、人名もしくはそれを省略したものであろうか。ＳＸ01は陶器等の廃棄の場であったが、単なる廃棄以外の祭祀的な目的をもった施設であった可能性が考えられる。「まツ」と墨書された灰釉系陶器の小皿は、直線距離で100ｍ以上離れた94Ｃｃ区のＳＫ58でも出土したが、両者は同一人物の筆跡と思われる。93Ａ区と94Ｆ区の間が調査できないため、墨書陶器の集中地点をⅣ群とⅤ群とに区別したが、「まツ」と墨書された墨書陶器が両群で出土したことや、両群に共通してやや早い年代の灰釉系陶器の占める割合が高いことから、Ⅳ群とⅤ群とに分けた区域を一つのまとまり、または日常的なつながりをもった区域と考えることもできる。

［その他］

Ⅰ～Ⅴの群に限定されず、遺跡全体をとおして出土している墨書陶器として、「十」をはじめとす

る数字、「○」をはじめとする記号を墨書したものがある。日常生活において、または祭祀・儀礼に際して、他と識別することを意図したものと思われる。漢字や平仮名を墨書したものについても、同様な意図から、半ば記号的に使用されたものも多いのではないかと考えられる。

さらに、「大」という墨書が灰釉及び灰釉系陶器に見られ、やはり遺跡全体をとおして出土している。吉祥句の一つであるか、大毛という地名にちなむ「大」であるかを判断するには、現段階では資料があまりに乏しい。

### 4．墨書陶器からみた大毛沖遺跡

ここまで大毛沖遺跡で出土した墨書陶器の性格について、その形態及び出土した遺構・区域との関わりを中心に検討してきた。ここでそれらを総合することにより、出土した墨書陶器の空間的な広がりと時間的変遷からみた大毛沖遺跡について整理しておきたい。

古代においては、「公」・「首」の文字を墨書した須恵器や灰釉陶器が出土したⅢ群の区域に、官衙との関係を有する可能性のある空間が存在したと考えられる。古代末期から中世にかけては、「大田」・「まツ」・「大」及び「の」・「悦」等の文字や、「○」等の記号を墨書した灰釉陶器や灰釉系陶器が出土した、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ群の区域に、農耕色の濃い生活空間が想定できる。さらに中世後半になると、花押風の墨書を出土したⅢ群の区域に、支配階層的な集団の居住空間を想定することができるのではないかと考える。

墨書陶器は、その多くが旧河道及びそれを区画する溝等から出土している。旧河道及びその周辺は、農耕等の祭祀の後、墨書陶器が投げ入れられた場、もしくは祭祀の場そのものとしての性格を有していると考える。周知のとおり、旧河道から墨書土器が集中的に出土する例は、伊場遺跡・勝川遺跡等をはじめ各地で報告されており、祭祀との関わりが指摘される(5)。しかし、祭祀の形態をさらに明らかにするような、遺構・遺物の確認が待ち望まれる。

本遺跡で出土した墨書陶器は、墨書の内容及び陶（土）器の形態が多岐にわたっている。空間的・時間的な広がりに加え、社会階層間の広がりについても留意すべきであり、今後の検討課題としたい。

なお、本稿作成中に94Ｇ区において、旧河道内に集石と、その集石部分より呪符と思われる木片を検出・出土したことを、加えて報告しておきたい。旧河道及び大毛沖遺跡を考察する上で、注目すべき視点となろう。

末筆ながら本稿の作成にあたり、名古屋市博物館の下村信博氏、文化庁の斎藤孝正氏をはじめ、愛知県埋蔵文化財センター先学諸氏の貴重なご教示を得たことをここに記し、感謝申し上げたい。

**註**

(1) 平川南、天野努、黒田正典「古代集落と墨書土器」国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第22集』(1989．3)

(2) 藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」三重県埋蔵文化財センター『研究紀要第３号』(1994．３)

(3) 鬼頭清明『古代の村』(岩波書店)

(4) 平川南「墨書土器とその字形」国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』(1991．11)

(5) 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編２』(1980)
愛知県埋蔵文化財センター『勝川遺跡Ⅳ』(1992)

# 田所大溝とその周辺

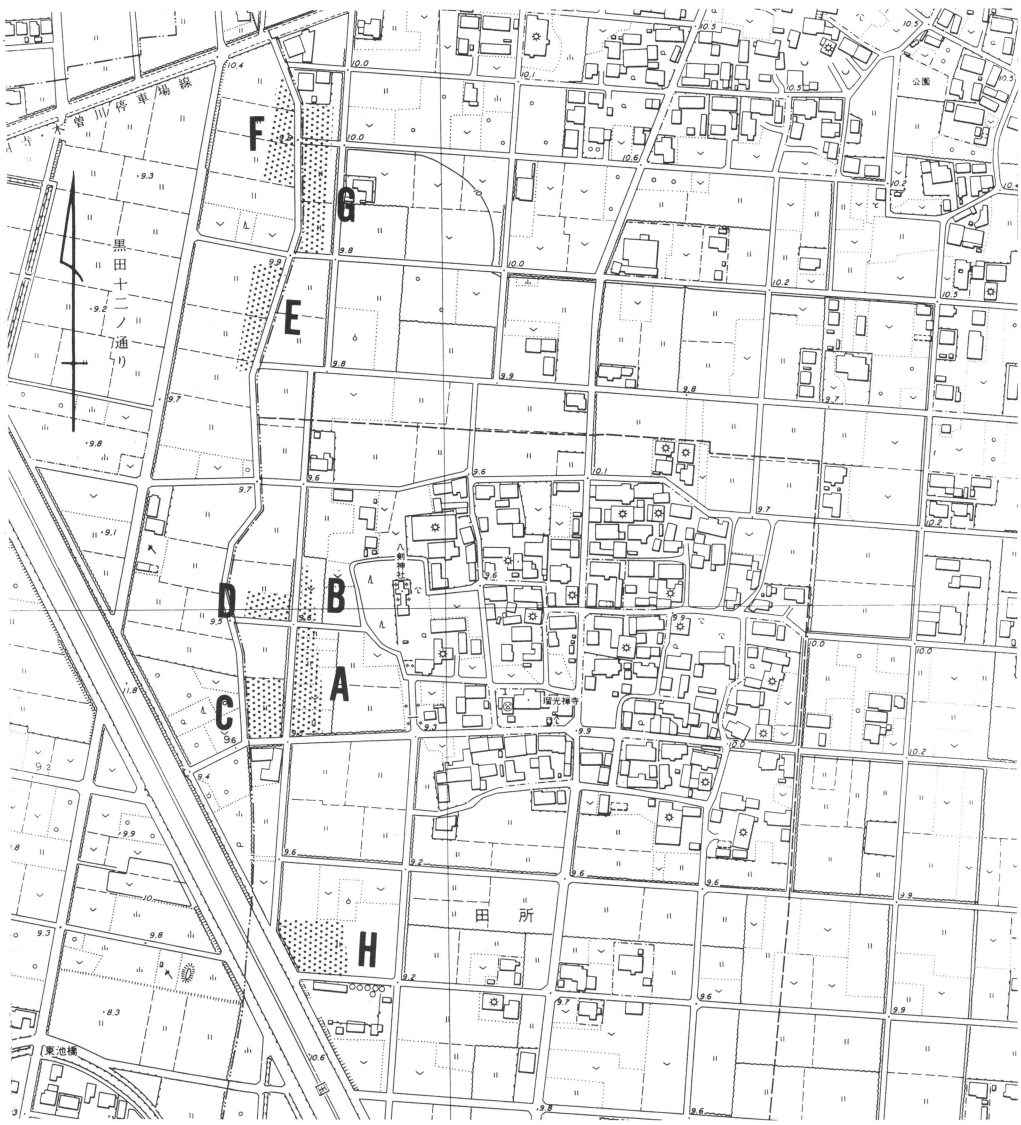
増澤　徹

## 1．はじめに

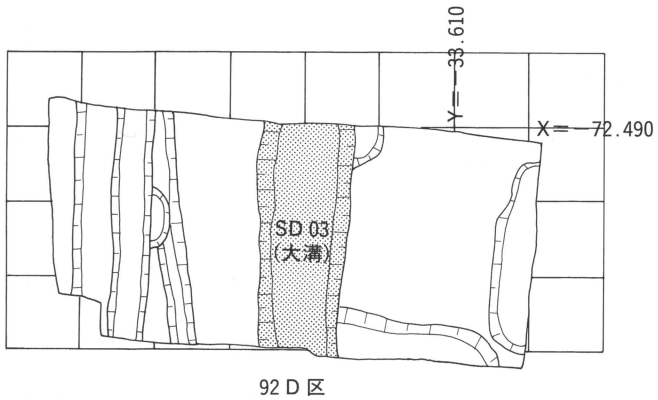
田所遺跡は、一宮市大字田所と隣接する葉栗郡木曽川町黒田にまたがり、木曽川によって形成された自然堤防上および後背湿地に位置している。現況は標高10m前後の水田及び畑地である。東海北陸自動車道の建設にともなう事前調査として、平成４年７月から調査が開始された。

## 2．平成４年度の調査の結果－大溝の検出

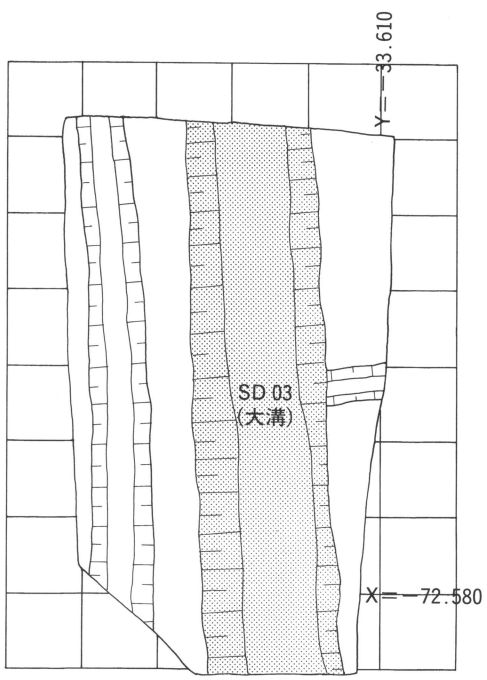
本年度の調査において、92Ｃ区と92Ｄ区から幅８～10mの南北方向に走る中世（鎌倉時代）の大溝が検出された。また、92Ｈ区では南北に走る溝に加えて、東西方向に走る幅約15mの溝が検出された。さらに92Ｅ区の南端では、南から東へと屈曲していると思われる溝らしき遺構が検出された



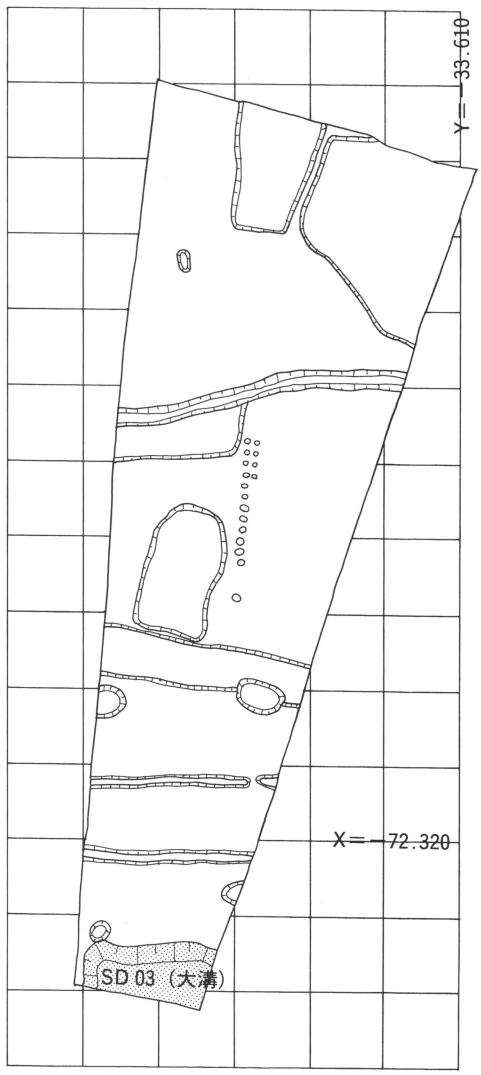

第１図　平成４年度調査区位置図（１：5000）



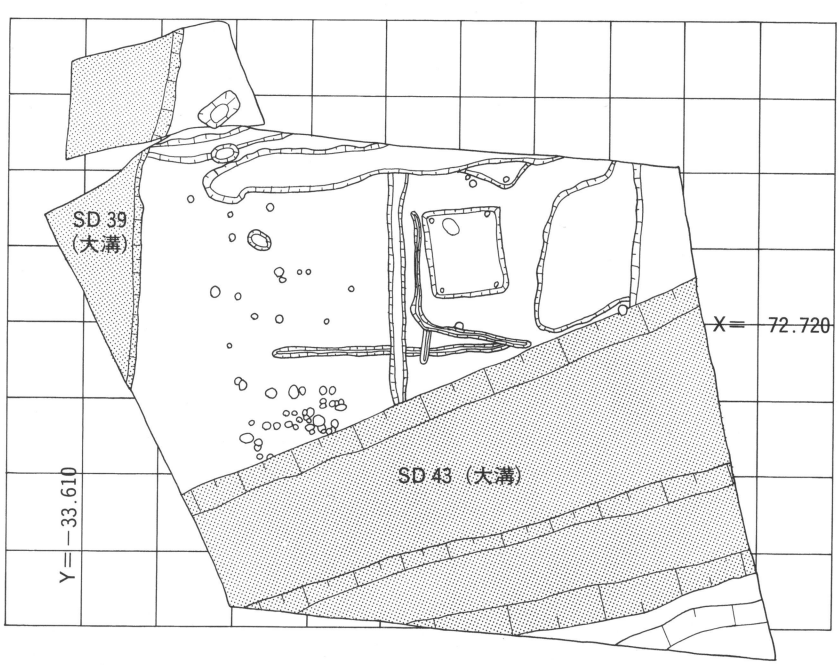

92 D 区




92 C 区

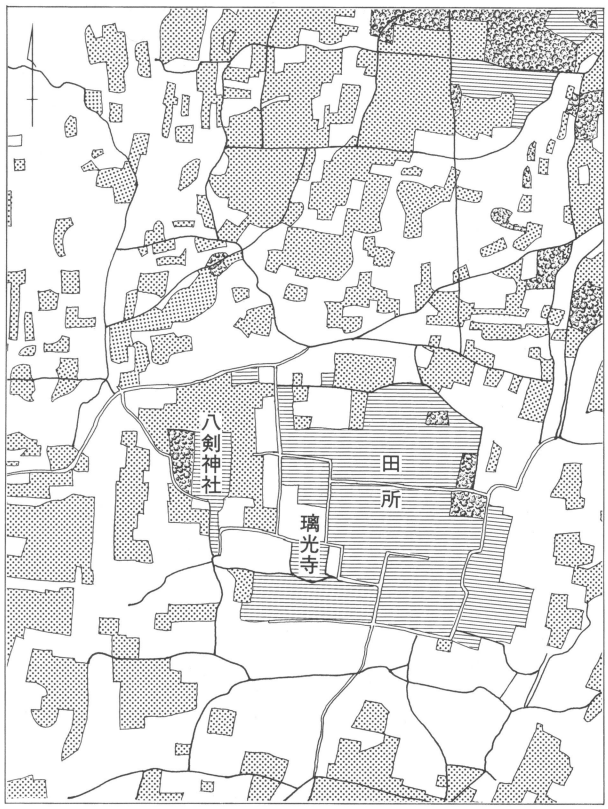



92 E 区




92 H 区

第 2 図　92 C ・ D ・ E ・ H 区遺構図（ I ：500）




第３図　田所の土地利用図
（明治17年の地籍図より作成）



田所周辺の航空写真

（第２図）。ただ、この中世の大溝と同時期の遺構については、92Ｆ・Ｇ区で墳墓堂を中心とした13～14世紀の墓域が確認されたものの、大溝に沿った地域では検出されなかった。

### ３．田所集落を囲む大溝の推定

前述の92Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｈの４つの発掘区から検出された大溝は、田所集落との位置関係から考えると、集落を囲む可能性も出てきた。そこで、明治17年の地籍図と、昭和25年に米軍が撮影した航空写真を基に、その位置を推定してみた。地籍図を取り上げたわけは、土地利用の状況が細かく読み取れ、そこから当時の地形が類推されるためである。特に田所は木曽川によって形成された自然堤防と後背湿地が入り組んだ場所に位置しており、古来畑作地としての利用が多かった。寛文12年(1672)頃のすがたを示す『寛文村々覚書』によると、畑・宅地の面積は79.9反であるのに対し、田の面積は20.2反であり、田の面積の割合は20％程度しかない。それが、江戸中期の新田開発及び、水利設備の整備による畑地の田への転換が進んだ結果、明治９年には畑・宅地面積92.4反に対して田の面積95.4反と、田の面積が50％以上の割合を示すに至った。つまり、地籍図に描かれた畑の部分は、中世においても畑か未開墾地であった可能性が高く、地籍図の田の部分に大溝が存在する可能性が高いと思われるのである。一方、航空写真からは、色調の差や模様から微地形が読み取れるので、低地の部分を判読することによって、大溝の位置が推定できると考える。

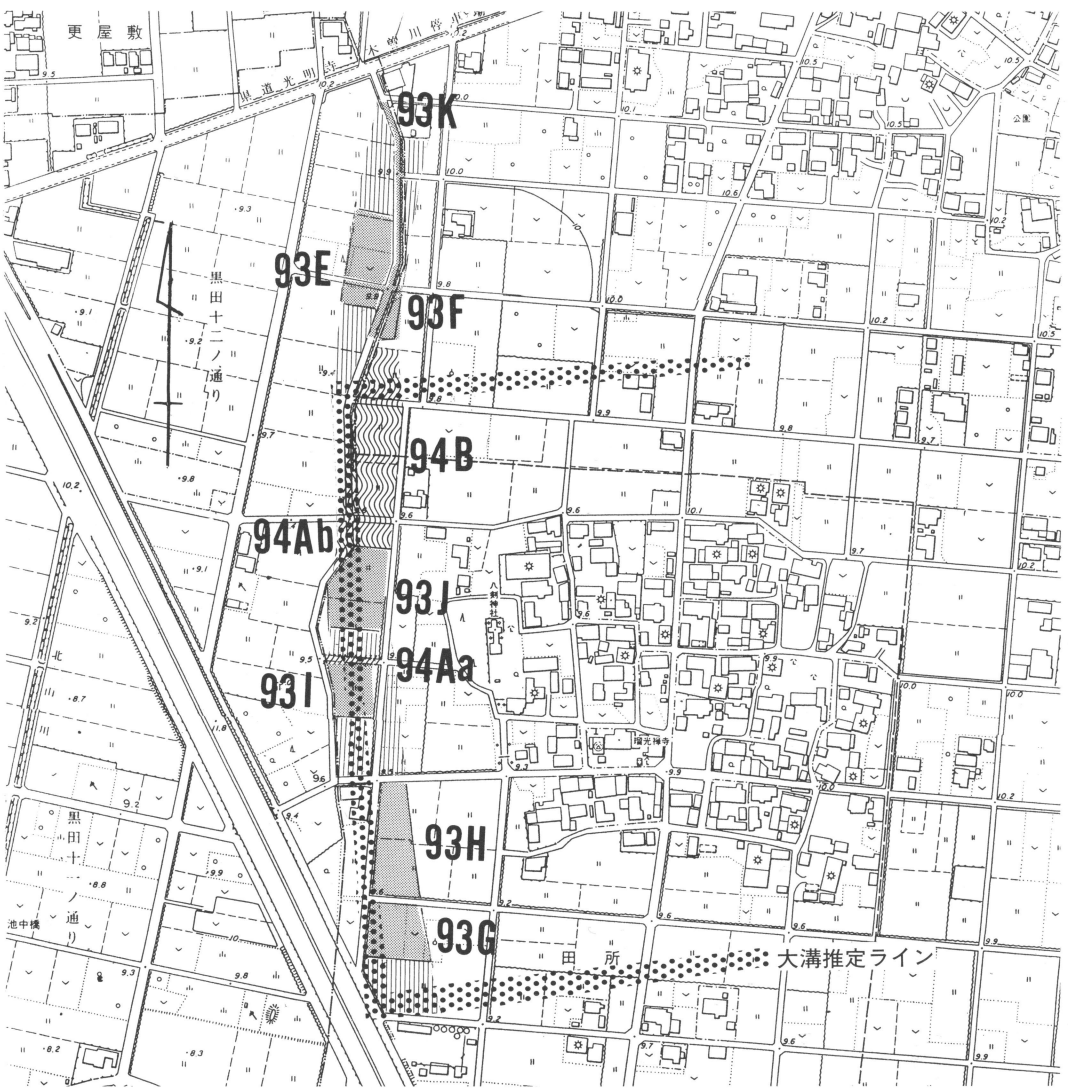
まず、地籍図を基に作成した土地利用図（第３図）を見ると、田所集落は東西・南北共に約200ｍの範囲に住居が密集しており、集落の西に村社八剣神社があり、その周囲には畑地が分布している。この住居の密集している部分と神社を含めた畑地の部分を合わせた部分が、自然堤防がほぼ長方形

に残存した田所集落である。八剣神社の西側には、ほぼ南北に帯状に水田が並んでいる部分があり、明らかに人為的に造られた地形のように思われる。この帯状のラインの上に、本年度検出した溝を重ねてみると、ほぼ位置が重なることがわかった。次に、東へ溝が屈曲していると思われる部分を重ねてみると、南側では水田が広がっており溝が伸びていく可能性が高いと思われた。しかし、北側では島畑がたくさん見られ、ここからは大溝の位置を推定することはできなかった。

次に、航空写真を見ると、集落の周辺に低地が帯状にいくつか走っているのが読み取れた。特に集落の西側を南北に走るものと、集落の北西角を北東から南西に向かって走るものが明確にとらえられた。さらに、集落の北側を東西に低地が筋状に走っている様子が読み取れることから、この辺りにも大溝が伸びる可能性があると思われた。

以上の点から、第4図のように大溝の位置を推定した。なお、この溝のことを田所大溝と呼ぶことにした。

さて、大正6年に刊行された『葉栗村志稿』に13世紀頃の田所集落とそれをめぐる堀に関する記述があることが知られている。この記述の基となる古文書が現存しないことから、この記述の信憑性についてはやや問題がある。しかし、参考までにそれを記すと、次の通りである。「屋敷の廣さは




第4図　大溝推定ラインと平成5・6年度調査区位置図（1：5000）

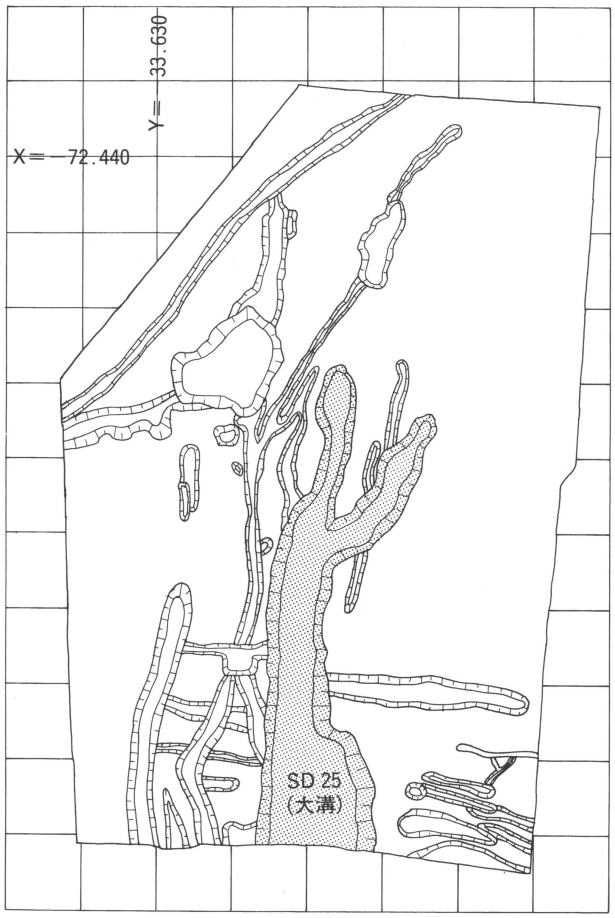
外構東西四町南北五町あり内構は一町平方あり其の周圍に大堀及大土堤を築けり現今田所といふは此の屋敷のことなり。」この記述からは、田所集落の外構の周囲に大堀と大土堤を築いたとも読み取れる。すると、その大堀及び大土堤の大きさは、東西約400m、南北約500mを超える大きさと考えられ、大溝の推定ラインの大きさと似ているのは興味深い。

### 4．平成5年度の調査の結果

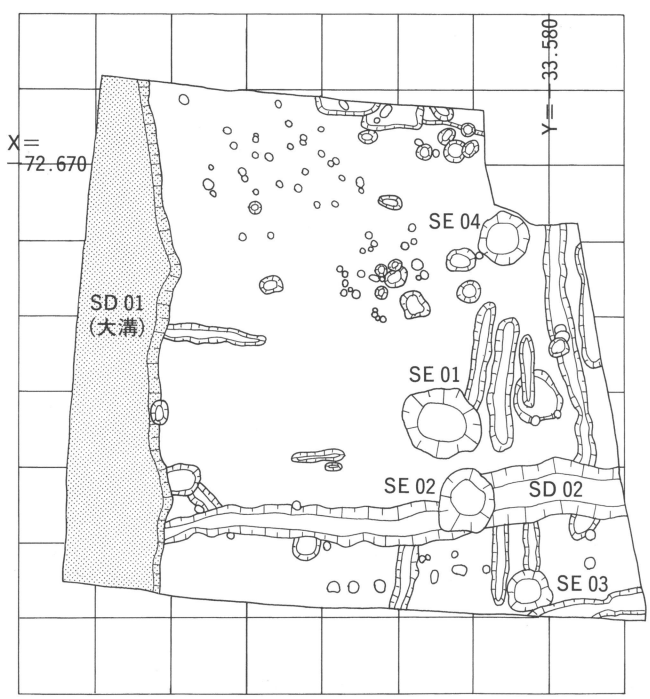
本年度は、93E・F・G・H・I・J・Kの7区の調査を行った。

その結果、93I区おいて、幅最大8m、残存部の深さ最大約1.5mの大溝が、92C・D区に連続する形で検出された。一方、93J区においても、南の92D区と連続して南北に直線状に伸びた状態で検出されたが、発掘区のほぼ中ほどで消滅してしまっていた（第5図）。大溝の推定位置と比較すると、南北の長さが100m以上短く、また東へ屈曲している様子も見られなかった。

93G区では、田所大溝と同時期の土坑、井戸、小溝などが集中して検出された（第6図）。井戸は1基重複して5基検出され、そのうち4基に曲物及び木組などの構造物が遺存した。小土坑は百数十基検出されたが、掘立柱建物などは確認されなかった。注目されるのは、十数条検出された小溝である。いずれも東西方向、あるいは南北方向をとっており、田所大溝や田所集落の軸と同一の方向性を示しており、大溝の内側を区画する溝の可能性も考えられる。また、SD02からは13～14世紀の比較的多量な灰釉系陶器が出土した。93G区と同様に田所大溝に近接した位置にある北隣の93H区では、14世紀以降と思われる水田が調査区の中央から北部に広がっていた。しかし、集落に関係する遺構は南端部以外は検出されていない。93G区の位置は、溝が集落を方形にめぐっていると




第5図　93J区遺構図（1：500）




第6図　93G区遺構図（1：500）

すると、その区画の中では南西のコーナーにあたり、集落域において特殊な部分にあたるためと考えられる。

## 5．平成6年度の調査の結果

本年度は、92D・93I区の間の道路部分（94Aa区）と、田所大溝が消滅している93J区から北へ向かう地点の94Ab・B区の調査を実施した。

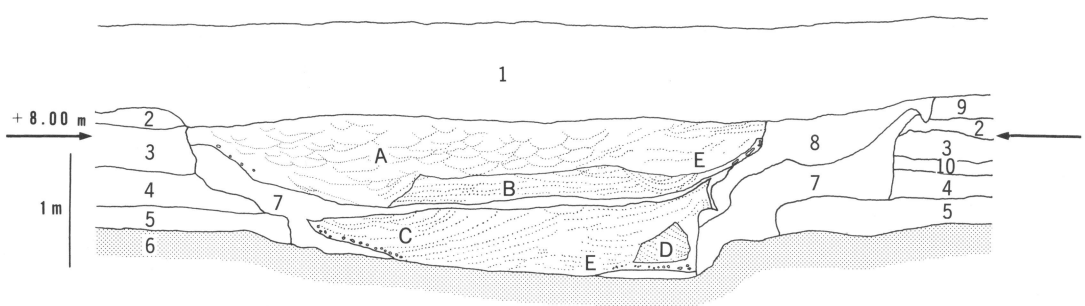
その結果、94Aa区では田所大溝が連続して検出されたが、94Ab区以北は大溝と思われる遺構は検出されなかった。また、一昨年、南北に伸びた大溝が東に屈曲していると予想された92E区の東側からは、遺構検出面のシルト層をつき破り、方形に噴出した砂の層が認められた。その結果、東に伸びる溝は存在しないことが明らかになった。

本年度の調査結果より、田所大溝は田所集落を連続して囲む溝ではないことが明らかになった。このことは、大溝には防御の機能があまり必要とされていなかったことを示していると思われた。それでは、この大溝は何の目的で造られたものであろうか。第7図を見ると、大溝の堆積物は、中粒～粗粒砂層（A）、細粒砂層（B）、細粒砂層（C）、黄褐色シルト層（7）、暗黄色シルト層（8）である。シルト層を切る形で砂層が堆積しさらにその上にシルト層が堆積していることから、止水性の時期と流水性の時期とがあったことがうかがわれる。砂層中には葉理が発達しており、そこからは北から南への流れがあったことが明らかになった。また、92H区から検出された幅約15mの東西の溝も、その葉理から東から西へ向かっての流水性を示す時期があったことが明らかになった。このことは、東西・南北の溝が92H区の西側で合流後、さらに西ないし南西方向へ水を導き、野府川（旧黒田川）へと排水された可能性も高いと考えられる。だとすると、大溝は潅漑用水としての機能を持っていたことが予想される。ただ、用水ならば、水の供給源があるはずである。しかし、今回の調査ではそれははっきりしなかった。

一方、集落の境界としての役割も考えられる。というのも、田所周辺の後背湿地は地下水位が高



93I区SD03（田所大溝）




1．褐色シルト質粘土
2．暗黄褐色粘土
3．暗オリーブ色シルト
4．灰色極細粒砂
5．灰色シルト
6．黄灰色極細粒砂
7．黄褐色シルト
8．暗黄色シルト
9．灰黄褐色粘土
10．暗黄褐色粘土質シルト

A．中粒～粗粒砂（トラフ状斜交層理）
B．細粒砂（平行葉理，トラフ状斜交層理）
C．細粒砂（トラフ状斜交層理）
D．シルトと細粒砂の互層からなるブロック
E．液状化跡

第7図　93I区SD03（田所大溝）断面図

く、空堀として掘っても底部から湧水があり、止水性の溝の状況を呈すと考えられるからである。しかし、これについても現状では推測の域を出ない。

### 6．田所集落の成立時期

現在の田所集落が、田所大溝と同じ時期に成立した中世村落であったのだろうか。その点について、文献及び聞き取り調査を行った。

(1) 文献より

昭和61年に刊行された『葉栗史誌、神社仏閣編』には、田所集落の璃光寺と八剣神社の沿革が記載されていた。

璃光寺の前身は本寺がなかったので、慶長４年（1599）笹野の妙光寺の末寺とし、寺号を薬師堂と称した。その後、寛文年中（1661～1672）に璃光寺と寺号を改めたとのことである。

八剣神社は、延喜年中(901～923)に創建されたと伝えられるという記述が見られるが、定かではない。天正12年（1584）に奉勤請願主なりと記載がある。

『織田信雄分限帳（戦国時代)』に「光明寺の内田所の郷内」と見え、信雄の家臣村井専次子・石田孫左衛門子・塙伝三郎子の知行地が合わせて130貫文あったと記載されている。

(2) 過去帳の調査

田所集落の菩提寺である、笹野の妙光寺の過去帳によると、寛永６年（1629)が第１巻であり、それ以前については不明であった。田所集落関係では、寛永９年に「忠右衛門没」の記載があったが、寛永６年以前に「忠右衛門の母、大室妙用禪定尼没」の記載もあり、年代不明ではあるがこれが最も古い記録である。

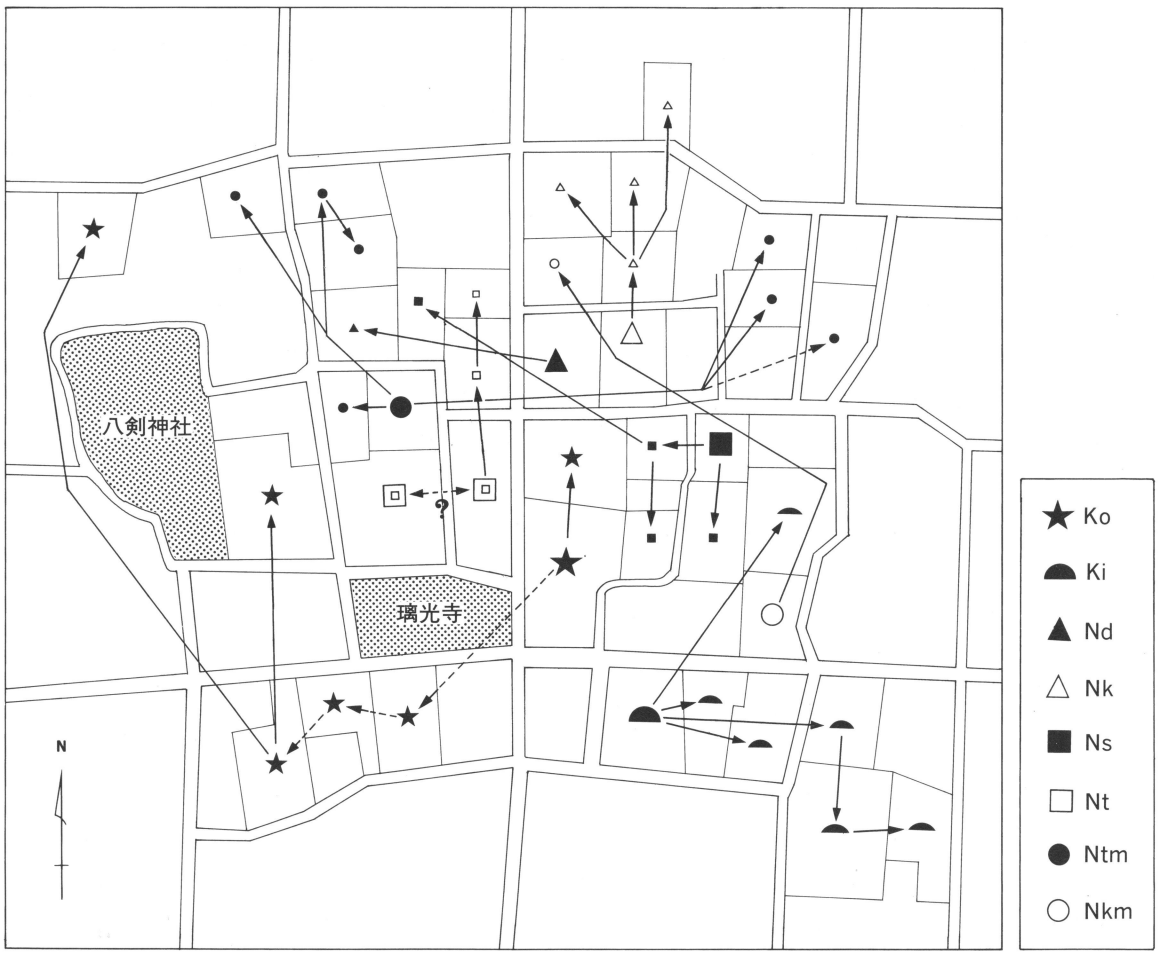
(3) 田所集落の調査

田所集落は璃光寺の周囲に60戸ほどの家がほぼ長方形に集まっており、集落の西には村社の八剣神社が鎮座する。天保12年の村絵図（1841）と比べても、基本的な集落の形態にははほとんど変化がない。古くから住んでいる人はすべて臨済宗を信仰しているが、菩提寺は璃光寺ではなく、笹野にある妙光寺である。八剣神社の秋祭りの際にはすべての家から準備のために人が集まるなど、集落の結束は強い。田所集落に古くから住んでいる住民の姓は、小島、橘川、野々垣の３種類しかない。その３つの姓について、本家分家の関係を聞き取り調査により調べたところ、第８図のような関係が明らかになった。

これによると、小島（Ｋｏ）橘川（Ｋｉ）野々垣（６系統）の流れがとらえられ、時代の違いはあるものの、合計８軒の本家が確認された。本家は分家を出すときは、屋敷の一部を分け与えるのが一般的とのことであり、田所集落は中心部から次第に四方八方へと集落を拡大していったことがわかる。この、本家に当たる家に、古文書、位牌等の、古い年代を表すものについて聞き取りを行った。その結果、Ｎｔｍには文化８年（1811)、Ｎｋ・Ｎｄには元禄時代（1688～1703）の位牌があった。Ｋｉは、独自に位牌や過去帳を調べ、今日まで18代続いており、初代は寛永９年（1632）頃に没しているとのことであった。Ｋｏには、古文書が残されていた。それによると、先祖は慶長年中（1596～1614）に清洲城主福嶋正則に仕え、やがて国替えになって安芸国廣島へ随行した。しかし、元和元年（1615）浪人となり、これ以後田所に帰ってくる。帰国後は武士の面目上苗字帯刀の願書を４回にわたり出していることがわかった。

### 7．研究の成果と課題

田所遺跡の発掘調査及び田所集落の調査により集落の西側及び南側に、大溝が造られたことが明らかになった。そして、その内側に井戸等の集落に関わる遺構や、一定の方向性を持った溝が存在




第 8 図　田所集落における本家・分家の関係（ 1 ：2500）

することも確認された。一方、田所集落の成立時期については、文献及び聞き取り調査によって戦国時代までは遡れることが明らかになったが、大溝の造られた時期とは300年余りもの開きがあった。現在の田所集落が、鎌倉時代から継続して営まれてきた集落なのか、それともその間に断絶があるのかは現時点では不明である。しかし、田所集落の北側と東側にも溝が造られている可能性があることが物理探査の結果からも指摘されている。

今後、発掘調査の機会があれば、大溝がどのようにめぐっており、田所集落とどう関わっているのかが明らかになるものと期待される。

**引用文献**

太田芳巳、服部信博、赤塚次郎、鬼頭　剛　1993　「田所遺跡」『(財) 愛知県埋蔵文化財センター年報平成 4 年度』22－31頁

太田芳巳、酒井俊彦、鬼頭　剛　1994　「田所遺跡」『(財) 愛知県埋蔵文化財センター年報平成 5 年度』14－15・24－29頁

葉栗史誌編さん委員会　1986　『葉栗史誌（神社仏閣編）』208-218・320-333・356-380頁

一宮市　1980　「織田信雄分限帳」『新編一宮市史、資料編補遺 2 』239頁

一宮市　1977　「田と畑の新開」『新編一宮市史、本文編上巻』781-799頁

1917　『葉栗村志稿』 9 －10頁

# 大毛池田遺跡出土の土師器皿について

## —— 94Ｊ区出土遺物の検討 ——

北條真木

### はじめに

愛知県一宮市に所在する大毛池田遺跡は、昨年すでに報告されているとおり、古墳時代前期～戦国期に至る複合遺跡である。なかでも下層遺構面で確認された古墳時代の水田遺構は、濃尾平野沖積地における貴重な検出例として注目されている。

これまで大毛池田遺跡の中世以降の時期については資料に乏しく、大半が不明のままであったが、平成６年度さらに東側の区域を調査したところ、比較的大きな規模をもつ屋敷地跡と思われる一角が確認された。主な遺構としては、屋敷地を区画すると思われる複数の溝が検出され、うち１条は方形にめぐるとすれば、一辺100ｍ前後の区画を形成するものと推定される。他の地域の事例からしても国人領主クラスの有力者の居館であった可能性は高く、資料的にも重要な発見となった。

遺物は、土器・陶磁器類を中心にこの方形区画溝（以下居館大溝）とその周辺の遺構からまとまって出土しており、器種や出土量などの分布の状況にも特徴がみられる。これらを詳細に検証することによって、屋敷地の具体的な内部構成やその変遷を追うことも可能かと考える。調査は継続中であり、ようやく一部整理を始めた段階ではあるが、本稿ではとりあえず特徴的な分布がみられた所謂「かわらけ」、土師器皿をとりあげ、屋敷地との関連を報告したい。

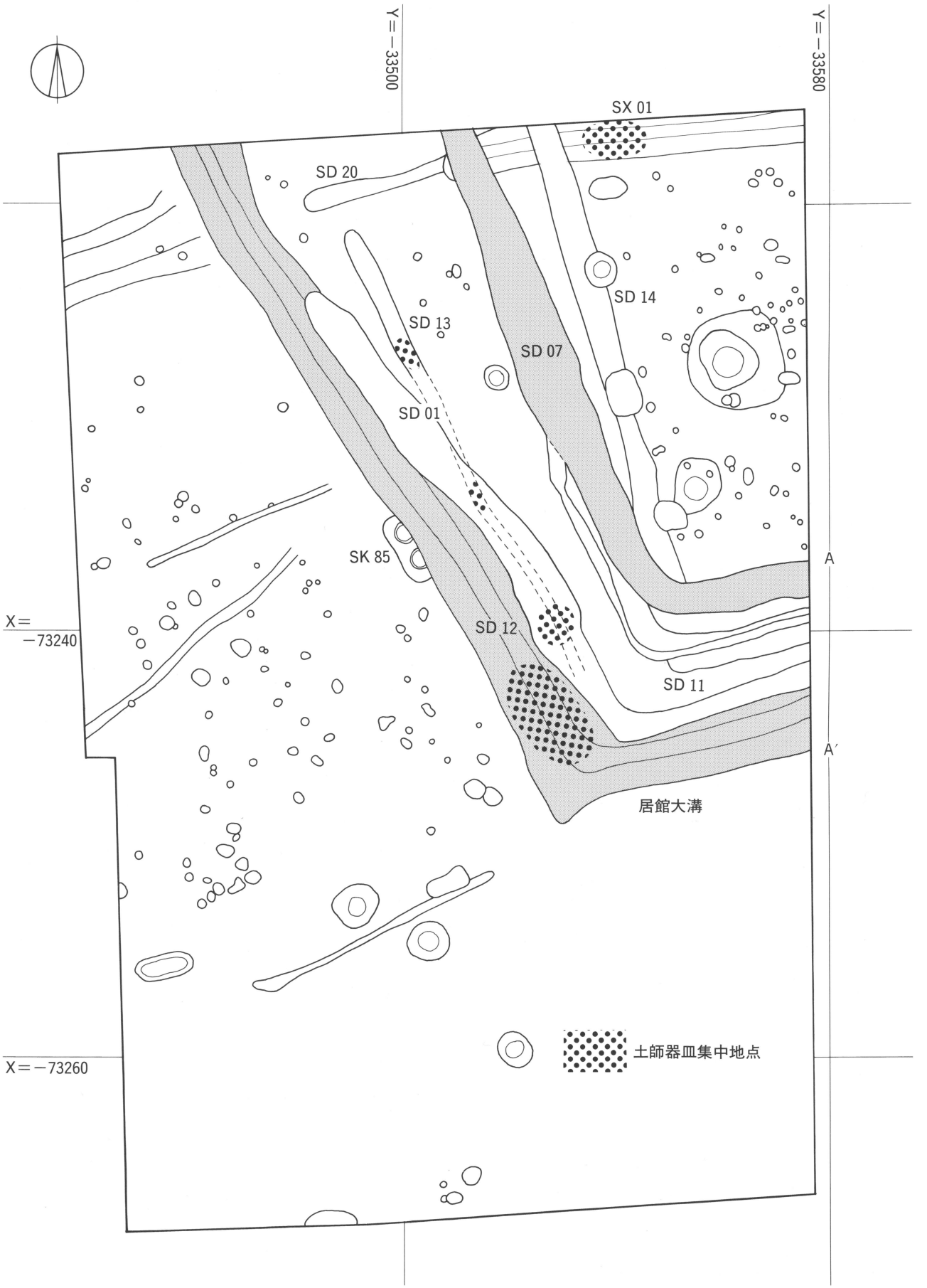
### 1

資料は、94Ｊ区の北東部分に展開する区画溝を中心に抽出した。ここは想定される屋敷地区画の南西のコーナー付近にあたり、現状では最も出土遺物の多い一角である。居館大溝の内側に相当する部分では、井戸・土坑のほか、近接した位置でＬ字に折れ曲がる溝が重複して確認されており、区画溝は繰り返し修復されながら一定期間機能し続けていたことを示している。これらの溝について前後関係が分かるものは、（ＳＸ01→）ＳＤ14→ＳＤ07／ＳＤ13→ＳＤ01／ＳＤ12→ＳＤ01［第２図］である。ただし、ＳＸ01は溝のほか複数の土坑の出土遺物も含むため検討には十分注意したい。

なお土師器皿の基本的な分類（［ ］内）については、佐藤論文及び北村報告に従った。

### ＳＸ01

調査区北端にかかり、遺構の正確な形状は不明であるが、深さは1.6ｍを測り遺物の全体量は比較的多い。含まれる灰釉系陶器は尾張型が半数以上を占め、古瀬戸陶器類はほとんど含まない。皿は灰釉系陶器の完形品と土師器がセットで出土する。特に土師器皿については、復元不可能な細片がコンテナ１箱分に及び、他の遺構ではみられない特異な様相を示している。土師器皿は非ロクロ成形の３タイプがみられる。７は口径13cm、器高3.0cmで褐色を呈する。口縁端部は丸味をもち、周囲に強い横ナデが施される。体部から底部にかけては無調整で指の圧痕による凹凸が著しい［$B_1$類］。８，９は底部が丸味を帯び、口縁が内弯する。口径12.5～13cm、器高3.0～3.5cmとやや深い［$B_5$類］。調整は上記のものと同じで８は灰褐色、９はピンク系白色を呈する。１～６は口径8.5～8.0cm、器高1.2～1.8cmの小型のもので、内面見込み部分ヨコナデのあと外周に沿ったナデを施す。外面のナデも明瞭で、ハケ状の工具を用いたものや口縁端部にわずかに面をもつものがみられる。胎土は密で灰褐色を呈する［$B_3$類］。




第Ⅰ図　94 J 区主要遺構配置図（1：250）

### ＳＤ11

居館大溝の区画内側にあり、大溝南辺に並行して延びる幅0.7m深さ0.5mの溝で、数点の土師器皿のほか灰釉系陶器椀（山茶椀17～19）は尾張型・東濃型の両者を含む。土師器皿16は非ロクロ成形の小型の皿であり、内面と外面口縁部付近にナデが施され、外面底部にかけて指による凹凸がみられる。口径8.8cm、器高1.4cmで、胎土はやや粗く、明褐色を呈す［$B_3$類］。

### ＳＤ13

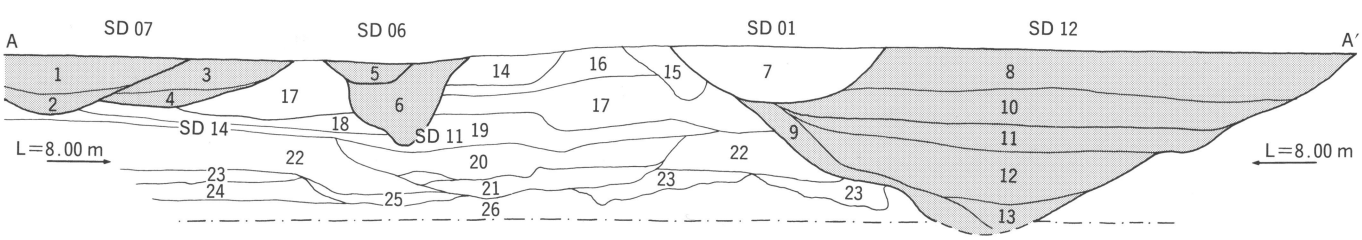
居館大溝の西辺に沿って延びる幅0.5m、深さ20cmの溝で、一部はＳＤ01に切られている。灰釉系陶器類では東濃型の均質な胎土をもつ椀・皿が多くみられる。その他に少量であるが伊勢型鍋や土錘などを含む。土師器皿は２タイプがあり、比較的まとまって出土した。20～25は口径9.2～8.4cm、器高1.6～1.9cm［$B_3$類］。ＳＸ01の小型の皿と比較すると体部と底部の境が不明瞭で、外面のナデも強くない。26，27は丸底の皿で、口径12cm前後、器高2.6～3.3cmを測る［$B_5$類］。ピンク系の白色を呈するものが多い。

### ＳＤ07・14

遺物実測図は示していないが、大区画の内側に位置しており、居館大溝の西辺と南辺に沿って内側の別の区画を構成している。ＳＤ07の幅は1.3m、深さ40cmで、遺物は灰釉系陶器をはじめ、大甕片、擂鉢、天目椀、内耳鍋などがあり、青磁片、土錘がやや多い。土師器皿はＳＤ12と同様な非ロクロ成形の小皿を少量含む。ＳＤ14は、幅1.3m、深さ30cmで土師器皿はみられない。その他の遺物はＳＤ07とほぼ同じで青磁、土錘の出土が目を引く。

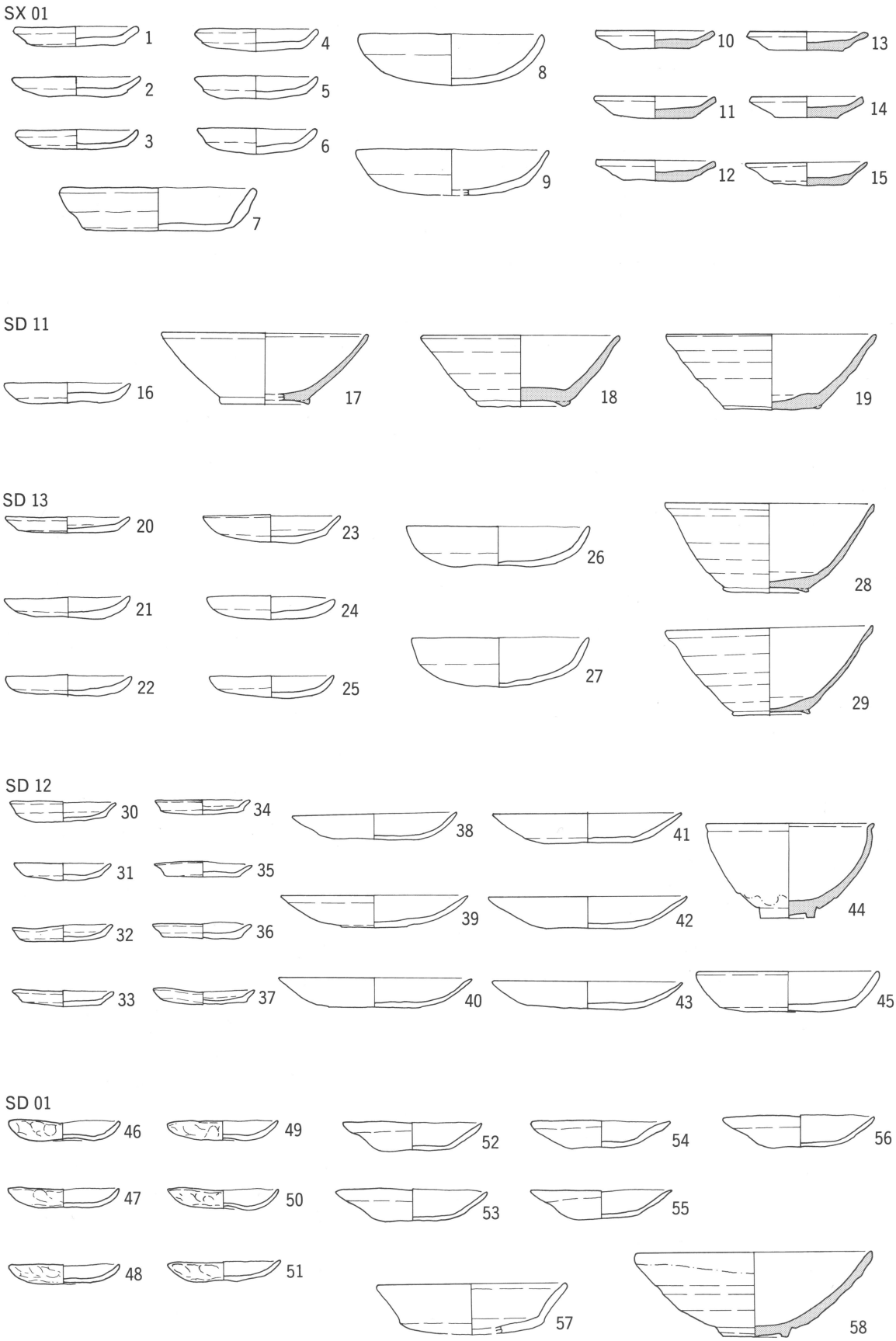
### ＳＤ12

居館大溝は検出面で幅4.5m、最深1.2mであり、Ｊ区南端では断面形態がＶ字状に近いものが調査区北側で浅いＵ字状の溝となる。遺物は溝の中位以下の粘質土層から量を増し、器種も多彩である。灰釉系陶器は東濃型の薄い均質手の椀が圧倒し、その他大甕片、擂鉢、古瀬戸灰釉椀、四耳壺、天目椀、青磁片、土鍋では内耳鍋などのほか、漆器椀・皿類も出土している。石鍋の破片も数点みられる。土師器皿は非ロクロ成形のもの２タイプとロクロ成形のもの１タイプがみられる。30～37は基本的には$B_3$類の小型化したもので、口径6.8～7.5cm、器高は1.2cm前後と偏平な平底の小皿である。出土した土師器皿の中で完形品の数量が最も多く、溝全体に散在する。ただし、コーナー付近に若干の集中がみられる。45は口径12cm、器高2.8cm、外面のナデの幅が大きく体部全体に及ぶ。38～43は、




1．2.5Y 4/3　シルト（細砂を多く含む，炭火物混じり）
2．2.5Y 4/1　粘質シルト
3．10YR 4/4　シルト（炭火物混じり）
4．2.5Y 5/2　粘質シルト
5．2.5Y 5/1　シルト
6．2.5Y 4/2　粘質シルト（細砂ブロック含む）
7．2.5Y 5/2　シルト
8．10YR 4/3　シルト
9．2.5Y 4/2　粘質シルト
10．2.5Y 4/2　粘質土
11．2.5Y 4/2　粘土に2.5Y 6/3 細粒砂層をはさむ
12．2.5Y 4/1　粘土（沈鉄多い）
13．2.5Y 4/2　粘土
14．2.5Y 4/3　シルト
15．2.5Y 4/4　シルト
16．2.5Y 5/4　シルト
17．10YR 5/4　シルト
18．2.5Y 5/3　細砂混シルト
19．10YR 4/4　砂質シルト
20．2.5Y 4/3　砂質シルト（細かなシルトブロックの斑土）
21．2.5Y 4/4　砂質シルト
22．2.5Y 4/3　粘質シルト
23．10YR 3/3　粘土
24．10Y 5/1　粘質シルト
25．No. 23，24 のブロックの斑土
26．2.5Y 5/3　シルト質砂（ベース）

第２図　94Ｊ区東壁土層断面図（1：50）




第3図　94J区出土遺物（1：4）
（アミは灰釉系陶器・施釉陶器）

この調査区では唯一のロクロ成形の大型の皿で、口径13cm、器高20cm前後、底部には糸切りの痕跡が明瞭で$F_1$類とされるものである。

**ＳＤ01**

居館大溝が廃絶した後、ほぼ同じ位置に掘削された浅い溝で、深さは40cm前後。割石と共にまとまった量の出土遺物があり、これらの大半は区画内側から投棄された状況が窺える。灰釉系陶器(東濃型)を主に青磁、天目椀、古瀬戸灰釉平椀、合子、擂鉢、大甕片などがあり、土師器皿は半径30cm程度の範囲内に集中し、表または裏むきで数個体が水平に近い状態で検出された。非ロクロ成形のもの３タイプがあり、46～51は口径7.6cm前後、器高1.0cm前後の小型の皿であり、内側の表面は滑らかであるが外面は無調整、指による圧痕が夥しい。底部は中央部分が若干内側にへこむ。平面形態は正円に近く、ほぼ同一規格であり、内型を用いた制作技法が推定できる。胎土には砂粒を殆ど含まず、白色を呈する。52～56は口径10cm、器高2.0cm前後の中型の皿で、内面は外周に沿ったナデ、外面は口縁部付近のみナデが施され、底部にかけては無調整である。指頭痕、爪形痕がみられ、胎土、色調は小型の皿に同じである。57は１点のみ、口径13cm、器高3.5cm前後であり、軟質でかなり摩滅している。内面は立ち上がり部分は外周に沿ったナデ、外面体部は強いヨコナデが施され、底部との境に稜をもつ。内外面とも灰褐色を呈する。

**2**

以上に述べてきた各遺構の時期であるが、土師器皿以外の遺物の分析が不十分なため、ここではおおまかな区分を示すにとどめたい。

尾張地域での土師器皿の変遷について、佐藤氏の論考を大まかに要約すると、古代末から続いたロクロ成形の皿（柱状高台をもつもの、或いは高杯などＡ類)は13世紀以降姿を消し、12世紀後半～15世紀には手捏ねや型押しなどの非ロクロ成形の皿（Ｂ類）が主体となる。再び新たなロクロ成形の皿が出現してくるのは15世紀後半以降であり、これは在地の窯業地の影響、すなわち大窯の出現・成立との関連を指摘されている。

94Ｊ区ではＡ類は全く見られず、出土した土師器皿は、尾張において非ロクロ成形の皿が主流となってかわった13世紀代から再びロクロ成形の皿（Ｆ類）が出現した15世紀末までのものが含まれていると考えられる。

まずＢ類のうち大型の$B_1$類は少量で、浅い平底の小型の皿$B_3$類が量としてはまとまっている。ＳＸ01とＳＤ13には同じ大型の丸底の皿$B_5$類が含まれているが、$B_3$類は口径など若干異なり、僅かに時期差が想定できる。ＳＸ01は遺構が掘り込まれている層位からすると、廃絶するまでやや幅があると思われるが、少なくともＢ類$_3$の皿は共伴する灰釉系陶器から13世紀中頃～末に比定できる。またＳＤ13は同じく灰釉系陶器から13世紀中頃～14世紀初めの時期が想定でき、同様の$B_3$類土師器はＳＸ01より若干新しいものと位置づけられるのではないだろうか。ＳＤ12では、$B_3$類の皿は法量が更に縮小し、再出現したロクロ成形の皿$F_1$類が含まれる。陶器類からも15世紀末～16世紀初の窖窯Ⅳ～大窯Ⅰ期の時期に比定できる。遺物の提示がなく検討が不十分であるが、これの内側を区画するＳＤ07は若干古い様相を含むと考えられる。

ところで、ＳＤ01出土の土師器皿は胎土も異なり尾張地域ではほとんどみられないものであった。同様なものは、岐阜市長良西後町に所在する城之内遺跡から出土し(「城之内タイプ」といわれるもの)、これらは16世紀前葉代の京都のかわらけのコピーと考えられている。大毛池田遺跡では居館大溝（ＳＤ12）の北東コーナー部分を壊して掘削されている土坑（ＳＧ01、調査の概要第４図）から天文８年（1539）の紀年銘木簡が出土し、同じく

大溝が埋積した後につくられたＳＤ01に「城之内タイプ」土師器皿がみられることから、ほぼこの時期までに居館大溝が廃絶し、区画溝の規模の縮小をはじめ、居館または周辺の景観が大きく変化していたことが想像される。

## 3

土師器皿の出土状況に関して現時点での問題点を整理しておきたい。

まず、土師器皿は大半が溝から出土し、土坑や井戸内からはごく少量しか検出されない。しかも溝内に集中する箇所をもち、いずれも短期間に一括して廃棄された状況が窺える。集中する部分がさほど目立たなかったＳＤ12についても、区画溝全体から眺めると、北辺区画と比較してやはり大量廃棄とも呼べる特異な様相を呈している。

このような土師器皿を含む土器の大量廃棄の状況は、中世居館あるいは集落遺跡で数多く検出されている状況と同様であり、これらは非日常的な行事に使用されたとする見方が一般的である。大毛池田遺跡の事例からすぐさま具体的な解釈を示すまでには至らないが、少なくとも屋敷地における非日常的空間の配分のありかたについて多くの示唆を与えてくれるものと考える。また、溝ごとに検出されている数次にわたる土器の一括廃棄の状況も、空間自体の変遷とどのような関連をもちながら推移してゆくのか更に詳細に検討する必要があろう。

## まとめにかえて

以上のことより大毛池田遺跡では、遅くとも13世紀中葉には屋敷地を構成する区画が整備されており、16世紀初めには区画大溝が廃絶するという大まかな状況を窺うことができた。土師器皿の特異な出土状況は、その変化を特に際だたせるものであった。

今回、土師器皿の流通については触れることができなったが、大毛池田遺跡では居館大溝の廃絶期を境にした流通圏の変化が顕著である。当時の尾張中心部・美濃の中間に位置するという地理的・歴史的な環境、及び基盤となる集落の規模などを考慮しつつ、この点についても今後の課題として追求してゆきたい。

小文を成すにあたって内堀信雄、遠藤才文、小澤一弘、金子健一、佐藤公保、鈴木正貴、樋上昇の各氏には多くのご助言を頂きました。記して謝意を表します。

**参考文献**

佐藤公保　1986.1987　「中世土師器研究ノート(1)(2)」『年報昭和60年度・昭和61年度』
(財) 愛知県埋蔵文化財センター

北村和宏　1988　『杉山遺跡』
(財) 愛知県埋蔵文化財センター

尾野善裕　1994　「生焼け山茶碗と土師器皿―山茶碗生産地域におけるロクロ成形土師器皿の生産―」考古学フォーラム４

藤澤良祐　1994　「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター

金子拓男・前川　要編　1994 1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集『守護所から戦国城下へ―地方政治都市論の試み―』　名著出版

山川　均　1994「土器をまとめてすてること―「中世土器集積」の具体的解釈に関する試み―」『文化財学論集』
奈良大学文学部考古学研究室

『城之内遺跡―東長良中学校建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査―』　1990　岐阜市教育委員会

『城之内遺跡―長良高等学校体育館建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査報告書―』　1990　岐阜市教育委員会

『城之内遺跡Ⅱ――』1991　岐阜県教育委員会・(財) 岐阜県文化財保護センター

秋季特別展図録『中世びとのくらしと喜怒哀楽』　1994
奈良県橿原考古学研究所附属博物館

# 濃尾平野北西部、大毛池田遺跡の古墳時代前期埋没水田について

鬼頭　剛

## Ⅰ．はじめに

濃尾平野北西部、愛知県一宮市大毛に位置する大毛池田遺跡は、古墳時代前期を示す県下最古の水田跡である。本遺跡は、平成５年度より東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査で遺跡の発掘調査が行われてきた。大毛池田遺跡は、最下層の古墳時代前期の水田跡から始まり、奈良・平安時代の住居跡、鎌倉・室町時代を経て戦国時代の区画溝に至る遺跡である。特に、最下層の水田跡は面積21700㎡におよぶ調査区において普遍的に確認され、古墳時代前期という県下最古の水田跡であると共に、当時の古地理・古環境、稲作文化を考える上で貴重なデータを提供してくれる。

ところで、埋没水田に関する発掘調査は近年急速に進んでおり、全国的に多くの報告書が出されている（例えば、宮城県の富沢遺跡（1988)、群馬県の同道遺跡（1983)、静岡県の箕輪遺跡（1993)、岡山県の百間川原尾島遺跡（1984）など)。また、発掘調査の事例が増えるとともに、水田堆積物についての論文も多くなってきた(例えば､河西(1989)、宮村（1993)、佐藤（1993)、矢田（1993）など)。

本論では、愛知県下最古の水田でもある大毛池田遺跡の水田堆積物について、その層序及び特徴について述べるとともに、プラント・オパール分析から得られる結果や水田形態をもとに、それに掛かる若干の考察を加えたいと思う。

## Ⅱ．調査地付近の地形と地質

大毛池田遺跡は濃尾平野の北西部に位置し、北東を犬山扇状地、北および西を木曽川で囲まれた自然堤防帯にある（図１)。本遺跡は海抜高度およそ９ｍ前後の水田面の下に内在している。遺跡の基本層序は、設定された調査区ごとに、特に中世以降の堆積物について若干の差異は見られるものの、概ね７層に区分される。それらを上位より列記すると、①褐色中粒砂混じりのシルト層、②褐色極細粒砂質シルト層、③黄褐色極細粒砂層、④灰～灰褐色粘土層、⑤黒色～黒褐色粘土層、⑥灰緑色シルト層、⑦白色細礫混じりの粗粒砂層である。また、各堆積物の考古学的な文化層を基準にした区分は以下の様になる。①褐色中粒砂混じりのシルト層は現在の水田耕作土直下に存在する。戦国時代の堆積物であり、それに伴う遺物・遺構も多い。②褐色極細粒砂質シルト層は鎌倉および平安時代の層である。池田遺跡において最も遺物出土量の多い層である。しかし、戦国時代に比べて住居跡など人の生活が推定できる遺構は少ない。③黄褐色極細粒砂層、④灰～灰褐色粘土層、⑤黒色～黒褐色粘土層のセットが古墳時代初頭の水田跡の堆積物である。これについての詳細は以下の章で詳しく述べる。

## Ⅲ．水田跡堆積物の層序と特性

### １．埋没水田堆積物の層序

本論で扱う古墳時代前期の水田跡堆積物は下位より（⑤層）黒色～黒褐色粘土層、(④層）灰色～灰褐色粘土層、(③層）褐色シルト質極細粒砂層からなる（図２・図３・写真１)。ここで各堆積物について述べる。

（⑤層）黒色～黒褐色粘土層は砂成分を含まず、堆積構造の見られない塊状均質な粘土層である。各調査区で普遍的に確認される。層厚は平均およそ10㎝程度でほぼ水平に堆積し、側方への連続性も良い。また、色調は非常に濃い黒味を帯び、そ

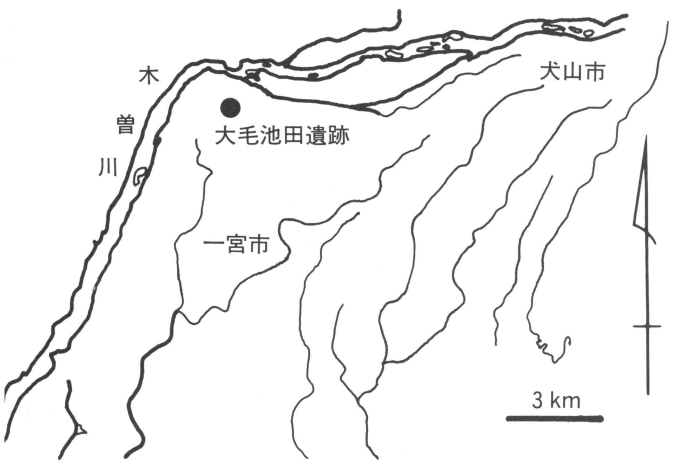



図１　大毛池田遺跡位置図

のことが堆積物を側方へ追跡する場合の鍵層的な役割を示す。下位の（⑥層）緑灰色シルト層とは明瞭な色調の差から区別される。軽微な凹凸面をもって境され、緑灰色シルト層が長径数cmのブロックとなって（⑤層）黒色～黒褐色粘土層中に取り込まれる場合もある。(④層）灰色～灰褐色粘土層は若干のシルト成分を含んだ塊状、均質な粘土層である。初生堆積構造は残っていない。層厚は平均およそ10cm程度でほぼ水平に側方への連続性も良い。下位の（⑤層）黒色～黒褐色粘土層とは明瞭な色調の差から区別でき、高さ数mm～１cmほどの微少な凹凸面をもって堆積する。また、94Ｅ・Ｆ・Ａｂ・Ｉ区では、上位の（③層）褐色シルト質極細粒砂層本層の境界面で、本層を踏み込む形でヒトおよびウシなどの偶蹄類、ウマなどの奇蹄類の足跡が確認される。(③層）褐色シルト質極細粒砂層は上記の（④層）灰色～灰褐色粘土層を覆う砂層である。境界面は漸移的なところや明瞭なところなど一定せず、軽微な凹凸面をもって境される。初生堆積構造としてアンギュラー型のフォーセット葉理が確認できるところもあるが、全体に堆積構造の残りは悪く塊状を呈するのが普通である。側方へはレンズ状堆積を示す。層厚は最大10cmのところや、場所によってはさらに上位(中世の遺物包含層）の褐色砂質シルト層が、本層を欠いて（④層）灰色～灰褐色粘土層と癒着（アマルガメイト）する。

特に94Ａｂ・Ｉ区の調査区南東壁において、本層の最も厚い堆積が見られた（写真２)。この砂層は灰色粘土層を削り込み、層厚およそ５cmのシルト層と層厚およそ40cmの砂層が堆積する。シルト層の内部には厚さ約１mm程度の極細粒砂薄層がレンズ状に挟まれる。砂層は下位より３つのユニットに分けられる。ユニット１は灰色シルトと極細粒砂層との薄互層であり、平行層理が卓越する。ユニット２は細粒砂層である。シルト成分を含まないクリーンな砂で、一部タビュラー型の斜層理が確認される。ユニット３は極細粒砂層と植物片を含んだシルト層との互層である。明確な堆積構造は見られない。本層内にはシルトから極細粒砂に至る逆級化構造が見られるところもある。洪水にともない逆級化構造が形成される報告があり（例えば、伊勢屋（1982)，Iseya（1989）など)、本層も洪水で形成されたと考えられる。

**２．埋没水田堆積物の色調**

一般に水田耕作土は粘土や粘土質な堆積物からなっている。粘土粒子は表面に無機イオンや有機化合物をとらえる吸着、収着といった特徴をもつ。そのため粘土粒子は砂などに比べて様々な色を有することになる。従来、水田跡の検出時、特に垂直断面の観察では耕作土直下の赤色～赤褐色を帯びる酸化鉄および酸化マンガンの斑紋集積層と、緑色～緑灰色を帯びるグライ層の認定が重要視され、それを確認することが水田跡検出の指標にもなっていた。しかし、今回の調査では明瞭な鉄およびマンガン斑紋集積層のセットは確認されなかった。鉄やマンガンイオンは地下水位の上昇・下降の変化によって容易にその集積位置を変えてしまう。当調査地が木曽川を主流とした自然堤防帯にあたり、河川流路の変動も激しかったと予想される場所では、それに伴って地下水位も変化する。

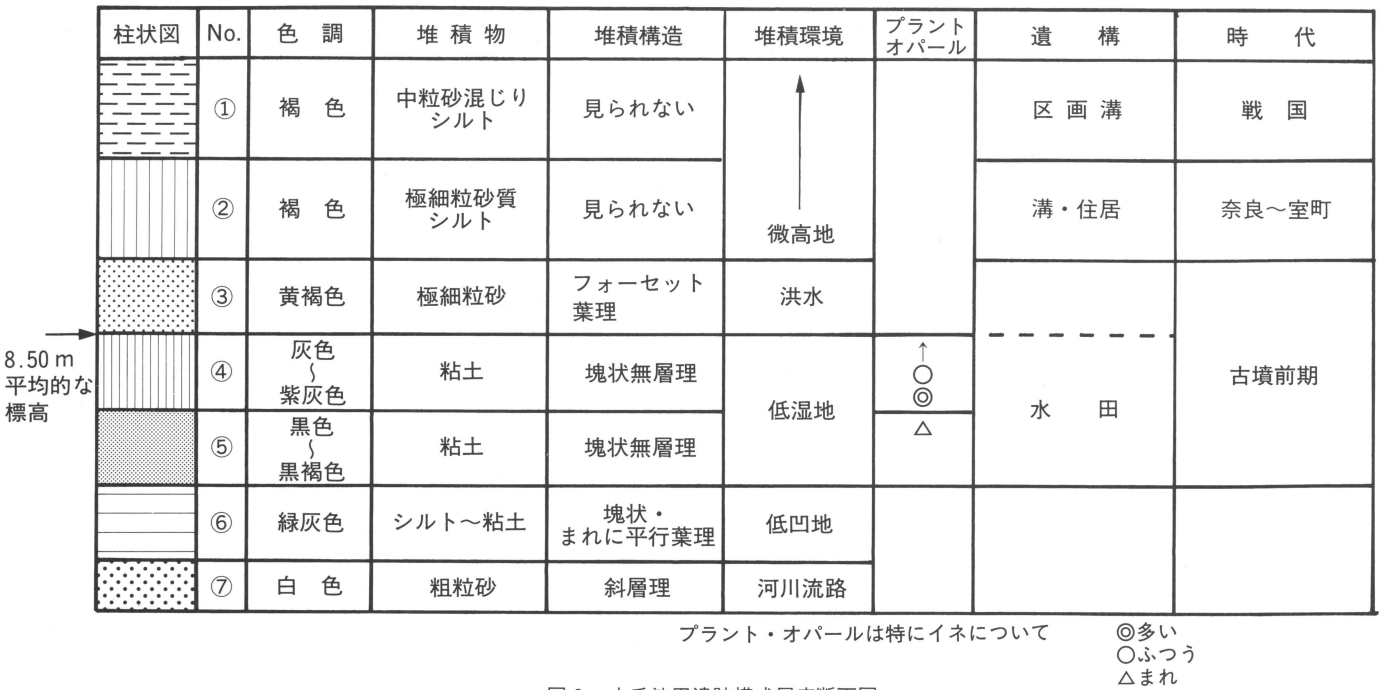



図 2　大毛池田遺跡模式層序断面図

そのため酸化鉄・酸化マンガン斑の形成位置も上下し、水田堆積物に見られなかったのだろう。

**Ⅳ．堆積物中より得られるプラント・オパール**

大毛池田遺跡の水田跡の発掘調査に際し、水田耕作面認定のために定性的なプラント・オパール分析を実施してきた。尚、水田面認定時にはその対象がイネに限られるため、ササ・タケなど直接発掘調査に関係のないものは除外した。また、分析結果はイネなどのプラント・オパールが出現するか否かであり、必ずしも単位面積あたりの量比では無いことに注意していただきたい。全体を通して言えることは、(④層) 灰色～灰褐色粘土層のほぼ下部から上部にかけてイネのプラント・オパールが確認されることである。また、④層の単層内においても出現率は変化し、(⑤層) 黒色～黒褐色粘土層黒色粘土層の直上で最も多い。⑤層からも全く検出されないわけではない。例えば、池田遺跡G区ではススキやアシに混じってイネのプラント・オパールが検出されている。しかし、その量は④層と比較して相対的に少い。(③層) 黄褐色極細粒砂層や (⑥層) 灰緑色シルト層からはイネのプラント・オパールは検出されなかった。

以上の結果と、調査の検出作業で現れた畦畔の平面形態から、大毛池田遺跡の水田跡堆積物は(④層) 灰色～灰褐色粘土層が水田耕作土層と思われる。(⑤層) 黒色～黒褐色粘土層黒色粘土層は、単層上部でイネのプラント・オパールが検出されているので、過去においては水田耕作土であった履歴を持つ。しかし、上位に (④層) 灰色～灰褐色粘土層が堆積し、水田が (③層) 黄褐色極細粒砂層に覆われる終末期までは⑤層は水田の床土としての性格を持っていたものと推定される。

**Ⅴ．層序対比**

(③層) 褐色シルト質極細粒砂層、(④層) 灰色～灰褐色粘土層、(⑤層) 黒色～黒褐色粘土層が水田を構成する堆積物であることを先に述べた。ここでは、水田より下位の堆積物である (⑥層) 灰緑色シルト層、(⑦層) 白色細礫混じりの粗粒砂層のセットが平面的にどのように広がっているかを見てみる。

図 4 は平成 6 年度に発掘調査を行った大毛池田遺跡の調査区ごとの層序断面図である。⑥層と⑦

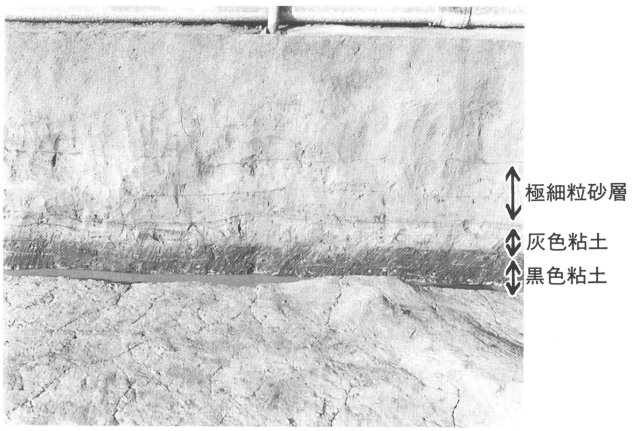



写真１　水田堆積物（94Ａ．Ｉ区）

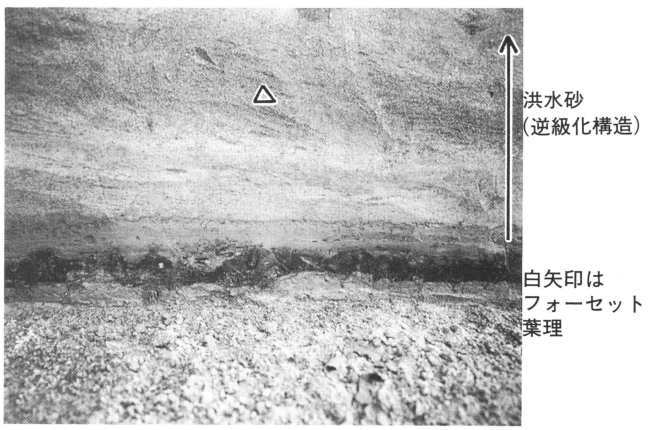



写真２　水田面を覆う洪水砂層（94Ａ）

層のセットが各調査区で確認されることがわかる。これら２層の境界面の標高に注目してみると、Ａ区およびＪ区で基盤砂層の標高が高い(約7.9～8.0m)。また、Ｄ区およびＥ・Ｆ区では標高はほぼ一定である（約7.5～7.6m)。調査区の南西端にあたるＧ区では最も低い値（約7.2m）を示し、最も高いＡ区（地点１）と比べて約80cmの標高差がある。以上のことから、基盤砂層が形成していた旧地形面はＡ区およびＪ区付近で凸部を、Ｅ・Ｆ区およびＤ区付近で凹部を成しており、かつ凹部は比較的水平な面をもっていたことがわかる。また、Ｊ区からＧ区に向かって基盤砂層はその標高を下げていく。これは、調査区の南西方向に堆積の中心地の存在が推定できる事実である。

また、水田を形成している堆積物は、各調査区において水平を保ち連続性も良い（例えば、図３参照)。これは基盤砂層堆積後、その凹凸面を水平に均一化する方向で（⑥層）灰緑色シルト層および（⑤層）黒色～黒褐色粘土層が埋積していったからであろう。

## Ⅵ．水田の平面形態

大毛池田遺跡の水田の形態および面積について言及する。ここでは94Ａｂ区・94Ｅ区・94Ｆ区・94Ｇ区・94Ｉ区の水田検出状況のデータをもとにする。水田面一筆の面積を算出するため、一つの水田面に対し、東西方向にのびる畦畔と南北方向の畦畔のおよその長さの積をもって水田一筆の面積とした。また、一筆の水田が長方形をなすのか、正方形をなすのか。東西のどちらの方向に延びるのか。そのため東成分の強い（東方向に振った）畦畔の長さをａ、西成分の強い（西方に振った）畦畔の長さをｂをとして、ｂをａで割った値を目安とした。ｂ／ａ≒１であるとき、水田は正方形に近い形態を取る。ｂ／ａ＞１ならば、西方向に畦畔のびた水田であり、ｂ／ａ＜１ならば、東方向にのびた水田の形態を取る。計測は、各調査区の水田を西から東に向けて、また西の水田面列のうち北から南に向けて行った。

94Ａｂ・Ｉ区では図５のように、他の調査区に比べて面積は比較的大きく、かつ一定している(平均51.81㎡)。形態については、東成分が西成分に比べ若干多い。また、ｂ／ａの値は１に近似した付近に多くプロットされ、正方形に近い。94Ｅ・Ｆ区でも、形態は長方形のものが多いが、特にｂ／ａが１より小さい値、つまり東方向にのびた水田が多いことがわかる。面積は最大63.66㎡、最小15.18㎡とばらつきが大きい。面積よりも方向に規制された水田と言える。

次に、灰色粘土層の下位層である黒色粘土層が畦畔として確認された94Ｇ区の例を示す。ｂ／ａ

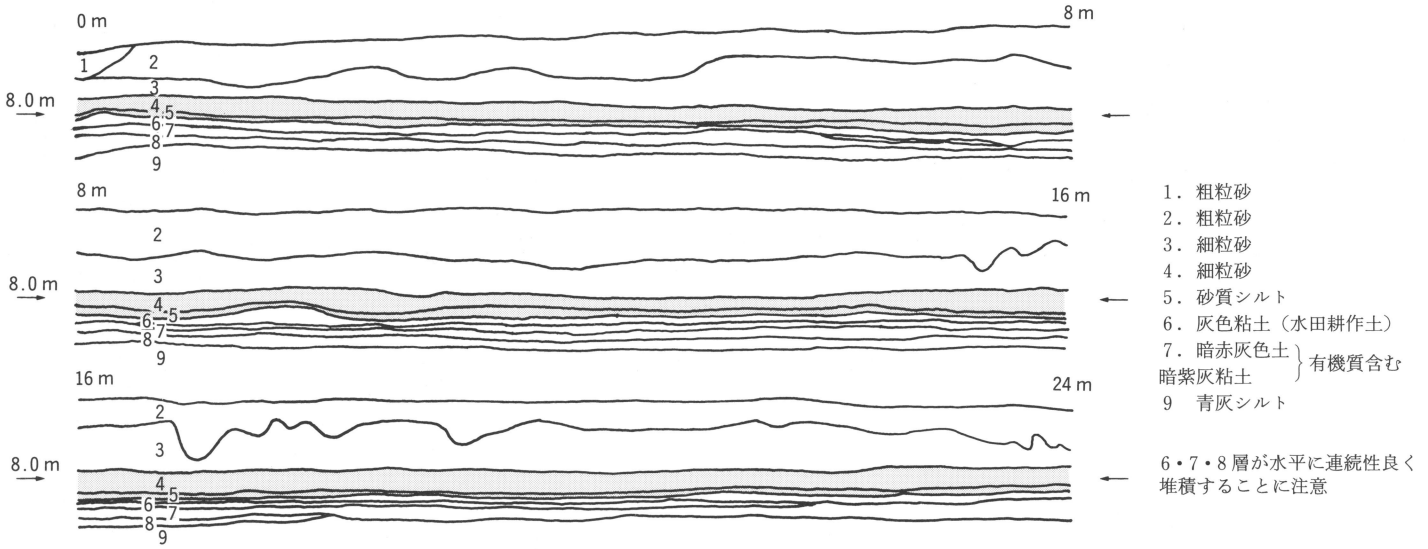



図3　94A区面壁セクション面

の値は1より小さいものがほとんどであり、東方向ののびが卓越している。面積については、それまでが平均値30～50㎡のもので占められていたのに対し、平均10㎡と小さい値を示している。94G区の水田は、東方向ののびの卓越する比較的小さい面積の水田と言える。

**Ⅶ．考察**

大毛池田遺跡の古墳時代初頭の水田堆積物の層序と微化石、特にイネのプラント・オパールの有無、検出された水田の平面形態について述べてきた。ここでは、それらの結果から当地域の水田について考察を加えたいと思う。

大毛池田遺跡の水田跡堆積物は下位より(⑤層)黒色～黒褐色粘土層、(④層)灰色～灰褐色粘土層、(③層)褐色シルト質極細粒砂層からなることを示した。粘土が黒色を呈することは定性的に有機物含有量が多いことを示す目安となる(Potter, et. al., 1980)。このことから大毛池田遺跡の調査地域では、当時低湿地であったことが推定される。また、それは本層よりアシのプラント・オパールが検出できることからも指示される。

また、水田堆積物がほぼ水平で連続性が良いことから、全体的にみてかなり水平で一様な面をもった低湿地が当地に広がっていたと推測される。田崎(1994)は弥生時代の水田の環境規制について論じている。それによると、水田を造成する土地は水を引きやすくまた止めやすい、平野内の微小地形の緩斜面に限られ、それは最小限の労働力の投入で、容易に均平な水田面を造れるからとしている。大毛池田遺跡でも時代は異なるものの、開田するには非常に適した環境であったと思われる。

次に、水田の保存の問題について考えてみたい。水田が水田としての形態をとどめているという事実は、水田が営まれていた後の後世の人による耕作などの開発から免れたからにほかならない。大毛池田遺跡では、調査区全面を覆うシルト質極細粒砂層の下位に灰色粘土が存在し、この粘土が水田畦畔として直線状に配列することで水田跡が検出できた。この平均層厚10cmの砂層が堆積したことにより水田が保存されたのである。全国的に見ても、例えば時代は違うが大阪府の池島福万寺遺跡(1986・87, 1988・89)や青森県の垂柳遺跡(1984)など全国的に水田が検出された遺跡では洪水性の砂層が水田面をパックする。逆にパックすることで良好に保存され、検出されているとも言える。

では、大毛池田遺跡の水田面を覆う洪水性砂層

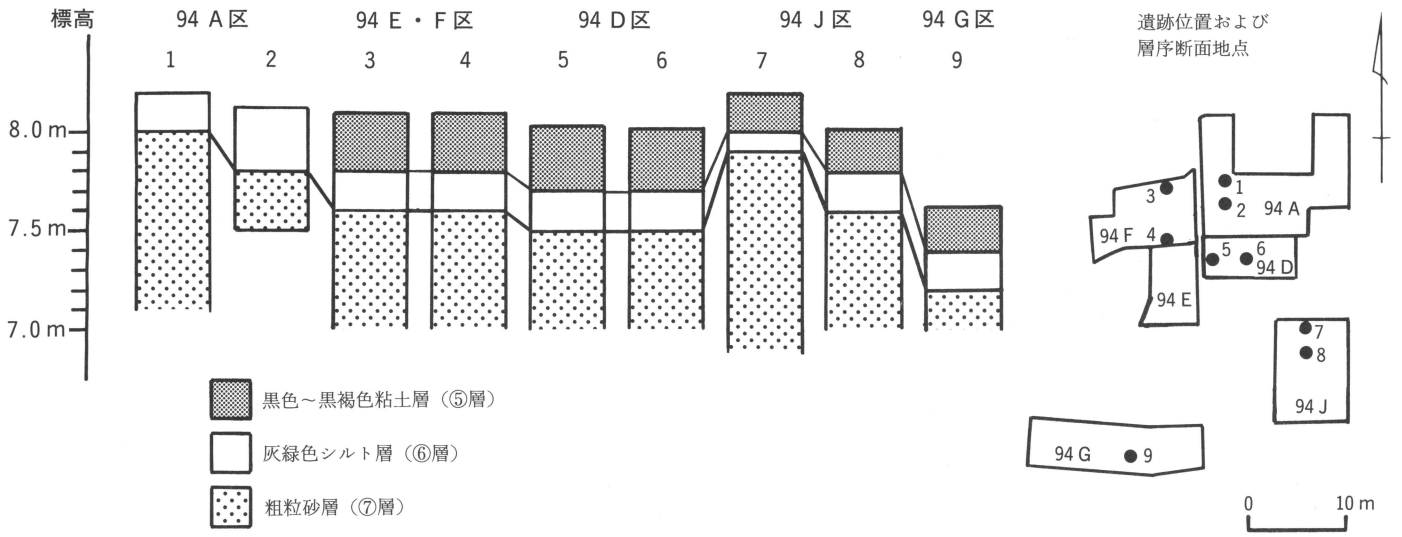



図4　層序断面対比図

は、水田がいかなる状況のもとで堆積したのであろうか。現在の水田耕作面を観察すると、日照りが続いたときや冬季に水を落とした水田面上には、耕作土の粘土層が乾燥、収縮し無数のひび割れが見られる。これは干裂（Mud crack）と呼ばれ、堆積物の乾燥履歴を示すものである。大毛池田遺跡の94Ａｂ・Ｅ・Ｆ・Ｉ区では水田面に足跡が確認されている。これらは灰色粘土層に踏み込まれた形でその内部を黄灰色シルト質極細粒砂が充填している。しかし、干裂痕は確認されなかった。この事実は、少なくとも足跡が踏み込まれた面は、当時地表面で、かつ堆積物が水分を含んだ未固結の状態だったことを示す。また、それら足跡は乾燥を妨げられる要因のもとで砂層に埋積されたと推測される。例えば、水田に水が張られた状態や、水田耕作土はじかに地表に露出するが、耕作土自体は適度に水を含んだ未固結状態を想定できる。

最近、外山（1994）は弥生時代以降、農耕に関する土地条件が不安定になる画期について論じている。それによると土地条件が不安定になる画期は、弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、古代末、中世の15・16世紀のそれぞれ一時期であり、大毛池田遺跡の水田の時代にかかる弥生時代後期～古墳時代前期は、ある時期に微凹地や溝状遺構が洪水堆積物によって埋積される時期としている。大毛池田遺跡の水田面をパックする砂層は、当地でもこの時代の洪水跡が確認されたことを示すものであり、土地条件の不安定な時期に起きた洪水により、一気に埋積された可能性がある。洪水による埋積が進むということは、洪水が起きる頻度が高くなったことである。大毛池田遺跡でも水田面が洪水により砂に埋積されてしまっても、その後の砂の除去やかきあげ跡が確認されないのは、当地にその後頻繁に砂が埋積されたからかも知れない。

プラント・オパールについてⅣ章で検出状況について論じた。灰色粘土層の下部から上部でイネのプラント・オパールが検出され、特に灰色粘土層下部で、下位の黒色粘土層との境界面直上で多くの集積をみた。水田耕作では、田植え前に耕作土の上下をひっくり返す代掻きを行う。もし、古墳時代前期においても、同様なことが行われていたのであれば、灰色粘土層内に取り込まれたイネのプラント・オパールは単層内に分散し、均一化するはずである。しかし、実際には集積が見られる。これには二通りの考え方ができる。ひとつは、

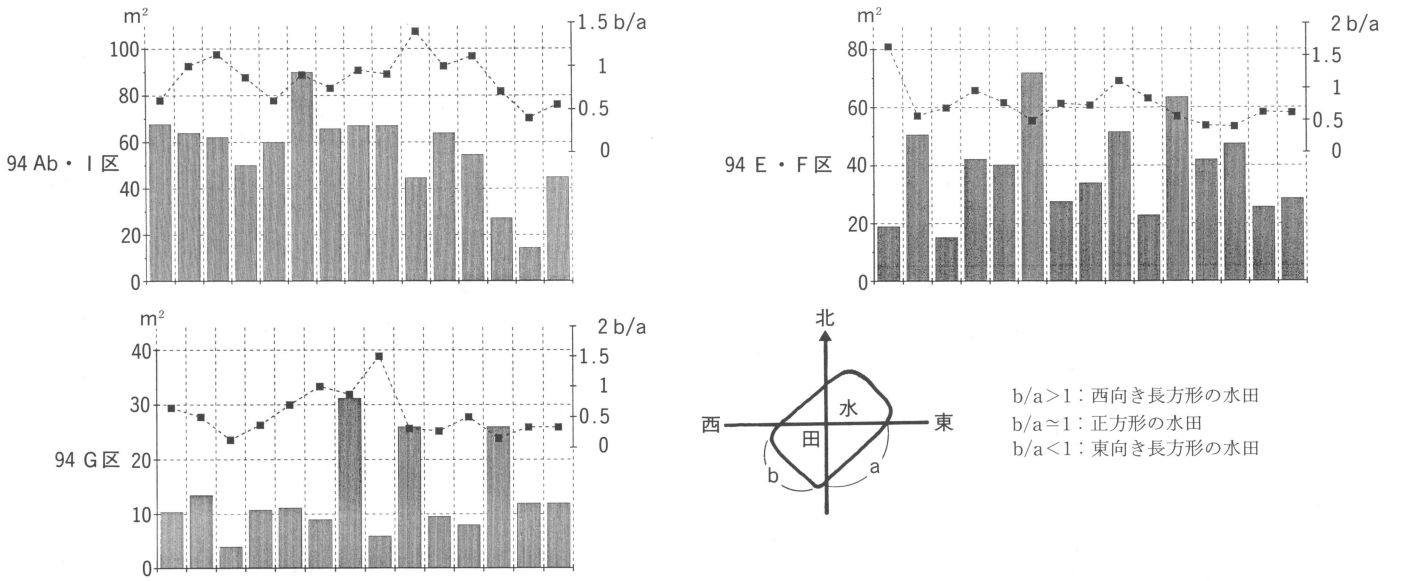



図5　水田の平面形態

肉眼では均質な単層に思われる灰色粘土が、実際は単層内に何面もの耕作時期を内在しており、たまたまその一時期のイネのプラント・オパールの多い部分であった可能性がある。もうひとつは、単層全体が耕作土として使われており、イネの葉などが代掻きの際に肥料として鋤き込まれる。当然床土である黒色粘土層の上面まで鋤き込まれ、その長年におよぶ繰り返しが集積層を形成したとも考えられる。この問題については、プラント・オパールの定量的な分析など今後の検討が必要である。

次に水田の平面形態について考えてみたい。今回対照としたのは、94Ａｂ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｉ区であったが、黒色粘土層が畦畔となっているＧ区の水田面積は平均10㎡であった。それに対し、Ｇ区水田よりも新しい、洪水砂層に覆われる埋没水田上面が検出されたＡｂ・Ｉ区では平均51.81㎡であり、水田の上面と下面では面積が増加する特徴が見られた。また、方向性についてはほとんど東成分（東向きにのびる畦畔）が卓越していた。その要因について、調査地周辺部を含めた微地形や近傍を流れていた河川など地理的要素や当時の人々の土地利用などといった社会的要素が関係すると予想される。しかし、それについて早急な結論がだせるデータを持ち合わせていない。が、もし、このような変化が存在するのであれば、興味ある事実である。

大毛池田遺跡は古墳時代前期の埋没水田であり、愛知県下初の水田発掘である。そのため、県内での時代ごと場所ごとの比較資料がない。逆に言えば、当遺跡が県内水田遺跡の模式地（タイプ・ロカリティー）となる訳である。その意味で、大毛池田遺跡で得られるデータは非常に重要であり、今後の更なるデータ解析で新たな知見が得られるであろう。

## Ⅷ．まとめ

１）大毛池田遺跡の堆積物は、概ね７層に区分された。それらは上位より、①褐色中粒砂混じりのシルト層、②褐色極細粒砂質シルト層、③黄褐色極細粒砂層、④灰～灰褐色粘土層、⑤黒色～黒褐色粘土層、⑥灰緑色シルト層、⑦白色細礫混じりの粗粒砂層となり、古墳時代前期の埋没水田堆積物は④・⑤・⑥層がセットをなす。

２）④・⑤・⑥層は調査区において普遍的に確認され、ほぼ水平に一様な面を形成している。

３）プラント・オパール分析により、④灰～灰褐

色粘土層からイネのプラント・オパールが検出され、特に下位の⑤黒色～黒褐色粘土層との境界面直上で多い。この結果と畦畔の検出状況から耕作土と考えられる。

4）埋没水田は、有機質堆積物が埋積する当時の低湿地の地形環境をそのまま利用したことが示唆される。

5）水田堆積物の断面には一般に言われる酸化鉄・酸化マンガンの集積が顕著ではない。

6）水田面は洪水性の極細粒砂層にパックされる。また、それにより良好に保存され検出される。

7）基盤砂層はA区およびJ区で凸部を、D区・E区・F区でほぼ水平な凹部を形成しており、G区に向かいより低くなっていく。

8）94Ab・E・F・G・I区の水田一筆の形態を比較すると、Ab・I区では畦畔が東方向にのび、面積はほぼ一様である。E・F区は面積よりも東成分の方向性が卓越する。これら以前のG区の水田でも畦畔は東方向にのびるが、面積は10㎡と小さいものが多い。

**謝辞**

当センター葉栗事務所の調査研究員の皆様には現地で討論していただいた。記してお礼申し上げます。

**文献**

青森県教育委員会，1984，垂柳遺跡，青森県埋蔵文化財調査報告書第88集，519p

群馬県埋蔵文化財調査事業団，1983，同道遺跡，県立高崎北高等学校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，130p

伊勢屋ふじこ，1982，茨城県，桜川における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因．地理評，55，597-613．

Iseya，F.，1989，Mechanism of inverse grading of suspended load deposits. InTaira，A. and Masuda，F.，eds.，Sedimentary facies in the active plate margin. Terra Pub.，113-129.

河西克造，1989，古代水田跡調査の実践と問題点，長野県埋蔵文化財センター紀要3，財団法人長野県埋蔵文化財センター，14-25

宮村典雄，1993，耕作土の認識とその厚さ，静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅵ，水田跡調査の方法と研究，第Ⅲ章，第3節(4)，財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所，160-177

大阪府教育委員会，1986･87，池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ，131p

大阪府教育委員会，1988･89，池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ，146p

岡山県文化財保護協会，1984，百間川原尾島遺跡2，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56，704p

Potter，P. E.，Maynard，J.B. and Pryor，W. A.，1980，Sedimentology of Shale，Springer-Verlag，New York，56p

佐藤達雄，1993，水田跡の検出のために，静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅵ，水田跡調査の方法と研究，第Ⅳ章，第3節(4)，財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所，160-177

仙台市教育委員会，1988，富沢遺跡ー第28次発掘調査報告書ー，仙台市文化財調査報告書第114集，237p

静岡県埋蔵文化財調査研究所，1993，箕輪遺跡，　平成4年度静岡県立浜松技能開発専門校埋蔵文化財発掘調査概報，17p

田崎博之，1994，弥生文化と土地環境，第四紀研究，33，303-315

外山秀一，1994，プラント・オパールからみた稲作農耕の開始と土地条件の変化，第四紀研究，33，317-329

矢田　勝，1993，土壌層位と堆積層位ー水のいたずらー，静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅵ，水田跡調査の方法と研究，第Ⅲ章，第5節，財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所，160-177

# 濃尾平野における歴史時代の地震痕　―その３―

服部俊之

## １．はじめに

寒川（1988）により地震考古学が提唱されて以来、濃尾平野の遺跡においても地震痕についての認識が高まってきている。実際、近年の発掘調査により歴史時代の複数の古地震の痕跡が発見され災害史を考えるうえでも重要な成果をあげはじめている。

稲沢市教育委員会（1989）の報告では、1498年に発生した明応東海地震による地震痕が、森・鈴木（1989・1990）では1586年に発生した天正地震、1891年に発生した濃尾地震の報告が行われている。さらに、服部（1993a）は、日本書紀の記述にある684年の白鳳南海地震に対応する東海地震の存在を、服部（1994a･b･c）では、地震史料に現れない複数回の古地震の存在を指摘している。

この報告では、主に（財）愛知県埋蔵文化財センターが行った平成６年度の発掘調査で新たに確認された地震痕をもとに、歴史時代におけるより精度の高い古地震の発生時期の推定を試みる。

## ２．地震痕分布の特徴

濃尾平野での発掘調査で地震痕の確認された遺跡を第１図に示した。近年展開されている東海北陸自動車道建設をはじめとした大規模開発のための緊急発掘調査の対象となる遺跡が、偶然にも沖積平野の地形区分のうち特に液状化による被害を受けやすい氾濫平野域に集中しているために、ほとんど全ての遺跡で地震痕が確認されている。

確認された地震痕は、原因となった地震こそ複数の時期に区分されるが、形態的には噴砂（砂脈）、地層内の液状化跡が大半をしめる。砂脈については、特に東海北陸自動車道建設予定地内において、旧地形と密接な関係が認められ、規模の違いこそあれ北東－南西に延びる大小の旧河道の方向に支配されている。

## ３．地震痕の記載

現在の濃尾平野地下には歴史時代に繰り返された地震の痕跡が無数に残されており、愛知県埋蔵文化財センターが平成５年度から平成６年度にかけて行った発掘調査においても無数の地震痕が検出されている。その一つひとつを記載し報告することは困難なため、ここでは今までに地震発生の記録が確認されていない時代の地震痕、また地震発生の記録があってもその痕跡が確認されていなかったものに限定して報告する。それぞれの地震痕が検出された遺跡周辺の現地形を把握するために国土地理院発行の縮尺25,000分の１の地形図に調査区の位置を示した。また地震痕のスケッチ中の地層区分には、地震発生の時期を推定するための考古遺物から考えられる年代観を与えた。

### ａ．大毛沖遺跡

12世紀以前の地震痕

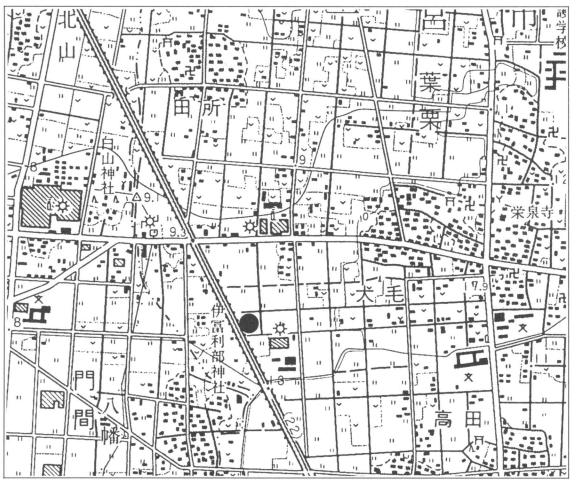
服部（1994ａ）で報告した活断層「岐阜－一宮線」の12世紀以前の活動により形成された「とう曲構造」については、その後の調査により再検討を要する事実が確認されたので、ここで改めてその概観を報告する。

平成５年度の調査では、東西に連続する地層の急傾斜帯が検出され、これを断層運動に伴い形成されたとう曲構造として報告した。その後、急傾

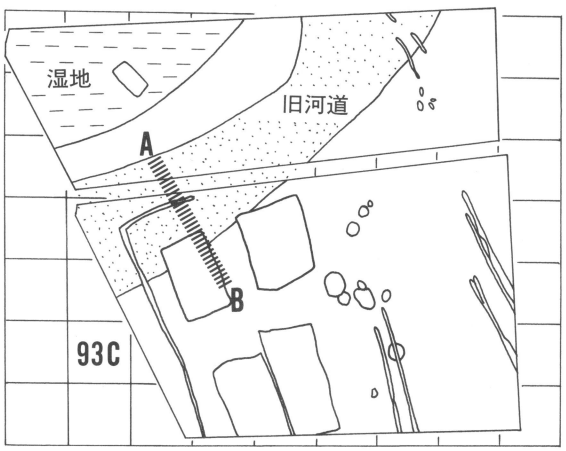



| | 遺跡名 | 所在地 | | 遺跡名 | 所在地 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 北道手遺跡 | 一宮市 | 11 | 一色青梅遺跡 | 稲沢市・中島郡平和町 |
| 2 | 田所遺跡 | 一宮市 | 12 | 正楽寺・儀長寺通遺跡 | 稲沢市 |
| 3 | 大毛池田遺跡 | 一宮市 | 13 | 堀之内花ノ木遺跡 | 稲沢市 |
| 4 | 大毛沖遺跡 | 一宮市 | 14 | 岩倉城遺跡 | 岩倉市 |
| 5 | 門間沼遺跡 | 葉栗郡木曽川町 | 15 | 地蔵越遺跡 | 稲沢市 |
| 6 | 西上免遺跡 | 一宮市 | 16 | 朝日遺跡 | 西春日井郡清洲町ほか |
| 7 | 大平遺跡 | 尾西市 | 17 | 清洲城下町遺跡 | 西春日井郡清洲町 |
| 8 | 山中遺跡 | 一宮市 | 18 | 外町遺跡 | 西春日井郡新川町 |
| 9 | 東畑廃寺跡 | 稲沢市 | 19 | 甚目寺観音境内遺跡 | 海部郡甚目寺町 |
| 10 | 尾張国分寺跡 | 稲沢市 | | | |

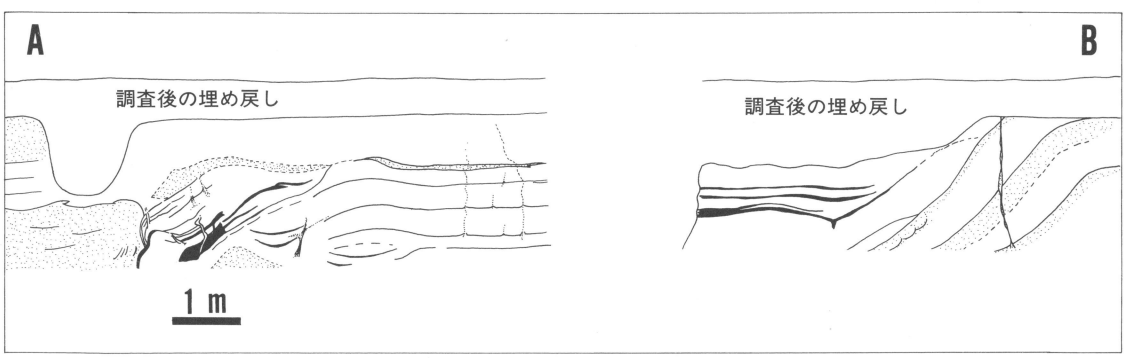
第１図　地震痕が確認された遺跡分布図




第２図　大毛沖遺跡トレンチ設定位置(『岐阜』)



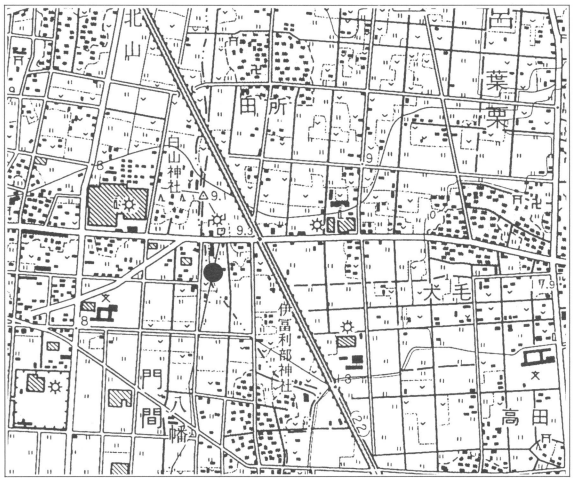

第３図　トレンチ設定図(１目盛５ｍ)



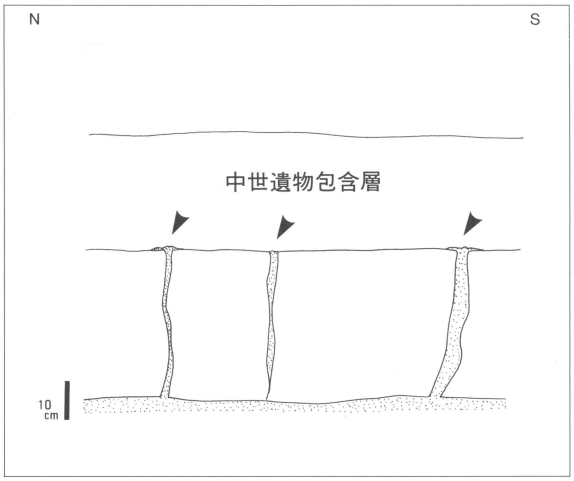

第４図　大毛沖遺跡トレンチ断面概略図

斜帯を構成する地層の南部への連続を調査する目的で、急傾斜の延長方向と直交するトレンチを設定し、地層の断面構造等の観察を実施した。第４図は、その概略図であるが、昨年度の急傾斜地点から南方へ約30ｍの地点で再び中世の遺構面直下（中世の遺跡基盤層）の砂層およびシルト層が最大40°の傾きで北側に傾斜していた。この砂層内には、堆積時の水流により形成されたと考えられる葉理が認められるが、その葉理は地層傾斜部では、傾斜した層理面と平行な状態であった。したがってここでみられた地層の傾斜は、少なくとも砂層およびシルト層堆積後に加わった力による変形であると考えられる。この傾斜した地層の上位の青灰色シルト層は、地層変形に伴い形成されたであろう凹地を埋積するような堆積構造を示しているが、地層を傾斜させた２次的な力は受けていない。この地層の変形が地震による変形であると断定するだけの根拠は現在のところ見いだせていない。また、この付近はかつての木曽川本流あるいはその分流の流路にあたる場所であった可能性が非常に高く、その流路周辺に形成された河畔砂丘状の堆積物を観察している可能性も否定出来ない。この点については今後の検討課題として今回は深く追究しない。

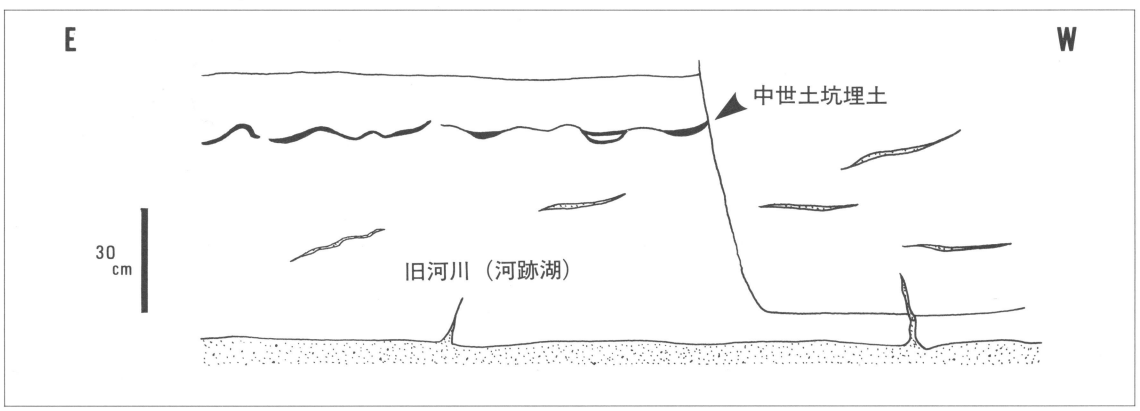
平成５年度に、断層活動により変形した地層として報告した北側の変形した地層は、第４図に示したトレンチでの数点の観察結果から、断層運動を反映したとう曲構造では説明出来なくなったので、ここで見解を改めておく。そもそも断層運動によるとう曲構造は断層上に堆積した地層を一様に変形させるもので、変形した地層はその構造と調和的に変形すると考えられる。しかしこのトレ




第5図　大毛沖遺跡中世地震痕位置図(『岐阜』)




第6図　中世遺物包含層に上端を削られる砂脈




第7図　中世土坑に切られる地震痕

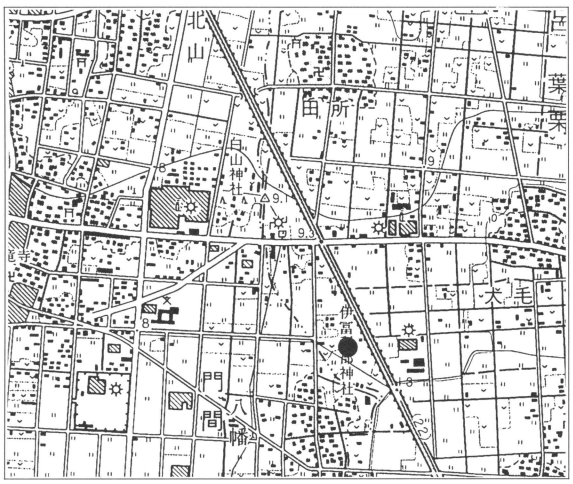
ンチでは地層の急傾斜部の層理が調和的でなく、それぞれの層ごとにたわみが不規則に生じている。また急傾斜部の北側に隣接し露出する砂層中のラミナは、急傾斜部に接する付近で直立していた。さらに、急傾斜部を構成する地層も上位のものが水平方向（北側）に押されているようになっていた。したがって、この地層の変形は断層運動により生じた上下の力による地層の変形で説明するよりも、むしろ南から北への水平方向の力による表層地滑り的な運動で説明したほうがよいのではなかろうか。

1964年6月16日に発生した新潟地震や1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震においても地震の強烈な揺れにより地表が水平にスライド（地盤の側方移動）した記録があり（岡田篤正氏の御教示による)、軟弱な地盤を有する地域では地盤そのものが水平に移動する可能性も高い。そのため筆者は、昨年提示したとう曲説を撤回し改めて地震動による地盤の水平移動という立場をとることにする。

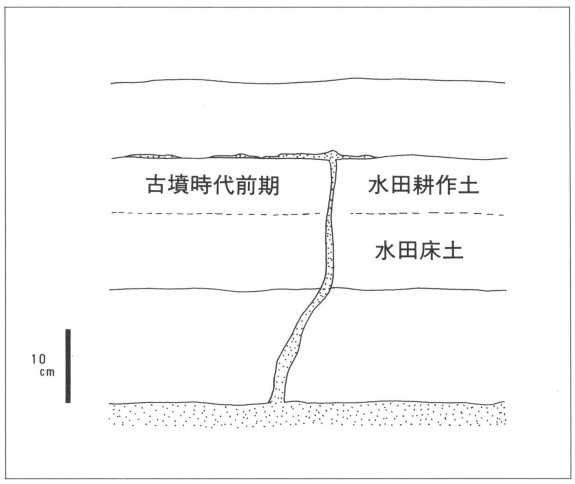
## 中世の地震痕

大毛沖遺跡を北東－南西に延びる旧河道はそのほとんど全てが砂層あるいは礫層で埋積されている。例外的に93D区、94F区などで確認された一連のものは黒色から暗緑灰色のシルト層あるいは粘土層で埋積されている。この河川を埋積するシルト層の堆積年代は、包含される遺物からおよそ12世紀以降と推定される。またこの河川堆積物は14～15世紀に属するとされる埋葬用（？）土坑に掘り込まれている。

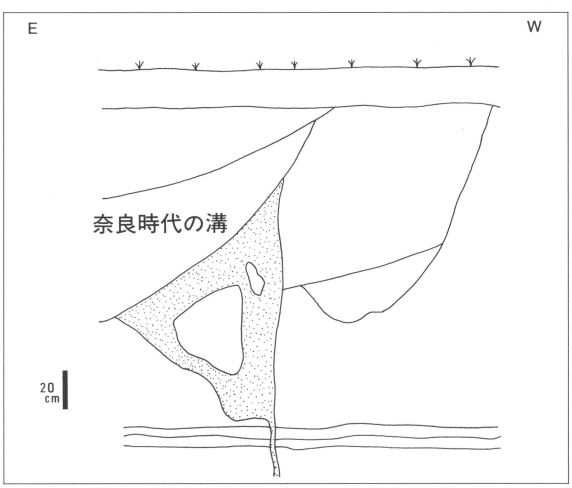
地震痕は、河川堆積物のシルト層中の地層の変




第８図　大毛池田遺跡位置図(『岐阜』)




第９図　古墳時代前期の水田層を切り裂く噴砂



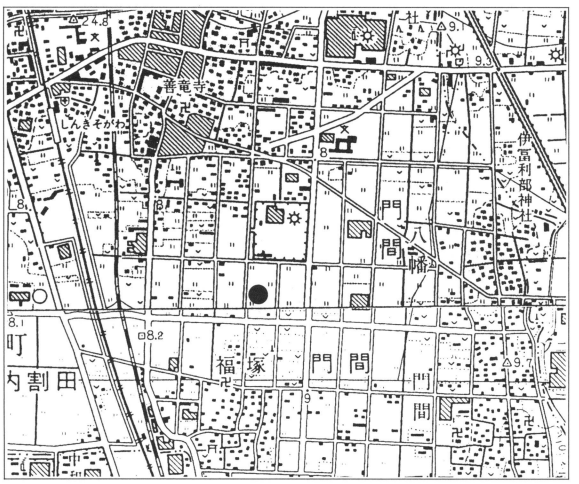

第10図　奈良時代の溝に切られる砂脈

形（流動化）と、ラミナに沿って侵入し水平方向に延びる砂脈として現れている。それぞれの地震痕は河川堆積物同様に土坑によりその構造を切断されている。また土坑埋土中にも水平方向に延びる噴砂や埋土を構成するシルト塊の流動が確認される。そのため、これらの地震痕を形成させた地震の発生時期は少なくとも２時期を考える必要がある。１つはシルトや粘土の堆積物による河川の埋積以後、土坑形成以前の時期、つまり12世紀～15世紀の間であり、もう１つは14あるいは15世紀の土坑埋積直後である。土坑埋土中の地震痕については現在までの全ての地震によるものである可能性が指摘できるが、埋土を構成するシルトの塊が流動するためには土坑埋積からあまり時間経過を経ていない時期と考えた方が説明しやすい。また後述する門間沼遺跡の中世土坑中の地震痕形成時期と非常に近接した時期でもあるので、ここでは14あるいは15世紀の土坑埋積直後の地震によるものとしておく。

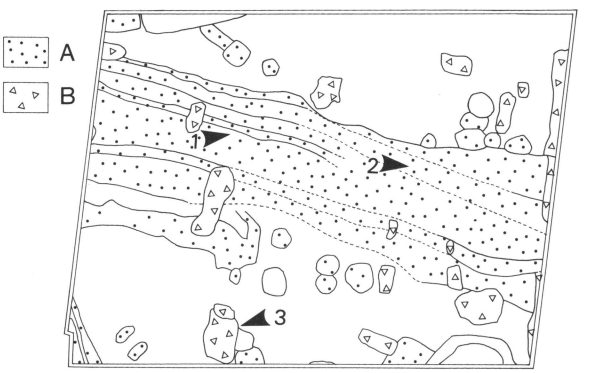
### ｂ．大毛池田遺跡

大毛池田遺跡では、服部（1994ａ）により古墳時代前期の水田耕作土により上端部を削り取られている砂脈が報告されている。この地震痕を形成させた地震の発生時期は古墳時代前期からさほど古くない時期であるとしているが、その後の調査により、地震発生時期推定の有力な手がかりとなる水田の使用年代については、廻間Ⅲ～松河戸Ⅱ式期（４世紀中頃～５世紀初頭）というより年代が得られた。砂脈により引き裂かれている水田耕作土より下位層の年代を示す試料は現在までに見つかっていないが、少なくとも廻間Ⅲ式期よりは古い時期に震度Ⅴ以上の地震が発生したことは確かであろう。

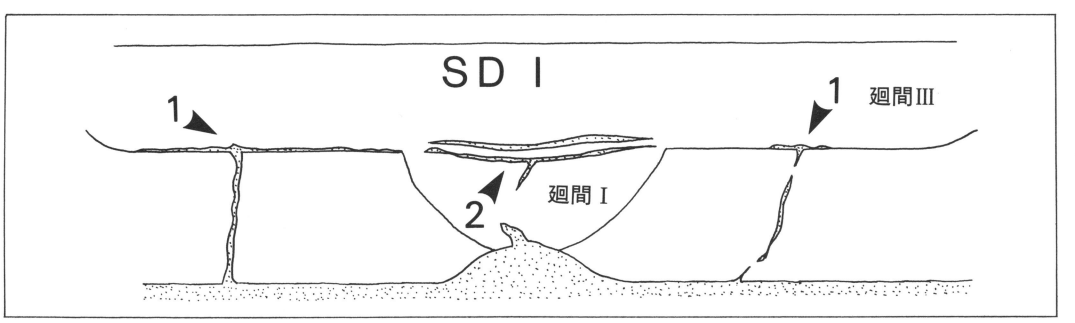
さらに、この水田層を引き裂き耕作土上に噴き出す噴砂が93Ｃ区の西壁で確認された（第９図）。この噴砂は先に報告されている砂脈と同様に、遺跡基盤を構成する粗粒砂～細礫層を給源として噴き出したものである。砂脈部分の最大幅は４㎜、




第11図　門間沼遺跡位置図(『岐阜』・『一宮』)




第12図　門間沼遺跡（94Ca区）遺構概略図
（A：古墳時代前期、B：中世）




第13図　古墳時代前期の地震痕概略図（図中の1、2は第12図での位置）

粗粒砂～細礫で満たされている。当時の地表面(水田面）での広がりはわずか半径30cm程度が残されているのみであり、噴砂丘に当たるような顕著な砂の盛り上がりは、その後の洪水などの削平により残存していない。また、この時期の地震に相当する地震痕は、現時点ではこの1つが確認されたのみである。

大毛池田遺跡ではこの他に、基底部から奈良時代の遺物が発見された溝中に上端部が削り取られる砂脈が確認された（第10図)。

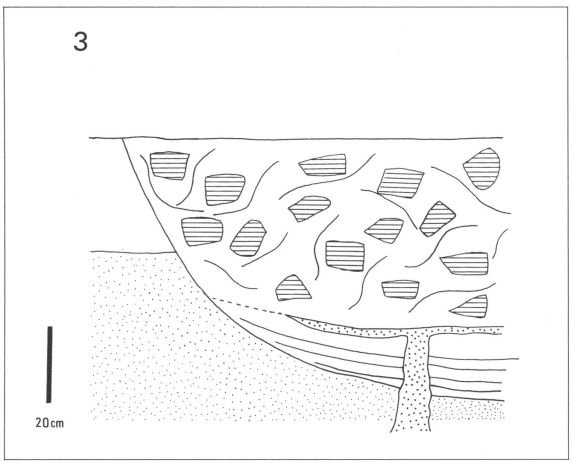
### c．門間沼遺跡

弥生時代前期の遺物、古墳時代前期から中期の溝・土坑、古墳時代後期の古墳周溝や中世土坑が広く分布する門間沼遺跡では、濃尾地震以外の2時期の地震痕が確認された。ここでは、2時期の地震痕について、典型的な観察面が得られた94Ca区について報告する。

古墳時代前期の地震痕

門間沼遺跡94Ca区では、ほぼ東西方向に延び、基盤である粗粒砂～細礫層を掘り込んだ古墳時代前期の溝SDIが検出された（第12図)。SDIの模式断面を第13図に示したが、溝の下層にあたる凹部分の埋土（黒色砂質シルト層）からは廻間I式の土器が、上層の広く浅い溝部分の埋土（暗灰色砂質シルト層）からは廻間III式の土器が出土している。また、下層埋土上端部には、上層底部とほぼ同じ面に広がる洪水性の砂層の堆積が認められる部分もある。

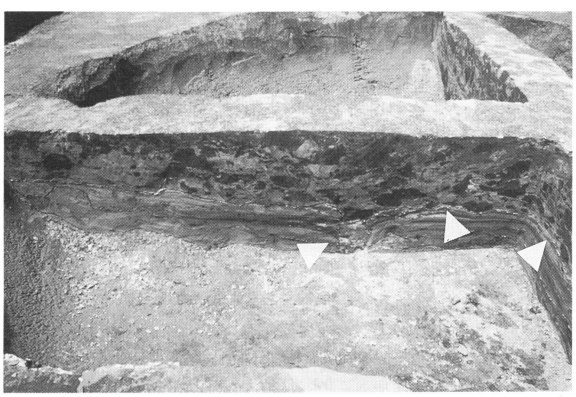
地震痕は、SDIの数カ所で確認された。その形状は第13図に示したようなもので、基盤砂層の液状化による砂脈が中心となるが、溝の下層部分が存在する部分と下層部分が存在しない部分では若干形態が異なる。まず下層部分が存在する部分では、基盤砂層が直径1m程度の範囲で5cmほどの高まりを形成し、その上端部はSDI下層埋土を引



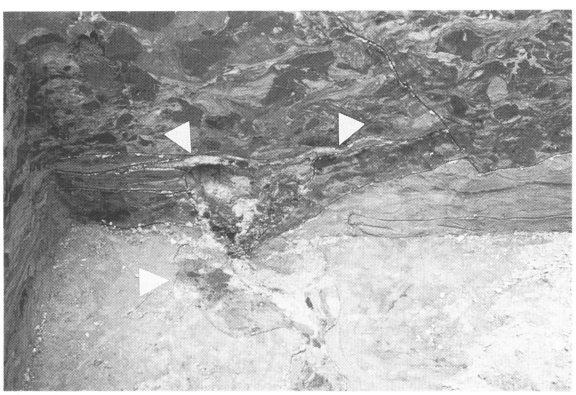

第14図　中世土坑内の噴砂（第12図の３）



第15図　中世土坑全景（第12図の３）



第16図　土坑内の噴砂



第17図　土坑内の噴砂

き裂いている。これは地震発生時に液状化した基盤砂層が物理的に弱い溝部分つまりSDＩの部分で力を解放したものと推定される。さらに、一部で下層埋土上端部（当時の堆積面と推定される）に噴き上がった噴砂丘が直径70cm、厚さ１～２cm程度観察された。

溝の下層が存在しない部分では、基盤砂層は高まりを形成せず、直接砂脈を噴き出している。この砂脈の幅は２～３mm程度で、当時の堆積面と推定される溝底では直径40cm、厚さ２～４mm程度の噴砂丘が観察された。

これらの地震痕と考古遺物との関係から推定される地震発生時期は、廻間Ⅰ式期以後、廻間Ⅲ式期以前である。この年代は大毛池田遺跡の古墳時代前期の水田耕作土に上端部を削り取られた砂脈を形成した地震の発生年代とほぼ同時期ではないかと考えられる。

中世の地震痕

門間沼遺跡では、14世紀中頃に属すると考えられる中世土坑も数基検出されている（第12図）。

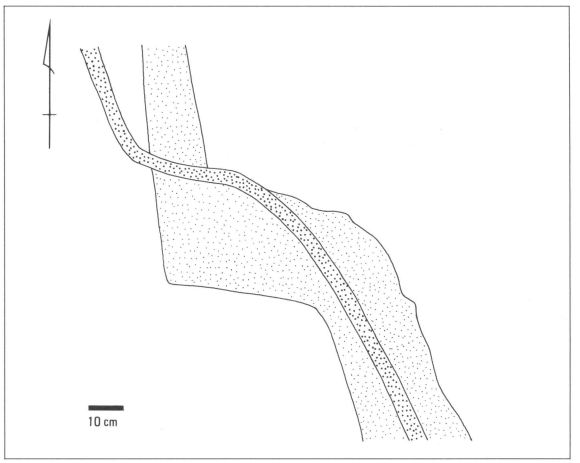
ここで見られる中世土坑は基本的には尾張低湿地地域で見られる大きな「地山」ブロックを含み短期間に埋め立てられたとされる土坑と同じであると考えられるが、土坑底部に湧水により形成されたラミナの発達する細粒砂層が数cm程度観察されることが特徴である。

地震痕は、第12図に示した門間沼遺跡94Ca区および隣接する94Cb区の数カ所の土坑内部に広がる噴砂として観察された。第14図はその模式的なスケッチであるが、地震痕の確認できる土坑内ではおよそ土坑基底部に広がるラミナの発達する砂層を引き裂きその上面に広がる噴砂と、土坑埋土を構成する「地山」ブロックと埋土基質両者の液状化および砂脈が主な形態となる。

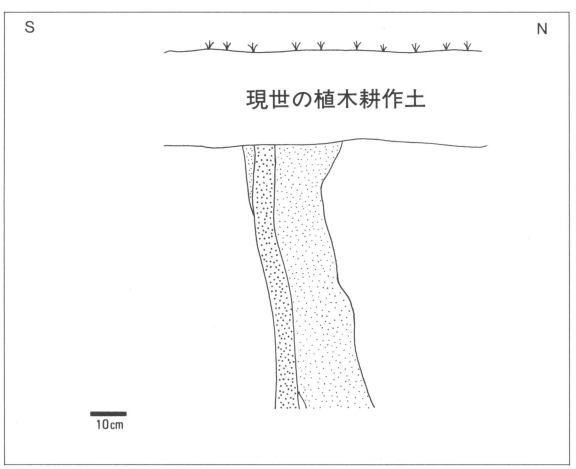
２つの地震痕が形成される過程を順に復元する



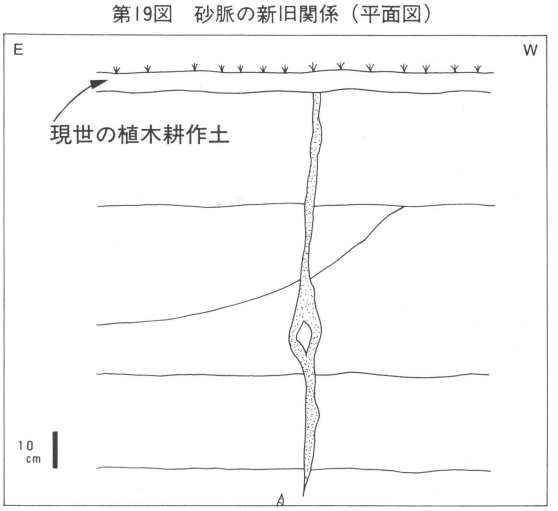

第18図　正楽寺・儀長寺通遺跡位置図（『清洲』）




第19図　砂脈の新旧関係（平面図）




第20図　砂脈の新旧関係（断面図）

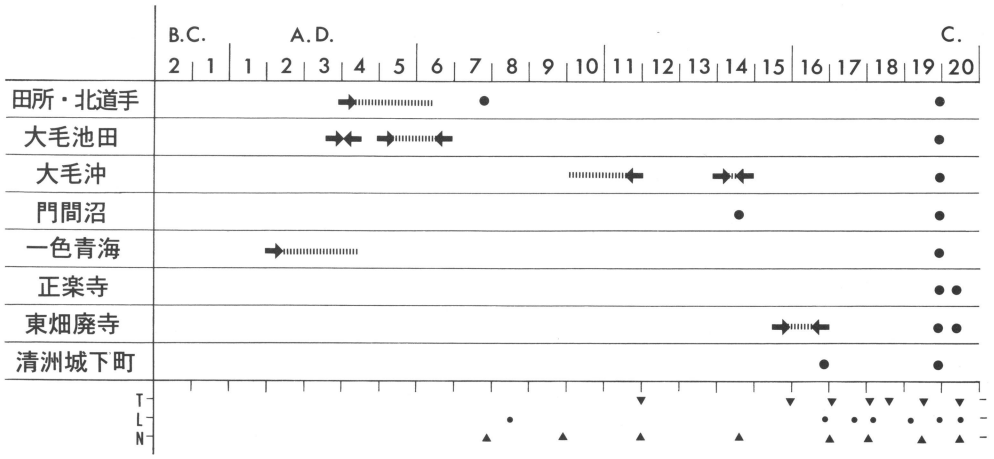



第21図　東南海地震の砂脈

と次のようになる。それは①土坑の掘削、②土坑の短期間放置による底部のラミナの発達する砂層の堆積、③地震発生による噴砂、ラミナの発達する砂層上への噴砂噴き出し、④土坑の急激な（人為的な）埋め戻し、⑤２度目の地震による「地山」ブロックと埋土基質両者の液状化および砂脈の発生、という過程である。中世土坑は掘削から埋め戻しまでが極めて短期間で行われていることが尾張各地の遺跡で報告されているが、門間沼遺跡においても掘削時に掘り出されたシルトの塊(「地山」ブロック）により埋積されていることから、掘り出したシルトが土坑周囲にブロックとして残っている比較的短期間の作業であったことがうかがわれる。⑤の２度目の地震による液状化では、シルトブロックそのものが基質と混じり合い流動化していることから、土坑埋め戻し間もない時期の地震と推定される。従って、土坑形成期（14世紀中頃）に比較的規模の大きい地震とそれに続く余震が発生した可能性が高い。

### ｄ．正楽寺・儀長寺通遺跡

稲沢市内を蛇行する三宅川右岸に位置する正楽寺・儀長寺通遺跡では、平成５年度および平成６年度の調査により埋積された近世までの全ての遺物包含層を引き裂き現在の植木耕作土に覆われる砂脈が多数確認された。この砂脈は、調査区の東側を流れる三宅川の流路の方向に支配されており、ほとんどが南北方向を示している。例外的に、遺構が存在し、かつ埋土が強固な部分では、遺構の縁を沿うように分布する。注目すべきは、第19、




第22図　地震痕から推定される古地震発生の時期
T：東海地震、N：南海地震、L：内陸型地震

20図に示すように砂脈に「切る」・「切られる」という新旧関係が存在することである。「切られる」側の旧期の砂脈は淡褐色の細粒砂層で構成されているが、「切る」側の新期の砂脈は淡灰褐色の細粒～中粒砂層で構成されている。両者は多くの部分で重なって観察されるが、第19図に示すように必ずしも重なるとは言えない。このことは、１回の地震で液状化し噴き出した砂が、液状化の終結とともに沈降したものであるとする考えを否定するものであり、明らかに２度の地震により形成された別々の砂脈であると断定できよう。しかし、新期の砂脈が形成されたときに旧期の砂脈により形成された地盤の弱い部分が利用されていたことは容易に想像ができる。ここでは、砂脈の形成過程を述べることが本論ではないのでこれ以上の議論は避ける。

砂脈の新旧関係という同様の現象は、やはり稲沢市の東畑廃寺跡でも報告されている（服部、1993ｂ）。この東畑廃寺跡では、1900年以降に天地返しを行った畑の耕作土を引き裂く砂脈が観察されており、1944年に発生した東南海地震により形成された地震痕であるとしている。若松（1991）によれば稲沢市周辺で明治時代以降液状化を起こした地震は1891年発生の濃尾地震と1944年発生の東南海地震地震の２つに限定できる。正楽寺・儀長寺通遺跡についても1994年度調査区において1900年以降に天地返しを行った植木畑の耕作土を引き裂く砂脈（第21図）が観察されることから、旧期の砂脈は濃尾地震によるもの、新期の砂脈は東南海地震によるものであると考えられる。

## ４．古地震発生時期についてのまとめ

濃尾平野の遺跡発掘調査現場で観察された地震痕から推定される古地震の推定発生年代を第22図にまとめた。

ここでは、現時点までに地震史料に登場しない歴史地震として、その存在が高確率で推定されるものについて古いものから順に整理しておく。

### ①古墳時代前期

門間沼遺跡で確認された地震痕により、土器編年の廻間Ⅰ式期以降、廻間Ⅲ式期以前の時期に砂の液状化および噴砂を形成する規模の地震（推定震度Ⅴ以上）が発生していた。近接する大毛池田遺跡の古墳時代前期（廻間Ⅲ～松河戸Ⅱ式期）の水田耕作土に上端部を削られる砂脈の存在も同時

期に大規模な地震が発生していたことを裏づける資料になろう。地震の規模については、同じ遺跡で確認される濃尾地震（1891年発生、宇佐美、1967による震度Ⅵ）の地震痕（砂脈）と比較しておくので参考にされたい。濃尾地震の砂脈は幅10～20cm、延長最大10m程度とかなり大規模なものであるが、古墳時代前期のものはせいぜい幅３cm程度、延長数mと規模的には濃尾地震にはるか及ばない。

平成５年度に稲沢市一色青海遺跡で確認された弥生時代中期に属する方形周溝墓の周溝埋土中に広がる噴砂も弥生時代中期以降のさほど時期を経ていない頃の地震と推定されるが、この古墳時代前期の地震による可能性もある。

**②古墳時代前期以降、奈良時代以前**

大毛池田遺跡の古墳時代前期の水田耕作土を引き裂き、耕作土より上位の地層堆積面に広がる地震痕から推定される地震である。この地層堆積面の考古学的な年代は残念ながら特定できないが、少なくとも奈良時代の遺物包含層より下位であることは確実である。その規模は、①の古墳時代前期の地震痕と同程度であり、濃尾地震の規模には及ばない。同時期に当てはまる地震痕として、平成５年度調査の北道手遺跡の古墳時代前期の黒色土を変位させる断層が存在する。

**③白鳳南海地震（684年発生）に相当する地震**

濃尾平野は、東海地震地域であり南海地震の影響を受ける地域ではない。しかし、東海地震と南海地震はともに震源を西南日本の太平洋沖の南海トラフとする同じ発生メカニズムの地震であり両者は数年のずれはあるにしろほぼ同じ時期に発生してきた地震である。すでに、服部（1993ａ、1994ａ）が報告しているように田所遺跡では、白鳳南海地震に相当する東海地震の存在を示す噴砂が確認されている。

**④中世の地震・・・14世紀**

中世の地震史料はその歴史的背景からも非常に少ない。とりわけ東海地域については、大きな災害を及ぼすような地震の記録は皆無である。しかし、大毛沖遺跡や門間沼遺跡で見られるような地震痕は、確実にこの時代に大規模な地震が発生していることを示している。このうち門間沼遺跡で確認された土坑中に噴き出す噴砂は、土坑が極めて短期間で掘削・埋め立てられたものであることから、地震発生年代が土坑の年代とほぼ一致するとみなすことが出来る。ちなみにこの土坑の推定年代は、14世紀中ごろとみなされている。同年代の大規模な地震として1361年に畿内・土佐・阿波に津波を伴う大きな被害を与えた地震（正平南海地震）が記録されている。この地震も③で述べた白鳳南海地震と同じ南海トラフに震源を持つ地震であり、ほぼ同時期の東海地震の発生が推定される地震である。地震史料からはその事実は見いだせないが、門間沼遺跡の地震痕は正平南海地震に対応する東海地震の存在を示す証拠になるものと考えられる。大毛沖遺跡の河川堆積物の変形も同時期の地震痕の可能性が強い。

**⑤天正地震（1586年発生）**

天正地震の地震痕は、森・鈴木（1989）をはじめとした清洲城下町遺跡で確認されている。それ以外の遺跡では、確実に天正地震のものと考えられる地震痕は報告されていないが、岩倉市の岩倉城遺跡（森・鈴木、1990）、一宮市の田所遺跡（服部、1993ａ）、稲沢市の東畑廃寺（服部、1993ｂ）などでは、その可能性のある地震痕が報告されている。

**⑥濃尾地震（1891年発生）および東南海地震（1944年発生）**

濃尾地震の地震痕は、第１図に示した全ての遺

跡で確認されている。また東南海地震の地震痕は、稲沢市の東畑廃寺（服部、1993ｂ）と正楽寺・儀長寺通遺跡で確実なものが確認されている。しかし、この２つの地震は考古学的調査を目的とする遺跡の発掘調査現場では、新しすぎること、近年の耕作などにより上限が確認できないことなどから正確に識別することは難しい。

以上が、現在までに遺跡で確認された地震痕から発生が推定される、あるいは地震史料との照合によりその存在が確実な歴史時代の地震であるが、このほかにも、現時点では年代が確定できない地震痕も存在する(大毛沖遺跡や大毛池田遺跡など)。また、発掘調査が進行中で年代が十分に議論出来なかったが、稲沢市教育委員会により調査が進められている地蔵越遺跡では、８～10世紀頃に当たるであろう地震痕も見つかっている。こうした成果は発掘調査の成果が公表されるごとに明らかにされると思われるので、今後に期待したい。

また、地震痕の新たな形態として遺構内に噴き出す噴砂の検出が注目される。これは遺構そのものの年代が地震発生年代にきわめて近接した年代を示すことになるので重要な形態であり、今後最も注目すべき地震痕になるものと思われる。

**謝辞**

本稿をまとめるにあたり京都大学理学部の岡田篤正教授、通商産業省工業技術院地質調査所の寒川旭主任研究官、稲沢市教育委員会の北條献示・日野幸治両氏、愛知教育大学の藤原千里氏をはじめ（財）愛知県埋蔵文化財センターの方々に指導、助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

**文献**

服部俊之（1993ａ）濃尾平野における歴史時代の地震痕.（財）愛知県埋蔵文化財センター年報平成４年度, 126-136.

服部俊之（1993ｂ）東畑廃寺跡平成４年度発掘調査における地震痕について.東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅴ), 28-31,稲沢市.

服部俊之（1994ａ）濃尾平野における歴史時代の地震痕－その２－.(財) 愛知県埋蔵文化財センター年報平成５年度, 134-142.

服部俊之（1994ｂ）濃尾平野の遺跡における古地震の痕跡. 日本第四紀学会講演要旨集, **24**,130-131.

服部俊之（1994ｃ）濃尾平野の遺跡から見つかった古地震の痕跡. 第２回郷土の自然を考える講演会要旨集, 7-10.

稲沢市教育委員会（1989）尾張国府跡発掘調査報告書（ＸⅠ）. 19p, 稲沢市.

森勇一・鈴木正貴（1989）愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義. 活断層研究, **7**, 63-69.

森勇一・鈴木正貴（1990）愛知県清洲城下町遺跡及びその周辺から発見された歴史地震の記録. 歴史地震, **5**, 33-41.

寒川旭（1988）考古学の研究対象に認められる地震の痕跡. 古代学研究, **116**,1-26.

若松加寿江（1991）日本の地盤液状化履歴図. 341p, 東海大学出版会.